

庫文

2549-2550

集文燕

註編藏返原

唐書

庫文波岩

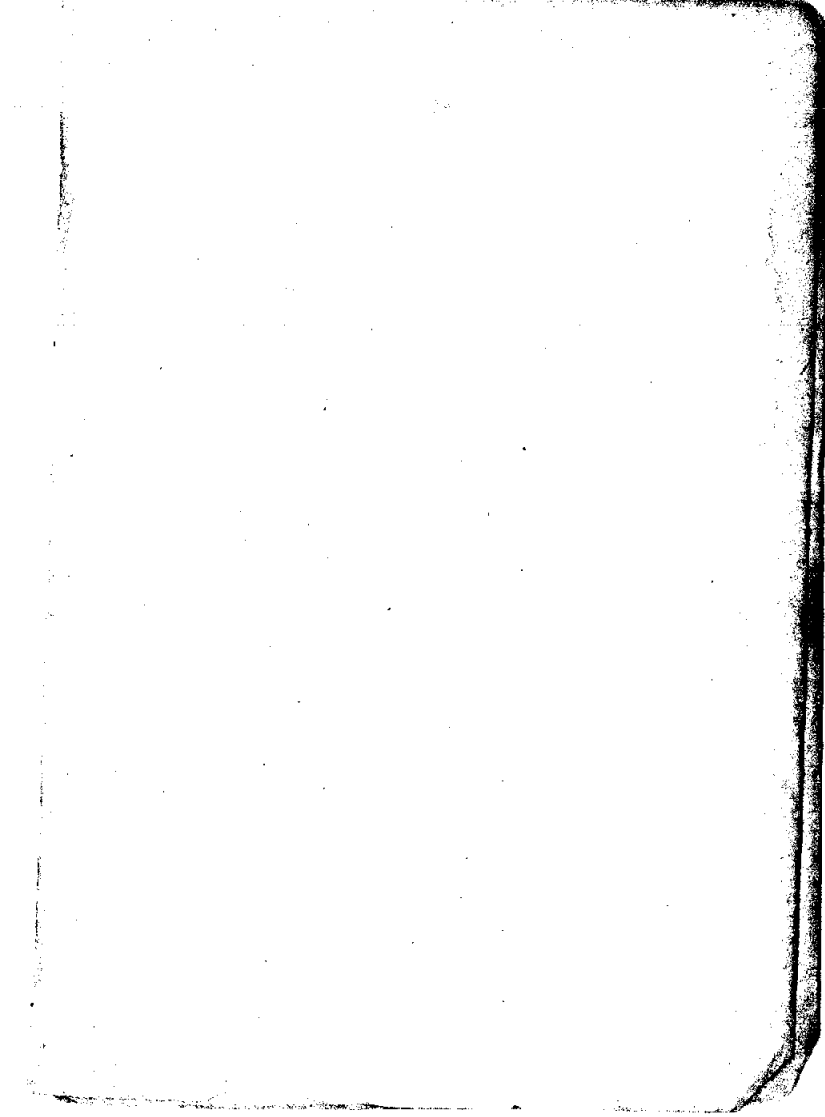
2549—2550

集文蕉芭

註編藏退原頴



店書波岩



目次

例言

本篇

一、貝おほひ序	一一	一二、伊勢紀行跋	三三
二、十八番發句合跋	一三	一三、雪丸げ	三四
三、常盤屋の句合跋	一三	一四、閑居箴	二五
四、柴の戸	一五	一五、蓑蟲説跋	二六
五、寒夜辭	一五	一六、續の原跋	二九
六、虛栗跋	一六	一七、四山瓢	三〇
七、土峯讃	一七	一八、歌仙の讃	三一
八、竹の奥	一八	一九、保美の里	三三
九、初する音	一九	二〇、書林風月に	三三
一〇、野晒紀行繪卷跋	二〇	二一、杖突坂の落馬	三四
一一、自得箴	二二	二二、歳暮	三六

二三、伊賀新大佛之記……………三七

二四、伊勢參宮……………三八

二五、高野詣……………三九

二六、葛城山吟……………四〇

二七、十八樓記……………四一

二八、更科姨捨月之辨……………四二

二九、權七に示す……………四三

三〇、越人に送る……………四四

三一、曠野集序……………四五

三二、文字摺石……………四六

三三、笠島……………四七

三四、松島賦……………四八

三五、法の月……………四九

三六、銀河序……………五〇

三七、溫泉頌……………五一

三八、桂下國家の花……………五二

三九、紙衾記……………五三

四〇、明智が妻……………五七

四一、洒落堂記……………五八

四二、幻住庵記(初稿)……………五九

四三、幻住庵賦……………六〇

四四、幻住庵記……………六一

四五、四條の納涼……………六二

四六、雲竹の讃……………六三

四七、鉢叩の歌……………六四

四八、烏之賦……………六五

四九、落柿舎記……………六六

五〇、水の音……………六七

五一、月見賦……………六八

五二、堅田十六夜之辨……………六九

五三、成秀庭上松を譽むる言葉……………七〇

五四、宿明照寺……………七一

五五、卒都婆小町讃……………七二

五六、雪の尾花……………七三

參考篇

五七、栖去之辨……………	一〇五	七〇、白髮吟……………	一六八
五八、素堂壽母喜壽賀……………	一〇六	七一、煤掃之說……………	一三〇
五九、芭蕉を移す詞……………	一〇八	七二、西行像讚……………	一三三
六〇、移芭蕉辭……………	一一〇	七三、一枝軒……………	一三三
六一、僧專吟餞別之詞……………	一一一	七四、机銘……………	一三四
六二、柴門辭……………	一一二	七五、座右銘……………	一三五
六三、送許六詞……………	一一四	七六、塔山餞別辭……………	一三六
六四、弔初秋七日雨星……………	一一五	七七、杵折讚……………	一三八
六五、閉關之說……………	一一六	七八、阿彌陀坊……………	一三九
六六、悼嵐蘭詞……………	一一九	七九、色と義……………	一四〇
六七、東順傳……………	一二三	八〇、三聖圖讚……………	一四一
六八、素堂菊園之遊……………	一二五	八一、贈風紋子號……………	一四三
六九、澁笠銘……………	一二六	八二、詞書類……………	一四四
追補……………			一五八
參考篇……………			一六三
一、鷄舟……………	一六五	二、汝路の鐘……………	一六五

三、玉すだれ……………	一六六	一一、會式……………	一七九
四、伏見舟……………	一六七	一二、祖翁壁書……………	一八〇
五、龜子が良才……………	一六八	一三、祖翁口訣……………	一八〇
六、蘭の香……………	一六九	一四、行脚掟……………	一八三
七、石臼之讃……………	一七〇	一五、雪見賦……………	一八六
八、應變論……………	一七三	一六、雜……………	一八七
九、俳席の掟……………	一七五	一七、和歌……………	一八九
一〇、俳席三ヶ條……………	一七八	一八、狂歌・鄙歌……………	一九一

芭蕉文集について……………

一九七

例言

一、本書は芭蕉の遺文を諸書に摺摭して、これをほゞ年代順に排列したものである。

一、芭蕉の遺文として確實と認められるもののみを採つてこれを本篇とし、なほ疑はしいものは別に参考篇を分つてその中に收めた。

一、参考篇には確實性の薄弱なもの、偽作の疑が多いものの外、明かに偽作と斷すべきものでも、例へば「行脚掟」の如き従來流布の汎いものは、参考の爲姑く收めておく事にした。

一、芭蕉には和歌・狂歌の作も若干あるので、便宜これを参考篇に收めた。その眞偽等については解説を参照せられたい。

一、芭蕉の文章はこれを廣義に解すれば、紀行・日記はもとより、評語・句合等の類にも及ぶべきであるが、それらについては既に本文庫中に編纂されたものがあるので、今は専ら短篇の作品のみを集めた。

一、句の詞書の中には短篇と認めてもよいものがあるので、それらは一括して詞書類として最後に掲げた。又獨立した一篇としてあげた中にも、詞書程度のもも少くないが、その區別は全

く便宜に従つたにすぎない。なほ詞書類のみは年代順によらず、句の四季別に排列した。

一、毎篇に出典・年代等に關する解説を添へたが、詞書類のみはこれを略し、脚註に若干の註を加へるにとどめた。

一、脚註は本文の異同に關する事を主とし、なほ語句の註解に若干及んだ。たゞし語句の註は調査の至らぬものが多く、今後の補正を期したいと思ふ。

一、本文はすべてその出典としたもののまゝに従ひ、たゞ句讀と濁點だけを便宜新に施す事とした。原典にすでに濁點があるものは、右傍に「マ、」と附記してこれを明かにした。なほ一々の解説を参照されたい。

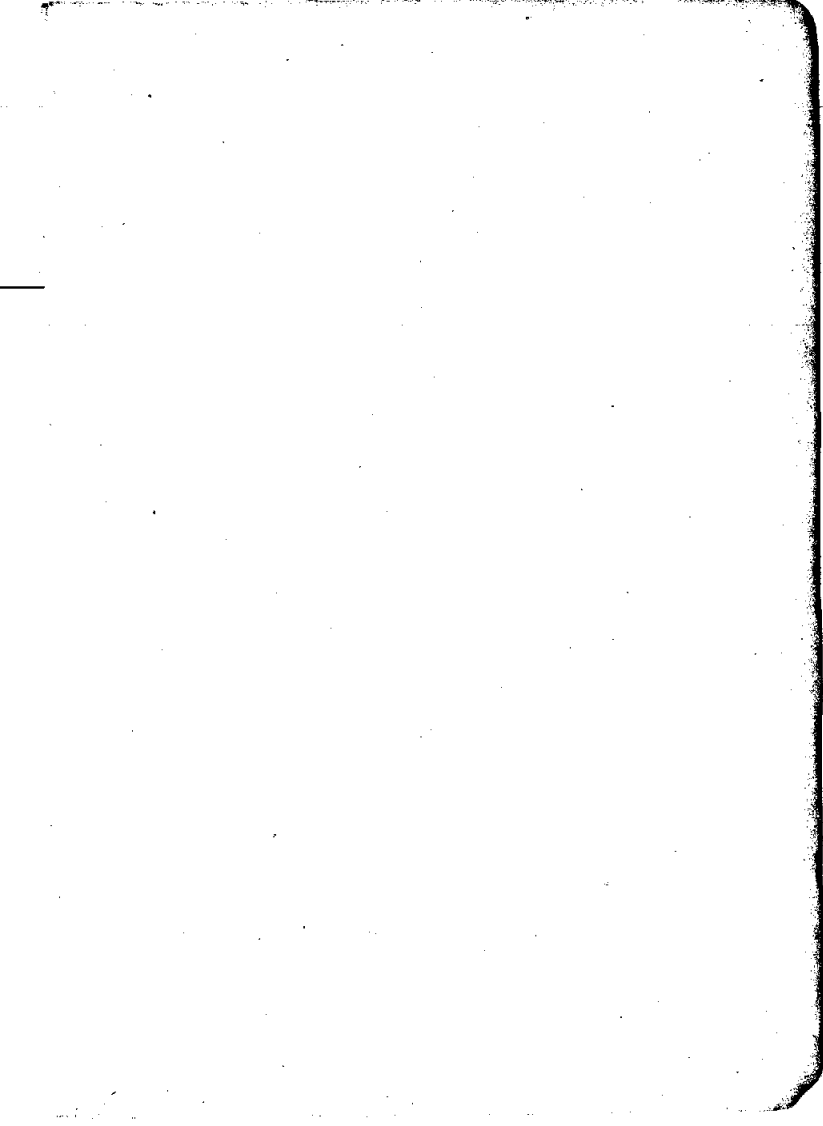
一、本書の編纂に當つて、先輩の研究に負ふ所は甚大である。謹んでその學恩を感謝する。

昭和十五年二月

穎原退藏

本

篇



一、貝おほひ序

『貝おほひ』は芭蕉が寛文十二年の正月、郷里伊賀上野の天満宮に奉納した三十番の句合で、芭蕉の處女撰集として知られて居る。原板本は夙く湮滅に歸し、わづかに柳亭種彦の寫しておいた本によつて、その面目を窺ふのみであつた。しかも種彦のよつた本も寫本であつたらしい。その後舊平出文庫本の中に、確かに原板本によつたと思はれる一寫本が発見され、こゝに板本の存在する事は明かとなつた。而して最近遂にその原板本も世に現はれ、現に大和、綿屋文庫に藏されて居る。今本文はこの原板本による。なほ濁點は原板本にすべて施してあるので、(マ、)と一々附記しなかつた。

『貝おほひ』の内容はすでに多くの翻刻本があつて知られて居るが、寛文當時に行はれた小歌や流行語を用ひた發句を左右に合せ、芭蕉がこれを判したものである。その判の詞もまた小歌の文句や流行言葉を用ひ、輕妙自在な機才を發揮して居り、單に芭蕉の處女撰集としてののみならず、談林的傾向の著しい作品として、俳諧史上からもその特異な地位が認められねばならぬ。今は文集として序文だけをあげるにとゞめたが、天理圖書館發行『日本文化』昭和十二年

六月號に、その全部が原板本によつて翻刻されて居る。(同誌杉浦正一郎氏「板本貝おほひ翻刻」参照)

小六ついたる竹の杖、ふし／＼多き小歌にすぎり、あるはやり言葉の、ひとくせあるを種として、いひ捨られし句共をあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、其かたはらに、みづからがみじかき筆のしんきばらししに、清濁高下をしるして、三十番の發句あはせを、おもひ太刀折紙の、式作法もあるべけれど、我まゝ氣まゝにかきちらしたれば、世に披露せんとはあらず。名を貝おほひといふめるは、あはせて勝負をみる物なればなり。又神樂の發句を巻軸にをきぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、小歌にも子こゝろざすところの誠をてらし見給ふらん事をあふぎて、當所 あまみつおん神の御やしろの手向ぐさとなしぬ。

寛文拾二年正月廿五日、伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にしてみつから序す。

○六つは慶長の頃江戶の小
坂に住んだ上關東六
美男といふ。糸手初
竹集「小六といふたる
八中は笛、小六は末
尺八は女衆のそれ、
は女郎衆の輦に一
等にその他小六は
等にした小唄が六
流行した。小唄が
稱された。小唄が
○ふし多き竹
の縁で續く
○つべし連節。
左右に並ぶ對する意。
○しんきばらし筆
の心（シン）とかく
○太刀折紙思ひ立
ちとかく
○巻軸一巻の最後
三十分目は神樂の句
である。

○卷軸——一巻の最後。
三十番目は神樂の句
である。

二、十八番發句合跋

六番の句合と十二番の句合を判して、その終に附した文である。寫本として傳はつたもので、刊行には至らなかつたらしい。

前後十八番の句合、やつがれ馬頭になりて、物定の博士にさゝれ侍る。十面顔に分別たゞく比とちぎりたるさまか。我ながらかたはらいたけれど、そのかたはらに筆をけがして、かみ、中、下の品をわから侍るを、たま／＼にもうなづく人あれかしとこそ。

延寶六初冬日

坐與庵桃青

宣

三、常盤屋の句合跋

杉風が八百屋物を題材とした自句合廿五番を判した『常盤屋の句合』の跋文である。其角の

○馬頭——源氏物語の雨夜の品定による。
○十面——蓋面の宛字。

自句合廿五番を判した『田舎の句合』と共に、延寶八年刊行された。

詩は漢より魏にいたるまで四百餘年、詞人才子文體三たびかはるといへり。
倭歌の風流代々にあらたまり、俳諧年々に變じ月々に新也。今こゝに青物の種々をあつめ、二十五番の句合となして予に判をこふ。誠に句々たをやかに、作新數、見るに幽也思ふに玄也。是を今の風體といはんか。且是に名付て常盤屋といふは、時を祝し代をほめての名なるべし。情神田須田町のけしきを思ふに、千里の外の青草は麒麟につけてこれをはこばせ、鳳の卵は糠にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の葉人參綠もふかく、唐のからしの紅なるも、今此江戸にもてつどひ、風たうきびの菜をならさず、雨土生姜をうごかさねば、青物の作意時を得て、かいわり菜の二葉に松茸の千とせを祈り、芋の葉の露ちりうせずして、さゝげのかづら長くつたはれらば、そらまめをあふぎて、今此時をこひざらめかも冬瓜。

于時延寶八庚申季秋日

華桃園

○魏——魏の誤。

○文體三たび——心歌のさいめにも「もうこしにも文體三たびかはるとな」とある。

○須田町——當時青物市場として名高かつた。

○風たうきびの——王充論衡「風不鳴條、雨不破塊、五日一風、十日一雨」太平の象をいふ。
○芋の葉の——古今集の序文「松の葉の數りうせずしてまさきのかづら長くつたはとり、鳥の跡ひさしくとどまれらば」による。

四、柴の戸

梅人の『續深川』（寛政三年刊）に出づ。芭蕉が深川の草庵に入つたのは延寶八年の冬と推定され、即ち當時の作である。

こゝのとせの春秋、市中に住侘て、居を深川のほとりに移す。長安は古來名利の地、空手にして金なきものは、行路難しと云けむ人のかしこく覺へ侍るは、この身のとほしき故にや。

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

五、寒夜辭

備前岡山の森森庵松後の追善集『夢三年』^{（みよしとせ）}（寛政十二年刊）に出で、松後の記録しておいたものによるといふ。内容から見て信じてよからう。句は天和元年の作で、文も同時の作であらう。

深川三またの邊りに艸庵を侘て、遠くは土峰の雪をのぞみ、ちかくは萬里の船をうかぶ。あさぼらけ漕行船のあとのしら浪に、荳の枯葉の夢とふく風もやゝ暮過るほど、月に坐しては空き樽をかこち、枕によりては薄きふすまを愁ふ。

艸の聲波を打て陽氷る夜や涙

六、虚栗跋

『虚栗』（天和三年刊）の跋文である。

栗とよぶ一書、其味四あり。

李杜が心酒を骨て、寒山が法粥を繋る。これに仍而其句、見るに遙にして聞に遠し。侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。

戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金鑄三小案、上陽人の閨の

○土峰——富士山。
○あさぼらけ——漢醫沙彌の歌「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟のあとの白浪」（拾遺集）
○荳の枯葉——西行「津の國の蕪波の春は夢なれや荳の枯葉に風渡るなり」

○李杜——李白・杜甫。

○山家——山家集。

○上陽人——上陽は玄

中には、衣桁に葛のかゝるまで也。下の品には眉ごもり親ぞひの娘、娶姑のたけき争ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず、白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其ノ話震動虚實をわかつた。賣の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を治ふ。是必他のたからにあらず、汝が實にして後の盗人ヲ待。

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

七、士峯讃

『芭蕉句選拾遺』（寶曆六年刊）秋之部に、句の詞書として出で、「甲州よし田ノ山家に所持ノ人ありしを、今東武下谷菊志秘藏なるよし、行脚祇法より傳寫して出ス」と附記してある。年代は明かでないが、貞享元年野ざらし紀行のをりの作か。姑く同年作と推定しておく。

崑崙は遠く聞、蓬萊・方丈は仙の地也。まのあたり士峯地を抜て蒼天をさゝ

○龍の泉——龍泉は刀名。この宮に居た宮女たちが、楊貴妃に龍を奪はれて空房に一生を終つた事、白氏文集「上陽白髮人」に見ゆ。

名。忽を淬ぐによい泉の名。

え、日月の爲に雲門をひらくかと、むかふところ皆表にして美景千變ス。詩人も句をつくさず、才士、文人も言をたち、畫工も筆捨てわしる。若狷姑射の山の神人有て、其詩を能せんや、其繪をよくせん歟。

雲霧の暫時百景をつくしけり

八、竹の奥

青良の『句仁名盡集』(文政二年刊)に「大和國當麻寺より六丁先、竹の内といふ宿長の末葉、今油屋喜衛門所持。蕉翁眞跡の一軸予その家に至り、書寫を爰にあらはす」と言つて、眞蹟によつた一文を掲げてある。句は『野ざらし紀行』に出るものであり、又鳥醉の『夏爐一路』によつても、竹内村に芭蕉の眞蹟が残つて居た事は知られる。『句仁名盡集』は後世の出版ではあるが、これはそのまゝ信じてよいであらう。貞享元年の作。〔追補參照〕

大和國竹の内といふ處に日頃とまり侍るに、その里の長なりける人、朝夕間來りて、旅の愁を慰けらし、誠その人尋常にあらず。こゝろは高きに遊んで、

○若狷姑射の山——莊子、
逍遙遊篇に見え、
神の棲む所。

身は芻蕘雉兔の交をなし、自鋤を荷て、淵明が園にわけ入、牛を牽ては箕山の隠士を伴ふ。且その職を勤て職に倦ず。家は貧しきを悦てまどしきに似たり。唯是市中に閑を偷て、閑を得たらん人は此長ならん。

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

蕉散人桃青

九、籾する音

鳥酔の『夏爐一路』（寶曆八年刊）に出づ。鳥酔が大和地方に遊んで得た眞蹟によつたので、「右一軸は此春江都の白水子へ譲ぬ」と附記してある。『一葉集』にも「與或人文」と題して收めてあるが、二三字句の異同がある。鳥酔の寓目した眞蹟とは又別のものによつたのであらうか。句は他に所見がないので年代を推定し難いが、季節から見て野ざらし紀行の當時らしい。姑く貞享元年の作としておく。

大和國長尾の里と云處は、さすがに都遠きにあらず、山里ながら山ざとに

○長尾の里——大和國北

○芻蕘雉兔——芻蕘は草茹と雉兔は雉と兔は兔と。○箕山——箕山は隱士。○淵明——淵明は陶方。○閑を偷て——閑を偷ては閑を偷て。○まどしき——まどしきはまどしき。○似たり——似たりは似たり。○唯是市中——唯是市中は唯是市中。○閑を得たらん人は——閑を得たらん人は閑を得たらん人は。○此長——此長は此長。○ならん——ならんはならん。

似ず。あるじ心有さまにて、老たる母のおはしけるを、其家のかたへにしつらひ、庭前に木草のおかしげなるを植置て、岩尾めづらかにすゑなし、手づから枝をたはめ石を撫ては、此心蓬萊の島ともなりね、生薬とりてんよと老母につかへ、慰めなんどせし實有けり。家貧して孝をあらはすとこそ聞なれ、貧しからずして孝を盡す、古人も難事になんいゝける。

冬しらぬ宿や糲する音あられ

芭蕉菴桃青 在印

一〇、野晒紀行繪卷跋

野晒紀行の繪卷に跋した文である。繪は中川濁子の筆で色を傳してある。紀行の文の筆者は明かでないが、或は畫者と同人であらうか。終に素堂の跋があり、最後に芭蕉自筆でこの文がついて居る。年代は明かでないが、野ざらし紀行の後多く距らない時であらう。今は姑く旅行から歸つた貞享二年の作と推定しておく。句は他に所見がない。右の繪卷は大橋圖書館藏。

此一卷は必記行の式にもあらず、たゞ山橋野店の風景一念一動をしるすのみ。

葛城郡。今磐城村といふ。竹の内の隣村。
○山里ながら——葉集「山里にして山ざとにあらず」
○岩尾——巖。
○たはめ——葉集「ため」
○此心——同、此心の二字なし。
○なりね——同「なりぬ」
○生薬——イククスリ。不死の薬。

爰に中川氏濁子、丹青をして其形容を補しむ。他見可恥もの也。

たびねして我句をしれや秋の風

芭蕉散翁書

一一、自得箴

『陸奥千鳥』（元祿十年刊）に句の詞書として出で、『之乎利集』所載の眞蹟（今菊本直次郎氏藏）にも見える。又風陽・兎什共撰の『先手後手集』にも「自得箴」と題して掲げてあり、これはもと眞蹟によつたものと思はれる。『芭蕉翁文集』所收のものはこれと文は同一だが、句が下五「年の暮」とある。蝶夢の誤であらう。句は其角の貞享三年歳旦帖に出て居り、貞享二年歳暮の作である。三者共に異同があるので併せ掲げる。

(一)

乞て喰貰ふてくらひ、さすがにとしのくれければ、

めでたき人の數にもいらむ老の暮

(二)

（陸奥千鳥）

もらふてくらひこふてくらひ、やをらかつゑもしなず、としのくれければ、

めでたき人のかずにも入む老のくれ

(眞蹟)

(三) 自得箴

もらふてくらひこふてくらひ、飢寒わづかにのがれて、

めでたき人の數にもいらん老の喜

はせを

(先手後手集)

一二、伊勢紀行跋

去來・千子^{チホ}の兄妹が某年八月伊勢に詣で、その紀行を芭蕉の許に送つたのに書添へた文である。この紀行中の句が貞享四年十一月刊行の『續虛栗』に見えるので、それは貞享四年の事と推定されて居る。『笈日記』には「西東あはれさおなじ秋の風」といふ形で句が出て居り、「いづれの時の秋にや、去來・千子が伊勢まうでの比道の記かきて深川に送りけるに、奥書の褒美ありて」と記し、『泊船集』にも「これは去來・千子いせの紀行書て深川へ送りけるかへりに、此句を其おくに書付たまひし也」とあつて、芭蕉はこの文を深川の草庵でものしたのである。

通説の如く貞享四年十月笈の小文の旅に出かける前にものしたと見ても差支ないが、この文によれば芭蕉は去來とまだ會つて居ないやうにも思はれ、或はその前年貞享三年秋の事ではあるまいか。姑く貞享三年と推定しておく。紀行は嘉永三年冬、柿園南々の藏する稿本に一寫本を校合し、丈艸の『寐轉草』と併せ、惺庵西馬が考訂を加へて初めて上梓された。今本文はこれによる。跋文のみはすでに『芭蕉翁文集』・「あが冠」(寛政元年刊)にも收め、二三の小異がある。

根なし草の花もなく實もみのらず、たゞいやしき口にいひのゝしれるたはぶれごとあり。さるを其角ひとゝせ都の空に旅宿せし頃、向井氏去來のぬし、むつまじき契り有て、酒のみ茶にかたる折ゝ、甘き、からき、しぶき、淡き心の水の浅きより深きをつたへて、將に一掬して百川の味をしれるなるべし。今年の秋いもつとをゐて伊勢に詣づ。百川の秋風より、かの濱荻折しきて、とまり／＼のあはれなることども、かたみに言顯して我草の戸の案下に贈る。ひとたび陰じて感を起し、二たび誦して感をわする。三たびよみて其無事なることを覺ゆ。此人や此道にいたれり盡せり。

○たはぶれ云々——芭蕉文集「たはぶれ」の世なるを、其角一とせ

○將に——芭蕉翁文集「終に」

○百川——こゝは京都の白川。紀行に去來の句「百川の屋根に石おく秋の風」あり

○かの濱荻——伊勢の濱荻。芭蕉翁文集「かの濱荻の聲を聞て」とまり／＼の

○かたみに——同「かたはし」

東西のあはれさひとつ秋の風

芭蕉庵桃青

○東西の——同「東に
し」

一三、雪丸

曾良の遺稿『雪丸げ』の巻頭に掲げてある。なほ眠郎の『雪の薄』（安永六年刊）にも「雪ま
るげの文」と題して収め、その凡例に

哥仙并雪丸文深川八貧ハ同國諏方郡龍湖カ岡ノ古人周徳ト云者、元文丁巳ノコロ雪丸集ト
號シテ書ヲクト云トモ、予モ曾良ノ直筆ト云書ヲ所持スル故ニ臨書シテアラワス。

と述べて居る。又梅人の『續深川』（寛政三年刊）にもこの詞書と共に句を出し、若人の『花
脴』（天保五年刊）には信州諏訪の久保島氏所持の眞蹟を摹刻して載せてある。句は『續虚栗』
に出で貞享三年の作。今本文は『雪丸げ』による。

曾良何某此あたりちかく、かりに居をしめて、朝な夕なにとひとつとは
る。我くひ物いとなむ時は、柴を折くぶるたすけとなり、茶を煮夜は
きたりて軒をたゞく。性隠閑をこのむ人にて、交金をたつ。あるよ雪

○何某——雪の薄・續深川・花
脴何某は」
○くひ物——續深川「喰物を」
○柴を折くぶる——續深川、
花脴「柴おりくぶる」

にとはれて、

きみ火をたけよき物見せん雪まろげ

はせを

一四、閑居箴

『本朝文鑑』（享保三年刊）卷之三、箴類に出づ。句は『勸進帳』（元祿四年刊）に「深川雪夜」と題して見える。芭蕉が深川の庵に冬を送つた時を、元祿四年以前に求むれば元祿元年か貞享三・二年等となるが、句の趣から見てかの深川八貧時代の作らしい。而して八貧の句は貞享年代と思はれるので、今は假に貞享三年の作と推定しておく。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にも收む。

閑居ノ箴

芭蕉庵

あら物ぐさの翁や。日比は人のとひ來るもうるさく、人にもまみへじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず、ひとり酒のみて心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あ

○軒を——續深川「氷を」とあるのは板下の誤であらう。

○雪に——雪の薄・花簾「雪を」

○雪まろげ——雪の薄・花簾「雪まろげ」

ら物ぐるおしの翁や。

酒のめばいとゝ寐られね夜の雪

○物ぐるおし——物狂
ほし。

一五、蓑蟲說跋

素堂が芭蕉から「蓑蟲の音を聞きに來よ草の庵」と招かれて芭蕉庵を訪ね、その後「蓑蟲說」(『風俗文選』所載)の一文を草した。そこで芭蕉が更にその終に添へた一文である。素堂の文を蚊足が書き、それに芭蕉自らこの文を書き添へた眞蹟が、今菊本直次郎氏の所藏となつて居る。もと杉風の家に傳來したものである。翠蓑翁(朝湖、英一蝶のこと)の筆になる蓑蟲の畫に、芭蕉が蓑蟲の句を讚したものが添うて居る。なほ菊本氏の所藏中に、別にこの文だけを記した一軸があり、それは杉風の筆と推定される。文に多少の異同がある。『風俗文選』註解稿本』卷四に「みのむし跋」と題して載するもの、及び勝峯氏の新編芭蕉一代集に信州中野田中萬次郎氏藏の眞蹟として收むるものは、この後者と内容が同一である。今菊本氏の藏によつて兩者併せ掲げた。その一は素堂の蓑蟲說に添うたもの、その二は別に一軸としたものである。句は『續虛栗』に出て貞享四年の作と推定される。

(一)

草の戸さしこめて、ものゝ佗しき折しも、偶蓑蟲の一句をいふ。我友素翁はなはだ哀がりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や蛸をぬひ物にし、其文や玉をまろばすがごとし。つらくみれば離騒のたくみ有にたり。又蘇新黃奇あり。はじめに盧舜・曾參の孝をいへるは、人におしへをとれと也。其無能不才を感じる事は、ふたゝび南花の心を見よとなり。終に玉むしのたはれは色をいさめむとならし。翁にあらざれば誰か此むしの心をしらん。靜にみれば物皆自得すといへり。此人によりてこの句をする。むかしより筆をもてあそぶ人のおほくは、花にふけりて實をそこなひ、みを好て風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし、其實猶くらひつべし。こゝに何がし朝湖と云有。この事を傳へきゝてこれを畫。まことに丹青淡して情こまやか也。こゝろをとゞむれば蟲うごくがごとく、黃葉落るかとうたがふ。みゝをたれて是を聴けば、其むし聲をなして秋のかぜそよ／＼と寒し。猶閑窓に開を得て、兩士の幸に預る事、蓑むしのめいばくあるにたり

○素翁——素堂。

○蘇新黃奇——陳後山詩話「王介甫以工、蘇子瞻以新、黃魯直以奇」。蘇東坡の詩が新しく、黃山谷の詩が奇なるを稱した語。

○南花——莊子をさす。

○朝湖——畫家英一撰。

(二)

芭蕉庵桃青

草の戸さしこめてものゝ佐しき折しも、偶蓑蟲の一句を云。我友素翁甚長がりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦をぬひ物にし、其文や玉をまろばすがごとし。つらく見れば離騒のたくみに似たり。又蘇新黃奇有。初に舜の孝なるをいへるは人におしへをとれと也。其無能を感じる事はふたゝび雨花の心を見よと也。かたちのすこしきなるを憐むは足事をしらしむ。呂房・子陵がむかしをひきて、隱逸の用意を告るか、玉蟲のたはぶれば色をいさめんとならし。翁にあらずば誰か此蟲の心をしらむ。靜にみれば物皆自得すといへり。此人によりてこの句をしる。昔より筆をもてあそぶ人、おほくは花にふけりて實をそこなひ、實を好て風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實猶くらひつべし。こゝに何がし朝湖と云有。此事を傳へきゝてこれを畫。まことに丹青淡して情濃也。心をとゞむれば蟲動がごとく、黄葉落るかとうたがふ。耳をたれてこれを聴ケバ、秋の風そよ／＼と寒し。猶閑窓に閑を得て、兩士の幸に預る事、蓑蟲のめいばく有に似たり。

○呂房・子陵は呂望の誤。清漢に釣して文王に見出されたと公望のこと。子陵は後漢の光武帝の時の賢人。初め隠れて壺中に釣した。

一六、續の原跋

不卜撰『續の原』(貞享四年成、同五年刊)の句合に判をして、その終に添へた詞である。貞享四年冬の作。

一柳軒不卜のぬしは身を塵境に随ひせまりて、心ざしは雲あるやまのいはねをたどり、あるはよしのゝ花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて風雅のやつことなる事としあり。これよりさきも集顯す事ふたゝびに及といへども、春殊遠く雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさまゝくに、唐朝の牡丹も花しべを異にす。梅の佗、櫻の興も、折にふれ時にたがへば、句も又人を驚しむ。猶其しげき林に入て、花のかのきよきにつき、いろこき木の葉をひろひて左右にわかちて、積て四節となす。判士よたりに乞て、我も其一にしたがふ。まことや樂にあらるゝものゝ笛をぬすむに似たりといはむ。されども青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸ざゝむことあたはず。貞享うのとし、筆を江

○不卜——岡村氏、未得の門。續の原の撰者。

○集顯す事——不卜は先に延寶六年、江戸廣小路を同七年、向之岡を撰す。

○雲ゆき——易、蘇辭「雲行雨施品物流形」

○東籬の菊——陶淵明の故事。

上の潮にそそぎて、つゝに蕉菴雪夜のともし火に對す。

桃青書

一七、四山瓢

芭蕉が庵中に貯へた瓢の命名を素堂に乞ひ、四山といふ名を得た時の文である。成美が家藏の眞蹟を、その著『隨齋諧話』の中に摹刻して掲げてある。文は眉山・菰洲共撰の『四山集』（元祿十六年刊）にも出で殆ど異同はない。句は『之乎利集』所載の眞蹟（現に菊本氏藏）に「もの一我がよはかるきひさご哉」といふ形で出て居り、貞享年中の作と推定される。今本文は『隨齋諧話』によつた。文の前にはなほ

瓢之銘

山素堂

一瓢重黛山 自笑稱箕山

莫慣首陽餓 道中飯顆山

といふ素堂の銘が添うて居る。

顔公の垣礎におへるかたみにもあらず、恵子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさごあり。是をたくみにつけて花入るゝ器にせむとすれば、大にしてのりにあたらず。さゝえに作りてさけをもらむとすれば、かたちみる所なし。あるひとのいはく、草庵のいみじき器入べきものなりと。まことによもぎのころあるかな。やがてもちめて隠士素翁にこふて、これが名を得さしむ。そのことは右にするす。其句みなやまをもておくらるゝがゆへに四山とよぶ。中にも飯頼山は老杜のすめる地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁はくにかはりて、我貧をきよくせむとす。かつむなしきときは、ちりの器となれ。得る時は一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせむことしかり。

ものひとつ瓢はかろき我よかな

芭蕉桃青書

一八、歌仙の讃

『芭蕉文集』（安永二年刊）に収めてある。『一葉集』にも収めて、文の終に、「これは雪し

○顔公の——顔直幹、
中文「顔筆庵空草菴
顔淵之巷」
○種にしも——四山集
「種にも」
○さ、え——小筒。

○もちめて——四山集
この四字無し。
○飯頼山——唐本事詩
に李白の作として
「飯頼山頭達三杜甫、
頭戴笠子日卓午、
爲問因何太癡生、只
爲從來作詩苦」と見ゆ。
○かつむなしきときは
——四山集「きよか
らん時は」

やれて翁閑けん芭蕉洞 井海 と云句にて、一卷を送りし時の嘆美なりと。云々と附記してある。井海といふのが伊豫松山の人で、その人の許にあつた眞蹟が傳はつたものであらう。年代を推定すべき手がかりがないが、文章から見て天和・貞享頃の作と推定される。〔追捕参照〕

歌仙の賛

伊豫の國松山の嵐。ばせをの洞の枯葉を吹て、其聲歌僊を吟ず。噫寥々刁々たる風の音、玉をならし金石ひびく。或はつよく或はやらかに吹て、且人をしてなかしめ人に心をつく。萬竅怒號響替て、句毎の意味各別なり。唯是天籟自然の作者、芭蕉は破れて風飄々。

一九、保美の里

『句選年考』に「梅樺」の句の條に、桃鏡撰の『芭蕉翁文集』に載する所として引いてある。なほ同じく『句選年考』の「鷹一つ」の句の條に、「或行脚僧云、初案は鷹の聲似るものもなしいらこ崎と、此眞跡保美の里の地頭に有り、見付けてうれしとは再案なるべし」とある。桃鏡

○歌仙の賛——文集にかく題してあるのは、文集編者の説くる所か。

○刁々刁々——寥は寥(ソウ)の誤。莊子、齊物論に見える語。

○金石ひびく——葉集「金鐘のひびく」

○萬竅怒號——これも莊子、齊物論の語。

○各別なり——同「各々別也」

が何に據つて採録したかは分らないが、右の保美の里の地頭の所持したといふ眞蹟が、句のみでなくこの文章も共に書いてあつたのではあるまいか。とにかく全く杜撰なものとは思はれない。『鎌倉海道』所出「梅椿早咲ほめん」の詞書に、「三河の國に寶美の里と云所あり、其處に至りて里の名の面白ければ」とあるのも、この文と意を同じくして居る。貞享四年冬、『笈の小文』の旅中三河の國保美に、杜國を訪ねた時の作である。「追補参照」

此里をほびといふ事は、昔院の御門の賞めさせ給ふ地なるによりて、ほう美といふ由、里人の語り侍るを、いづれの文に書とどめたるとも知らず侍れども、かしこく覚え侍るまゝ

梅椿早咲ほめん保美の里

いらこ崎程近ければ、見に行き侍りて

いらこ崎似るものもなし鷹の聲

二〇、書林風月に

○ほび——保美。暹美。半島福江町の南にあり。

也有の『鶉衣』に、尾府の書林風月堂に立寄つて残した真蹟だとして載せてある。句は『笈の小文』には上五「いざ行む」とあり、その他諸集には「いざさらば」となったのが多い。「いざ出む」は最初の案であらう。貞享四年の作。今真蹟は天野三郎氏の藏に歸して居るといふ。夕道は長谷川氏、風月堂の主人、享保八年二月二日歿。

書林風月ときゝし其名もやさしく覺へて、しばし立寄てやすらふ程に、雪の降出ければ、

いざ出むゆきみにころぶ所まで

はせを

丁卯臘月初

夕道何がしに送る

二二、杖突坂の落馬

杖突坂の落馬の句は『笈の小文』に出て居るが、『笈日記』上巻にはなほやゝ長い詞書が添うて出て居る。『句選年考』杖突坂の句の條に、「或行脚の僧の曰く、是にて附合あり。芭蕉の眞

蹟の詠卿伊賀の上野に有り。其前書并に脇」として、左の如き一文が引いてある。

佐屋の舟まはりせしに、有明に出で、美濃近江路の山々雪降りかゝりていとをかしきに、恐しく罷はへたる武士の下部などいふもの、稍もすれば船人をねめ怒るにぞ、興を失ふ心地せらる。桑名より馬に乗りて、杖つき坂をひきのぼすとて、荷鞍かへりて馬より落ちぬものゝ便りなき獨り旅さへ有るに、まさなる乗人や馬方に叱られながら

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

はせを

角のとがらぬ牛もあるもの

土 芳

即ち『笈日記』所載のものと殆ど同文であり、土芳の附句も『笈日記』には、

そのうちいがの人々に此句の脇して見るべきよし

申されしを

角のとがらぬ牛もあるもの

土 芳

として掲げてある。なほ伊賀に現存する土芳自筆『横日記』に、『笈日記』と全く同文の詞書で翁の句を録し、土芳の脇句も添へてある。これが『笈日記』の出典となつたものか。今本文は『笈日記』による。貞享四年冬の作。

さやの舟まはりしに、有明の月入はてゝ、みのぢあふみ路の山く雪降かゝりていとおかしきに、おそろしく鬚生たるものゝふの下部などいふものゝ、やゝもすれば舟人をねめいかるぞ興うしなふ心地せらる。桑名より處く馬に乗て、杖つき坂引のぼすとて、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。ものゝ便なきひとり旅さへあるを、まさなの乗てやと馬子にはしかられながら、

かちならば杖つき坂を落馬哉

といひけれども、季の言葉なし。雜の句といはんもあしからじ。

二二、歳暮

知足の遺稿『千鳥掛』（正徳二年刊）に「歳暮」と題して出づ。『笈の小文』の旅中、貞享四年の作。

代々の賢き人も、古郷はわすれがたきものにおもほへ侍るよし。我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからの

○はじめの老——四十歳。

○杖つき坂——伊勢國三重郡桑名村と鈴鹿郡石薬師町との間に今杖突村あり。

あまたよはひかたぶきて侍るも見捨てたくて、初冬の空のうちしづるゝ比よ
り、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせ
ばと、慈愛のむかしも悲しく、おもふ事のみあまたありて

古郷や隣に泣としのくれ

二三、伊賀新大佛之記

史邦の『芭蕉庵小文庫』（元禄九年刊）に「伊賀新大佛之記」と題して收む。貞享五年春郷里・伊賀に滞在中、阿波の庄の新大佛寺に詣でた折の記である。『笈の小文』とは文章に甚しい異同がある。その前後は遽に分ち難いが、體裁の整つて居る點から見て、この記の方が推敲を加へたものらしく思はれる。なほ伊賀上野町菊山氏の藏する芭蕉眞蹟の一軸は、「伊賀新大佛之記」と題してあり、『小文庫』所載のものと漢字と假字との相違がある外、詞章は全く異同がない。『蓬萊島』・『一葉集』等にも採録してある。

伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり。此ところはならの都東大寺のひじり

○伊陽の山中——郷里
伊賀上野をさす。

○阿波の庄——阿山郡
にあり。

俊乘上人の舊跡なり。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七・宗無ひとりふたりさそひ物してかの地に至る。仁王門、撞櫓（つづみ）のあとは枯たる草のそこにかくれて、松のいはど事とはむ石居ばかりすみれのみしてと云けむも、かゝるけしきに似たらむ。なを分いりて蓮花臺・獅子の座などは、いまだ苔のあとをのこせり。御佛はしりへなる岩窟にたゞまれて、霜に朽苔に埋れてわづかに見えさせ給ふに、御ぐし計はいまだつゝがもなく、上人の御影をあがめ置たる草堂のかたはらに安置したり。誠にこゝらの人の力をついやし、上人の貴願いたづらになり侍ることもかなしく、涙もおちて談もなく、むなしき石臺にぬかづきて

丈六に陽炎高し石の上

はせを

二四、伊勢參宮

桃亭秋屋の『花はさくら』（寛政十三年刊）に載せてある。後年のものではあるが、同書に載せた他の遺稿等から見ても、信じてよいと思はれる。又『枇杷園隨筆』（文化七年刊）に「驚亭夜

○新大佛——一名神靜寺。阿山郡阿波字萬永にあり

○石居——いしすゑ。礎。

○獅子の座——佛像の臺座。

○談——言葉の意。

話」として掲げたものも同一である。句は『笈の小文』を始め諸集に見えるが、『花はさくら』によれば、「何の木の花とはしらず句哉」は初案で、再案の句は「何の木の花ともしらぬ句ひ哉」であるといふ。貞享五年の作。

貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ、此御前のつちを踏事、今五度に及び侍りぬ。
更にとしのひとつも老行まゝに、かしこきおはんひかりもたふとさも、猶思
まされる心地して、かの西行のかたじけなさにとよみけん、涙の跡もなつか
しければ、扇うちしき砂にかしらかたふけながら、

何の木の花とはしらず句ひ哉

武陵
芭蕉桃青拜

二五、高野詣

士朗の『枇杷園隨筆』（文化七年刊）に「秋舉夜話」として掲げてある。確實な出典とはし難いが、特に疑ふべき點もない。貞享五年芳野紀行の時の作。

高野のおくにのぼれば、靈場さかんにして法の燈消る時なく、坊舎地をしめて佛閣臺をならべ、一印頓成の春の花は、寂莫の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲、鳥の啼にも腸を破るばかりにて、御厩を心しづかにをがみ、骨堂のあたりに亘て、情おもふやうあり。此處はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の鬚髪をはじめ、したしきなつかしきかぎりの白骨も、此内にこそおもひこめつれと、袂もせきあへず、そぞろにこぼるゝ涙をとどめて

父母のしきりに戀し雉の聲

二六、葛城山吟

風陽・兎什共撰の『先手後手集』（明和四年刊）に收む。兩子が江戸に旅宿し、白兔園（二世宗瑞）に遊んで寓目したものによるといふ。同書附言に「十九日夜有雷、終日古ヲ諧ル、山中集ノ談ニ至テ、往年茂蘭加州ニ行脚シテ得テ贈ル所ノ翁ノ文ヲ出サル、外ニ類セルモノ三枚アリ、合テ四季也、幸ニ乞得テ此集ノ壯嚴トス」とあつて、この文と落柿舎記・溫泉頌・自得箴の四篇を収めてある。句は貞享五年春吉野紀行の時の吟である。『泊船集』にこの句の詞書と

○一印頓成——一印は一度印を結ぶこと。頓成は頓かに悟を得ること。
○御厩——御廟。みたまや。

して掲げる所は、大體『先手後手集』と同一であるが、若干の異同がある。又現に菊本直次郎氏の藏する眞蹟の詞書も二者と異つてゐる。よつて今三者並べ掲げた。なほ勝峯晋風氏編『新編芭蕉一代集』によれば、多少庵の『深川よとみ集』に「古抱山宇に秘めおく處の眞蹟を寫」として

かづらき山のふもとを過るに、よもの花はさかりに咲て、みねくは霞わたれる空のけしき、いとどなつかしかりければ

猶みたし花に明ゆく神の顔

とある由である。

(一)

大和國を行脚して、かづらき山の麓を通るに、四方の花は盛に咲て、岑く霞に似たる有明の月もいと哀なかきに、かの美目わるきといふけん神の御かたち、いかなる人のわる口にや、なき名といふかしくおもひ疑て

猶見たし花に明行神の顔

はせを桃青

(先手後手集)

はせを

○哀なかきに——原本のまゝ。
○か的美目わるき——萬城の一言主神をいふ。顔の醜きを恥ぢ夜のみ出て働いたといふ。

(二)

やまとの國を行脚して、葛城山のふもとを過るに、よもの花はさかりにて、
 峯くはかすみわたりたる明ぼののけしき、いと艶なるに、彼の神のみか
 たちあしと人の口さがなく、世にいひ傳へ侍れば

猶見たし花に明行神の顔

(泊船集)

(三)

やよひのすゑやまとのくに、行脚して、かつらぎ山のふもとを過るに、よも
 の山花のさかりにて、みねくは霞わりて、いとどなつかしげなりければ、

猶みたし花に明行神の顔

はせを (眞蹟)

○わりて——わの下た。
 字を脱したのである。
 眞蹟にも脱字はある
 ので、疑ふには及ば
 ない。

二七、十八樓記

『笈日記』中巻、岐阜部に掲げてある。芳野紀行から歸東の途次、即ち貞享五年夏美濃に遊
 び、岐阜の賀島氏落椿の亭十八樓を訪ねた時の記である。落椿は本姓安川氏、岐阜本町に住ん
 だといふ(小峰大羽氏説)。十八樓は稻葉山の陰にあつた別荘である。芭蕉をこゝに招いて、

「山かげや身をやしなはむ瓜島」の吟を残され、この句を巻頭として『瓜島集』を撰ぶ志があつたが、未だ成らずして元禄四年歿した。『笈日記』にその未定稿のまゝが收められてある。文はなほ朱拙の『けふの昔』（元禄十二年）・『風俗文選』にも出で、後に『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』に收められた。又句のみは『曠野後集』に「河邊眺望」と題して出て居る。

十八樓ノ記

みのゝ國ながら川に望て水樓あり。あるじを賀嶋氏といふ。いなば山後にたかく、亂山兩に重りて、ちかゝらず遠からず、たなかの寺は杉の一村にかくれ、きしにそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。さらし布所／＼に引はえて、右にわたし舟うかぶ。里人の行かひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝ、をのがさま／＼もたゞ此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわするゝ計、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見もの也けらし。かの瀟湘の八のながめ、兩湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり。若此樓に名をいはむとならば、十八樓ともいはまほしや。

○望て——けふの昔

「臨て」

○賀嶋氏——けふの昔

「加島氏」

○兩に——けふの昔

兩湖に誤つたのから見て、これも西が正しいか。たゞし風俗文選には「左右」とあつて、これは兩の意である。

○見もの——けふの昔

「觀」

○兩湖——けふの昔
「西湖」。これは笈日記の誤である。蘇堤春曉・平湖秋月等の西湖十景の勝をいふ。

此あたり目に見ゆるものは皆涼し

貞享五仲夏

はせを

○目に見ゆるものは
—風俗文選「目に見
ゆるもの」

二八、更科姨捨月之辨

『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に「更科姨捨月之辨」と題して掲げてある。『更科紀行』の文とは異同がある。元祿元年の作。『蓬萊島』には「姨捨月辨」と題して収め、句は「おもかげや」の一句（上五が「俤は」となつて居る）だけをあげてある。又『芭蕉翁文集』には更科紀行の終に、この文の「山は八幡といふ」より以下をとり（「山は」を「姨捨山は」に改めてある。）そのまゝ紀行の本文の如くして加へてある。

あるひはしらゝ、吹上ときくにうちさそはれて、ことし姨捨の月みむことしきりなりければ、八月十一日みのゝ國をたち、道とほく日數すくなければ夜に出て暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷じう高くもあ

○しらゝ・吹上——共に紀伊國の月の名所。

らず、かどくしき岩なども見えず、只哀ふかき山のすがたなり。なくさめ
かねしと云けむも理りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆへにか老たる人
をすてたらむとおもふに、いとゞ涙落そひければ、

俤は姨ひとりなく月の友

いざよひもまたさらしなの郡哉

はせを
同

二九、權七に示す

巴靜の『刷毛序』^{ハケツキ}（寶永三年刊）に「權七にしめす」と題して出て居る。句は『曠野』（元祿二年刊）に「しはしかくれみける人に申遣す」といふ前書と共に出で、元祿元年の作と推定される。この文も同時のものであらう。

舊里を去てしばらく田野に身をさすらふ人あり。家僕何がし水木のため身を
くるしめ、心をいたましめ、其獠奴阿段が功をあらそひ、陶侃が胡奴をした
ふ。まことや道は其人を取べからず。物はそのかたちにあらず。下位に有て

○阿段——阿段の誤。
杜甫の召使の名。

○なくさめかねし——
古今集一わが心なく
さめかねつ更科や曠
野山にてる月を見
て

も上智の人ありといへり。猶石心鐵肝たゆむ事なけれ。主も其善(い)のわするべからず。

祝

先いわへ梅をこゝろの冬籬

芭蕉

三〇、越人に送る

越人の『庭籬集』(享保十三年刊)に載せ、越人自ら「昔はせを老人此ことば書に此發句をおくられ侍るを見出て、彼老は松下の土となり、此蓬頭は生残りけるよと、戀慕のなみだ紙衣のつぎめをひたし、折ふし人の來りけるにみせて、やらむかたなきこゝろをかく申侍りぬ。胸のしのぶも枯よ草の戸」と脇を附け、以下人々と歌仙一卷を催して居る。『笈日記』に貞享四年芭蕉が越人を携へて三河に杜國を訪ねた時の句をあげ、その次に「次のとしならん越人が方へつかはすとて」として「二人見し」の句が見えるから、元禄元年の作と推定される。

尾張十藏、越人と號す。越路の人なればなり。粟飯柴薪のたよりに市中に隠

れ、二日つとめて二日遊び、三日つとめて三日あそぶ。性酒をこのみ、酔和する時は平家をうたふ、これ我友なり。

二人見し雪は今年もふりけるか

芭蕉

○平家——平家物語。

三一、曠野集序

荷兮の『曠野』(元禄二年刊)の序文として、江戸から書き送つたものである。『風俗文選』卷之五、序類に収め、又『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にも収む。

尾陽蓬左、檀木堂主人荷兮子、集を編て名をあらふといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひとよせ此郷に旅寐せしおり／＼の云拾、あつめて多の日といふ。其日かげ相續て春の日、また世にかゞやかす。げにや衣更着、やよひの空のけしき、柳煙の錦を争ひ、てふ鳥のをのがさま／＼なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。いといふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりて、姫ゆりのなに／＼もつか

○蓬左——熱田神宮を蓬左といふのでその左方の意。名古屋をさす。
○いといふの——朗詠集「讀晴れ縁の空も長閑けくあるかなきかに遊ぶ糸遊 赤人」
○姫ゆり——山家集「雲雀上るあち野に生る姫百合の何につくともなき心かな」

ず、雲雀の天空にはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべらし。

元祿二年彌生

芭蕉桃青

三二、文字摺石

奥の細道の旅中吟「早苗とる手もとや昔しのぶ摺」に添へた詞書である。『奥の細道』の本文も、勿論その詞書の一と見るべきものであるが、それとは全く異つた詞書がなほ數種存する。その一は『卯辰集』（元祿四年刊）に載するもので、句は上五が「早苗つかむ」となつて居り、恐らく初案の形であらう。その二は『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に「文字摺石」と題して掲げたものである。その三は讃岐の僧露泉の撰『綱代笠』（元祿十一年刊）に收むるもので、これも句の上五は「早苗つかむ」となつて居る。露泉は才膺の門人らしいが、集中には芭蕉を始め蕉門の人々の作も多く、出典として十分信ずる事が出来る。千山の『花の雲』（元祿十六年刊）に出て居るのも、この『綱代笠』所載のものと同一である。その四は菊本直次郎氏の藏する眞蹟で、これが最も初稿かと思はれる。その五は金澤、川島氏の藏する眞蹟である。以上すべて

並べ掲げた。

(一)

しのぶもぢずりの石は、みちのくふくしまの驛にありて、往來の人の麥くさ
を取て、このいしをこゝろみけるを、里びとども心つくおもひて、此谷にま
ろばし落しぬ。石の面はしたざまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、
風雅の昔にかはれるをなげきて

早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺

翁

(卯辰集)

(二)

忍ぶの郡しのぶの里とかや、文字ずりの名残とて方二間ばかりなる石あり。
此石はむかし女のおもひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺みだ
るゝゆへに、戀によせておほくよめり。いまは谷合に埋れて、石の面は下ざ
まになりたれば、させる風情もみえずはべれども、さすがにむかしおぼえて
なつかしければ、

早苗とる手もとや昔忍ずり

芭蕉

(小文庫)

(三)

もぢ摺石はふくしまの驛東一里ばかりに、山口と云處に有。さと人のいひ傳へ侍るは、往來の人の此石試むと、麥草をあらし侍るをにくみて、此谷に落し入侍るよし。今はちがやの中に埋れて、石の面は下さまになり侍るとかや。誠風流のむかしにおとり侍るぞ、いとほひなく覺侍る。

早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺

はせを

(網代笠)

(四)

もぢ摺の石は福しまの驛より東一里計、山口と云ところに有。往來の人の麥草をとりて、このいしをぬぐひ侍るをにくみて、此谷に落し入けるとなむ。いまはちがやの下にかくれて石のおもても下さまにみえ侍る。風雅のむかしにをとろふるこそほ意なきわざなれ。

さなへつかむ手もとやむかししのぶ摺

はせを

○誠——花の雲「誠に」
○はひ——花の雲「本意」
○はせを——花の雲
「武陵芭蕉桃青」

(五)

もち摺の石はみちのくふくしまの驛より一里ばかり東に有。さと人のいへる、ゆきゝのひとの麥草をとりて、此石をこゝろみけるをにくみて、此谷に落し入待るよし。石のおもては下さまになりて、いまはさるわざする事もなかりければ、風雅のむかしにかはれるもいと本意なくて

さなへつかむ手もとやむかししのぶ摺

はせを

(川島氏藏眞蹟)

三三、笠 島

『奥の細道』の本文とやゝ異つた形の詞書が數種有る。その一は『猿蓑』(元祿四年刊)に出づるもの。その二は『卯辰集』(元祿四年刊)に載するもの。その三は『芭蕉翁眞蹟集』(明和元年刊)に掲ぐるもの。その四は菊本氏藏の眞蹟。その五は本山竹莊氏藏の眞蹟である。今すべて併せ收めた。

(眞蹟)

(一)
奥州名取の郡に入て、中將實方の嫁はいづくにやと尋待れば、道より一里半ばかり左の方笠島といふ處に有とをしゆ。ふりつゞきたる五月雨いとわりなく打過るに、

笠島やいづこ五月のぬかり道

芭蕉(猿蓑)

(二)

中將實方の嫁はみちのく名取の郡笠島と云所にて、道より一里ばかり待るといへど、雨しきりにふりて日もくれかゝりければ、

かさ島やいづこ五月のぬかり道

翁(卯辰集)

(三)

藤中將さねかたのつかは、みちより一里ばかり笠島といふ處にありといへど、さみだれ降つゞきてみちもいとあしければ、わりなくみ過してとをりぬ。

かさしまやいづこ五月のぬかり道

はせを

(芭蕉翁眞蹟集)

(四)

中將實方のつかはみちのく名とり郡笠しまといふ所にて、みちより一里ばかりにあり。ゆきてみむことをねがへども、さ月のあめ降つゞきて、みちもいとあしければわりなくてすぎぬ。

かさしま いづこさ月のぬかり道

はせを

(菊本氏藏眞蹟)

(五)

中將^(マ)眞方のふるつかは、みちのく名とり郡笠しまと云處に有。道より一里ばかりにて程ちかしといへ共、さみだれ降つゞきて、其日もやゝ暮に及侍れば、わりなくて見過し侍る。

かさしまやいづこ五月のぬかり道

はせを

(本山氏藏眞蹟)

三四、松島賦

『風俗文選』（寶永三年刊）卷之二、賦類に收む。『蓬萊島』・『芭蕉文集』・『芭蕉翁文集』共にこれ採録して居るが、『一葉集』は眞偽不審之部に收めてある。思ふにその内容が『奥の細道』の文を釘釘補綴したやうなものであるから、作爲を加へたとの疑を存したのであらう。確かにさうした疑を抱かせないではないが、『奥の細道』に全く見えない文句もあり、とにかく『風俗文選』に公表されて、しかも當時これを許六の偽作として批難したものもないのであるから、特に疑を挿む必要もなからう。よつて本篇の中に收める事にした。年代は明かでないが、今は奥の細道の旅の年次に従つて排列した。實際は後年の作であらう。なほ『陸奥千鳥』（元祿十年刊）にも「松島辨」と題した芭蕉の一文を載せてあるが、それは冒頭と結末に小異ある外、『奥の細道』の本文と全く同一である。即ち冒頭が「抑松島は扶桑第一の」、結末が「詞を盡さん」の次に、「予は口を閉て窓を開き、風雲の中に旅寢すること、あやしきまでたへなる心地はせらるれ」と續いてゐる。これによると芭蕉が松島の條を特に獨立した一文として記した事があり、「松島賦」もまたその一と見られるのである。本篇の濁點はすべて本文のまゝである。

松島ノ賦

芭蕉翁

そもく事ふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ず。

東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたふふ。七十二峯、數百の嶋々、
 欽つものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり、三重にたゝ
 みて、左にわかれ、右につらなる。負るあり、抱るあり、兒孫愛するがごと
 し。内ふたご、外ふた子、鰐嶋、かぶと嶋、牛嶋、蛇じま、内裏嶋、屏風じま、
 笹が嶋は、あまの小舟漕つれて、着わかつ聲く／＼に、つなでかなしもとよみ
 けむ佛を残し、末の松山は寺となりて、松のひま／＼墓を築く。羽をかはし、
 枝をならぶる契の末も、終には皆かくのごとしと悲し。野田の玉川、沖の石
 宮城の萩、武隈の松、猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には、鹽が
 まの明神あり。神前のかな灯籠、文治三年泉の三郎奇進と記す。雄嶋が磯は
 地つゞきにて、雲居禪師の別室のあとに、坐禪石、瑞岩寺は相模守時頼入道
 の建立、當時三十二世のむかし、眞壁平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。
 其後伊達政宗再興して、七堂伽藍となれりける。法蓮寺は海岩に峙、老杉影
 をひたし、花鯨波にひゞく。松の縁こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈
 曲をのづからためたるがごとし。其氣色蒼然として、美人の顔を粧ふ。ちは
 や振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆

○浙江の潮——浙江省
 錢塘江の河口の潮が、
 落千の時奇觀を呈す
 るをいふ。

○つなでかなしも——
 古今集「みちのくは
 いづくはあれど鹽が
 まの浦こぐ舟の綱手
 かなしも」

○末の松山——末松山
 寶國寺。

○羽をかはし——長恨
 歌「在天願作比翼
 鳥、在地願爲連理
 枝」

○雲居禪師——末都妙
 心寺の僧。

○別室——把不住野と
 いふ亭。

○眞壁平四郎——僧名
 法身。入宋して臨朝
 後北條時頼の命を受
 けて開山となる。

○法蓮寺——又神宮寺、
 鹽澤神社の東南麓に
 あつた。

○花飾——梵鐘。
 ○自然——エウゼンが
 正し。

をふるひ、詞を盡さむ。

三五、法の月

羽黒山中興の傑僧有天法印を追悼した文である。寶永七年刊の『三山雅集』にその文を載せて居るが、松童篇文二撰の『南谷集』(文政元年刊)には芭蕉の眞蹟を摹刻して掲げてある。又也足の『道しるべ』にも眞蹟を掲ぐ。『奥の細道』の旅中の作たる事は言ふまでもない。今本文は『南谷集』によつた。

羽黒山別當執行不分叟天宥法印は、行法いみじきこへ有て、止觀圓覺の佛
 智才用人にほどこして、あるは山を穿、石を割て巨靈が力、女嬬がたくみを
 盡して、坊舎を築階を作れる、青雲の滴をうけて、寛の水とをくめぐらせ、
 石の器木の工此山の奇物となれるもの多シ。一山擧て其名をしたひ其徳をあ
 ふぐ。まことにふたゝび羽山開基にひとし。されどもいかなる天災のなせる
 にやあらん、いづの國八重の汐風に身をたゞよひて、波の露はかなきたより

○女嬬——五色の石を
 練つて天地を作つた
 神女。

をなむ告待るとかや。此度下官三山順禮の序、退悼一句奉るべきよし、門徒等しきりにすゝめらるゝによりて、をろく戲言一句をつらねて香の後ニ手向侍る。いと憚多事になん侍る。

其たまや羽黒にかへす法の月

元祿二年季夏

芭蕉

青桃

○門徒等——漢語に「門徒等の生を消して徒と改めてある。」
○其たまや——同じく「無たまや」の無を其に改めてある。

三六、銀河序

『風俗文選』（寶永三年刊）卷之五、序類の中に收む。『奥の細道』の銀河の句には全く詞書がないので、別にこの文を草したのであらう。又備中の正興の撰『柴橋』（元祿十五年刊）に載せた銀河の句にもやゝ長い詞書があり、『風俗文選』所收の「銀河ノ序」とは大分異同がある。なほ曾良の遺稿『雪丸げ』（安永四年刊）所出の句にも詞書があつて、これは簡略になつて居る。更に菊本直次郎氏藏眞蹟の詞書は、前二者を合せたやうな形でいづれとも異つてゐる。今四者とも並び掲げた。その一に施した濁點は原本のまゝである。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』等所收のものは、すべて『風俗文選』によつて居る。

(一)

銀河ノ序

芭蕉

北陸道に行脚して越後ノ國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里によこおりふしたり。みねの嶮難谷の隅々まで、さすがに手にとるばかりあざやかに見わたさる。むべ此嶋はこがねおほく出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度嶋にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞へあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら／＼と牙たるに、沖のかたより波の音しば／＼はこびて、たましめけづるがごとく、腸ちぎれてそとろになしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なによへとはなくて、しほるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

(二)

(風俗文選)

あちごのくに出雲崎といふところより、沖の方十八里に佐渡が島見ゆ。東西三十里餘りに横折ふしたり。むかしよりこのしまはこがね多く涌出で、世にめでたき島にて侍るを、重罪朝敵の人々の遠流の地にていとおそろしき名に立り。折ふし初秋七日の夜、宵月入果て波の音とうぐとものすごかりければ

あら海や佐渡によこたふ天の川

(柴橋)

(三)

越後の國出雲崎といふ所より、佐渡が島へ海上十八里となり。初秋の薄霧立もあへず、流石に波も高からざれば、たゞ手の上の如くに見渡さるゝ

荒海や佐渡に横たふ天の川

(雪丸げ)

(四)

あちごの驛出雲崎といふ處より、佐渡がしまは海上十八里とかや。谷嶺のけむそくまなく、東西三十餘里によこをれふして、まだ初秋の薄霧立もあへず、波の音さすがにたかゝらず、たゞ手のとどく計になむ見わたさる。げにや此しまはこがねあまたわき出て、世にめでたき島になむ侍るを、むかし今に到

りて大罪朝敵の人々遠流の境にして、物うきしまの名に立待れば、いと冷じき心地せらるゝに、宵の月入かゝる比、うみのおもてほのくらく、山のかたち雲透にみへて、波の音いとどかなしく聞え侍るに、

荒海や佐渡によこたふ天河

芭蕉

(菊本氏藏眞蹟)

○冷じき——すさまじき。

○雲透——くもすき。雲が透いた所から得れる光。

三七、溫泉頌

風陽・兎什共撰の『先手後手集』(「葛城山吟」解説参照)に收めてある。同書に掲げた翁の文四篇の中、茂蘭が加賀に行脚して得たといふのがこれであらう。『句選年考』にも引いてある。又大蟲の『芭蕉眞蹟拾遺』には「右の眞蹟山中泉屋にての染筆也、文化年中迄秘藏せしがいかやうのわけか、加賀小松かけ橋茶屋九右衛門といふ者へ譲りしよし也」と附記して掲げている。右の眞蹟は現に金澤山川氏の藏に歸してゐると。今本文は『先手後手集』による。

溫泉頌

○溫泉頌——『先手後手集』にかく題して

北海の磯つたひして、加筋やまなかの涌湯に浴す。里人の曰、このところは扶桑三の名湯の其一ツなりと。まことに浴する事しばらくなれば、皮肉うるほひ、筋骨に通りて神心ゆるく、ひとへに顔色をとどむるこゝちす。彼桃源に舟をつしなひ、慈童が菊の枝折もしらず。

やまなかや菊は手折じ湯の匂ひ

はせを

三八、桂下園家の花

桂下園東恕撰『俳諧四幅對』(享保七年刊)に、「桂下園家の花菴書」と題して、芭蕉以下人々の吟をあげた中に出て居る。東恕の藏する眞蹟によつたものであらう。『奥の細道』の一部の初稿とも見るべきものである。「月いづこ」の吟は『奥の細道』には省かれて居るが、句空の『草庵集』(元祿十三年刊)に「敦賀の驛の屏風に侍り、北國行脚の時の吟なるべし」と註して

月いづこ鐘はしづみて海の底

と出て居り、又『放鳥集』(元祿十四年刊)にも

あるのは、撰者の假に設けた所であらう。

○桃源——武腰桃源。
慈童——郡縣の菊水
を摘んで八百歳の壽
を保つたといふ。
○眞蹟には終に「元祿
二仲秋日」とある由。

中秋の日敦賀に止泊す雨ふりければ

月いづこ鐘はしづみて海の底

とあつて、芭蕉の北國行脚當時の作たる事は疑ない。

元祿二年

芭蕉翁

八月十四日敦賀の津に宿をもとめて、氣比の宮に夜參す。むかし二世の遊行上人、この道の泥土をきよめんとて、みづから砂をはこび給ふより、砂持の神事とて、今の代にもつたへ侍るとかや。社頭神さびたるありさま、松の木の間に月の影もりて、信心や骨に入べし。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日雨ふりければ、

名月や北國日和さだめなき

おなじ夜あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて侍るを、國守くにかみの海士を入てたづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て、引あぐべき便もなしと聞て

月いづこ鐘はしづめる海の底

色濱イロハマ舟フネ

小萩ちれますほの小貝小盃

その浦の寺にあそびて

淋しさや須磨にかちたる濱の秋

三九、紙 衾 記

『和漢文操』(享保十二年刊)卷六、記類の中に收む。支考の評に

此記は元祿のはじめ、奥羽の行脚に三越より美濃をへて、伊勢の遷宮に詣給ふ時也。さるは如行が門人に竹戸といふ者ありて、其衾に此記を得て、今も其家の寶とす。路通も越人も其記をかきて竹戸が幸をうらやまれけるとぞ。爰に二者の文を略せり。

とあるのでその由來が明かである。竹戸は美濃大垣の鍛冶工であるといふ。元祿二年九月、芭蕉が北越の旅から大垣の如行亭に入つた時、芭蕉の爲に按摩の勞をとり、旅中携へた紙衾にこの記を添へて與へられたのである。人々はこれを大に羨み、又各自記を作つた。當時竹戸自身も句を作つて謝した事は、『猿蓑』に

翁行脚のふるき衾をあたへらる記あり略之

首出してはつ雪見ばや此衾

美濃 竹戸

とあるので分る。人々の記は『和漢文操』には傳へてないが、風化房其成撰『雪のおきな』(天明三年刊)に「衾記の餘稿は金陵の北翠亭の函中に得て後に附し侍る、芭蕉衾記は蓬萊島に出たればこゝに略しぬ」とあつて、如行・路通・越人・曾良の文を掲げ、なほ

題衾四季

花の陰晝寐して見ん敷衾

蟲干のはれにかざらん衾哉

長き夜のねざめうれしや敷ふすま

首出して初雪見ばや此衾

竹戸拜

といふ竹戸の句をあげてある。人々の文も併せ讀めば興が深いので、煩を厭はず全部抄出して見よう。

芭蕉師翁回國つゝがなく我郷大垣にむかへとりて、杭瀬の水をくみて草鞋をとかしむ。ある夜油單の内よりかみのふすまをとり出て、我門人竹戸といふものに得させ侍る。沙門ならば是を禪定の衾とせん、勇士はこれを母衣ぎぬにかへむ。あへて汝そこなふ事なかれ。

身を終るまで愛して、終に棺の中にしけとぞ爾云

如行拜

ものうさよいづくの泥ぞ此衾

いろ香をさきとするものは、見る事はなやかにして、さめて後愛を失ふ。その工の業こまやかなるものは、用る事あやうく、やぶれて後うれふ。皆道によるものゝとらざる所なり。此紙衾ひとつはみちのくきさがたのあたりより、いぶせき草のまくらにうちへ、雪の高濱有磯海苔の山秋篠の里までも、つかれたる肩にかけほそりたる腰につけて、はるゝとみのゝ國までのぼりつき給ふを、竹戸といふおのこにゆづりあたへける也。哀一身舊里をはなれ、邊土けがれたる肉眼ににらまれたまひ、うき寐の夢のはかなきたびぢにも、かゝる衾の上にこそ有らめと、肝に染て覺え侍る。紙とのりとのさかひは、日を追てはなれやすかるべし、こゝろざしとなさけはとしふるとも、そこなふ事なかるべし

露なみだつゝみやぶるな此衾

路通敬書

阿難は世尊の入滅の後に來り、孔子は周のおとろへに出、宣房はあらしや庭の松にこたへんと有庵を見る。こゝに芭蕉老人は霞とゝもにむさし野を出、能因西行の跡をしたひ、たるき事寒き事を習ひに、松島しら川をながめ、漸秋風立て越路をへて、雪車のはや緒のはやくも、濃州の市隠如行のもとにものし給ふよし、夕に開て、其朝はしり着て、先逢てめ

つらしなど泣わらふ。その道のほどはまへにきこえつる衾は、竹戸にもらはれけんこそ
こはいかに。富貴官位は徳大寺のごとくうらやまず。此ふすまとられけむこそ本意なけれ。
貴妃夫人が後を泣つゞけたるは、うつけたる嘶になりぬ。越人くおそく來てくやしから
んと、越人と越人が云。

くやしきよ竹戸にとられたるふすま

先だつて往おくれて來り、此衾の記を讀てやまず。此ふすまは是はてしなきみちのくより、
あら海の北の濱邊をめぐり、みのく國まで翁のもち給へり。我したがつて且夕にこれをお
さむ。いま竹戸にあたへられし事をそねんで、奪んとすれど大石のごとくあがらず。おも
ふべし、衾のものたる、薄してそのまことの厚き事を。

疊めは我が手のあとぞ其衾(讀まには紙衾)

曾良

なほこの紙衾記は、一音撰の『左比志遠理』(安永五年刊)にも掲げられ、文に若干の異同があ
る。『蓬萊島』・『一葉集』所收のものは『和漢文操』に同じい。『和漢文操』には註がついて
居るので、今参考に資すべきものを脚註に收めた。「註曰」とあるのはそれである。

紙衾ノ記

芭蕉翁

古きまくら、古きふすまは、貴妃がかたみより傳へて、戀といひ
 哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふ
 たつのつばさに後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、其にほひ
 残りどままれらんをや、戀の一物とせん、むべなりけらし。いで
 や此紙のふすまは、戀にもあらず、無常にもあらず、蟹の簞屋の蚤
 をいとひ、驛のはにふのいぶせさを思ひて、出羽の國最上といふ
 所にて、ある人のつくり得させたる也。越路の浦く、山館野亭
 の枕のうへには、二千里の外の月をやどし、蓬もぐらのしきねの
 下には、霜にさむしろのきりくすを聞て、晝はたゝみて背中に
 負ひ、三百餘里の險難をわたり、終に頭をしろくしてみのゝ國大
 垣の府にいたる。なをも心のわびをつぎて、貧者の情をやぶる事
 なかれと、我をしとふ者にうちくれぬ。

四〇、明智が妻

- 古きまくら——註曰、長恨歌「翡翠
 衾寒誰與共云々」唐詩解「翡翠故枕
 之作レリ」
- 貴妃が——左比志遠理「貴妃の」
- 錦床——同「錦帳」
- 鴛鴦を——註曰、文選詩ニ「文綵双
 鴛鴦、義爲合歡義。」左比志遠理「鴛
 鴦の鳥を」
- ぬひ物にして——同て字なし。
- 彼は——同「彼」
- 残りどままれらんをや——同「と、
 まらむをや」
- いぶせさを思ひて——同「いぶせき
 をわびて」
- 越路の浦——同「北海の浦」
- 二千里の——白氏文集「三五夜中新
 月色、二千里外故人心。」左比志遠
 理に「二千里の外の」の六字なし。
- 霜に——註曰、新古今「きりくす
 鳴や霜夜のさむしろに衣がたしきひ
 とりかもぬむ」
- 晝はたゝみて云々——左比志遠理
 「晝はたゝみて云々」
- 蓬もぐらのしきねの——左比志遠理
 「蓬はしろにたゝみて、三百餘里
 の險難終に首をしろくして」
- 大垣の府——同「大垣の庄」
- 猶も云々——同「猶心のわびをつい
 て」

路通の『勸進牒』（元祿四年刊）に出づ。又『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）にも出て殆ど異同はない。然るに菊本直次郎氏藏の眞蹟は全く文を異にして居るので、今兩者を併せ掲げる。元祿二年の作と推定される。

(一)

伊勢の國又玄が宅へとどめられ侍る比、その妻男の心にひとしく、もの毎にまめやかに見へければ、旅の心をやすくし侍りぬ。彼日向守の妻髪を切て席をまうけられし心ばせ、今更申出て

月さびよ明智が妻の咄しせん

(二)

將軍明知が貧のむかし、連歌會いとなみかねて侘侍れば、其妻ひそかに髪をきりて、會の料にそなふ。明知いみじくあはれがりて、いで君五十日のうちに興にものせんといひて、頓て云けむやうになりぬとぞ。

月さびよ明知が妻のはなしせむ

又玄子妻にまいらす

(勸進牒)

はせを

(眞蹟)

- 又玄が宅へ——小文庫「又玄が宅に」
- その妻——同「その妻の」
- もの毎に——同「物ごと」
- 日向守の——同「日向守が」
- 心ばせ今更——同「心をさまさう」
- 月さびよ——同「月さびて」

四一、洒落堂記

芭蕉文集

69

洒堂・正秀共撰の『白馬集』(元祿十五年刊)に「洒落堂記」と題して收む。膳所にあつた洒堂の居、洒落堂の景觀を敘したものである。「四方より」の句は『卯辰集』に見えるのが最も早い。同集は元祿四年四月に成つて居るので、同年春の作とも見られるが、『句選年考』の漣々の書入によれば、「元祿三」とした眞蹟が存したといふ。今姑く元祿三年の作と定めておく。文は『芭蕉文集』・『芭蕉翁文集』等以下に收めらる。句のみは『卯辰集』を始め『泊船集』・『流川集』・『けふの昔』等にも出て居る。たゞし『卯辰集』・『泊船集』には下五「鳩の海」とある。

山は靜にして性をやしなひ、水はうごひて情を慰す。靜動二の間にしてすみかを得る者有。濱田氏珍夕といへり。目に佳境を盡し、口に風雅を唱へて、濁りをすまし、塵をあらふが故に洒落堂といふ。門に戒幡を掛て、分別の門内に入事をゆるさずと書り。彼宗鑑が客におしゆるざれ哥に一等くはへてをかし。且それ簡にして方丈なるもの二間、休・紹二子の侘を次て、しかも其

○山は靜にして——論語「知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜」による。
 ○うごひて——動いて。
 ○珍夕——洒堂の前號。
 ○宗鑑——山崎の宗鑑が自ら庭の入口に、「上の客人立かへり、中の客人日かへり、

のりを見ず。木を植、石をならべてかりのたはぶれとなす、抑おものゝ浦は勢多・唐崎を左右の袖のごとし、海を抱て三上山に向ふ。海は琵琶のかたち似たれば、松のひゞき波をしらぶ。日えの山・比良の高根をなゝめに見て、音羽・石山を肩のあたりになむ置り。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃抹の日々にかはれるがごとし。心匠の風雲も亦是に習ふ成べし。

四方より花吹入てにほの波

はせを

四二、幻住庵記（初稿）

池永大蟲の編した『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「幻住庵記」と題して收められ、「右半切横物一軸ノヨシ雙雀庵ヨリ寫しこす」と附記してある。文章は次の「幻住庵賦」と大體同一であるが、それよりはつと簡素である。支考は『和漢文操』に幻住庵の文に三通あつて、その初稿は落柿舎にある由を述べて居るが、それは即ちこの「幻住庵記」ではあるまいかと思はれる。雙雀庵から送られたといふ眞蹟の寫しが、假に落柿舎傳來のものとは別であつたとしても、少くとも

とまり客人下の下
と書いた額を掲げた
といふ逸話。（百物
題）
○休紹 利休・紹興
○おももの、浦井寺の背
○長柄の三井寺の背
○淡粧濃抹の西湖をよんだ詩句
○「淡粧濃抹總相宜」

支考の所謂「始の一通」に當るべきものである事は疑ない。始中終の三篇を併せ讀めば、その推敲雕琢のあともおのづから明かであらう。なほ次の「幻住庵賦」解説参照。

五十年やゝちかきみは、にがもゝの老木となりて、かたつぶり家をうしなひ、
 みのむしの衰を離て、かの宗鑑がはたごの料とぼしく、能因が頭陀の袋を門
 くくひろげて、松島・しら川につらをこがす、猶うとふ啼そとの濱邊より、
 ゑぞが千しまをみやらんまでと、しきりにおもひ立侍るを、同行曾良何某と
 いふもの、多病心もとなしなど袖をひかゆるに心よはりて、ことし湖水のほ
 とりにたゞよふ。鳩のうきすのながれとゞまらあしのひともとのかげたのむ
 べき、幻住庵といふかくれがをもとむ。山を國分山といふ。古き御社のた
 せ玉へば、六根きようしてをのづからちりなき心地せらる。さすがに山深か
 らず、人家よきほどに立り、南薫峰よりおろし、北風海をひたして涼し。折
 しも卯月のはじめ、つゝじ咲残り山藤松にかゝりて、ほとゝぎすしばく過
 るほど、宿かしどりの便さへ有を、木つゝきのつゝくともいでじ、かつこと
 りわれをさびしがらせよなど、そゞろに興じて、吳楚東南のながめに耻ず、

○語句の註は幻住庵賦
 (次出) 参照。
 (次々出) 参照。

○うとふ——鶯知鳥。

五湖三江もうたがはしきや。ひえの山・ひらの高根より辛崎の松は霞こめて、膳所の城木のまにかゞやき、せたの橋は栗津の松原につゞきて夕日の光をのこす。三上山は土峯の俤にかよひて、むさしのゝ古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をしたふ。さゝ保が嶽・千丈ヶ峯・袴腰といふ山あり。かさとり山に笠はなくて、黒津の里人の色や黒かりけんとおかし。猶眺望くまなからんと後の峯に這のぼり、松の棚作り、わらの圓座を敷て猿の腰かけと名付。傳へ聞、除老が海棠巢上の飲樂は市にありてかまびすく、王道人が主薄峯の庵もつらやむべからず。虚無に眼をひらき、屏顔に風を捫て座ス。たまゝ心すこやかなる時は、薪をひろひ清水をむすぶ。小しだ一葉のみどりをつたふとくゝの雫を佗て、一爐のそなへいとかるし。さきに住ける人もさすがに心高くや住なしけむ、工をける物ずきもなし。さるを此たび高良山蓮臺院の僧正洛にのぼり侍りしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆を取て、幻住庵の三字を送らる。其裏に予が名を書て、後住人の記念ともなれと也。山居といひ、旅寢といひ、させるうつはものたくはふべくもあらず、木曾の檜笠、越の菅みのばかり枕の上の柱に掛たり。晝は宮守の翁、里の老人

○五湖——瀬州の太湖の別名。即ち洞庭。
○三江——松江・黄江・東江をいふ。竝に吳の地にある。

など入來りて、いのしゝの稻くひあらし、兎のまめばたにかよふなど、我聞
しらぬはなしに日を暮し、かつはまれ／＼とぶらふ人々も侍しに、夜座靜に
して影を伴ひ、罔兩に是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み、
山野に跡をかくさむとにはあらず、たゞ病身人に倦て世をいとひし人に似た
り。などや法をも修せず、俗をもつとめず、いとわかき時よりよこざまにす
ける事侍りて、しばらくしやうがいはかりごとゝさへなれば、終此一筋に
つながれて、無能無才を恥るのみ。勞して功をなしく、たましゐつかれまゆ
をしかめて、初秋半に過行く風景朝暮の變化も、また幻のすみかなるべしと
やがて立いでゝさりぬ。

四三、幻住庵賦

支考の『和漢文操』(享保十二年刊)卷之一、賦類の中に收めらる。支考は終の評に、

祖翁に幻住庵の文は三通ありて、始の一通は落柿舎にあり、中の一通は此賦なり、終の一
通は猿蓑集に出て世にされる幻住庵ノ記なり。されば此文に三通の子細は、始のは文章の

無用をすぐり、中のは文章の花美をそろへ、終のは文章の花實をとゝなふ。道に三思の親切をたふとむべし。誠に此賦の花やかなる、彼ノ記にはまさりておもしろきに、是を捨て彼を取れる百世の師道をあふがざらんや。しかるに三通の口評にも、花實の論は更にして、記と賦との兩説あり。猿蓑に出せる一通は、序文より全く記ノ躰にして幻住庵の風土をあらはし、今の一通は尤賦ノ躰にして眼前の風景を演ながら、幻住の二字の觀想をつくせる、例の諷諫ならずやと、獅子庵の遺稿に此夜話あり。(中略)但シ三通の標號に、始のは杖錢子とあり、中のは風羅坊とありて、終のは芭蕉庵とあり。文に曲節地の三別なるにや。杖錢も風羅も例の狂名ならん。(下略)

と言つて居る。例によつてことゝしい説き方であるが、とにかく「中のは文章の花美をそろへ」といふ評は確かに當つて居る。思ふに芭蕉は初稿に雕琢を加へてこの賦を得たが、些か華に過ぎるのを厭つて更に全く稿を改めたのであらう。さうして最後に成つたのが『猿蓑』所載の記である。

『和漢文操』には文の終に註がついて居る。支考の加へる所である。今參考に資すべきものだけをとつて脚註に收めた。「註曰」としてあるのはそれである。

幻住庵ノ賦

風羅坊

五十年やうちかき身は、苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蜚蟲のみのをはなれて、行衛なき風雲にさまよふ。かの宗鑑がはたごを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさぐりて、松嶋・しら川に面をこがし、湯殿の御山に袂をぬらす。猶うたふ鳴そとの濱邊よりゑぞがちしまを見やらんまでと、しきりに思ひ立侍るを、同行曾良なにかしといふもの、多病いぶかしなど袖をひかゆるに心たゆみて、象潟といふ所より越路のかたにおもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯に、きびすを破りて、ことし湖水のほとりにたゞよふ。鳩の浮巢の流とどまるべき芦の一片のやどりをもとむるに、その名を幻住庵といひ、その山を國分山コクブンサンといへり。古き御社の立せたまへば、六根をのづから清ふして塵なき心地なむせらる。かの住捨し草の戸は、勇士菅沼氏曲水子の伯父なる人の此世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせばかりのむかしになりて、棲すまはまぼろしのちまたに残せり。誠に知覺迷倒も皆たゞ幻の一字に販して、無常迅速のことはりいさゝかも忘るべき道にあらず。山はさすがに深からず、人家よき程にへだより、石山を前にあてゝ岩間山のしりへ

○朝夕——テウセキ。
 日、宗鑑法師ハ山崎
 ニ住テ門前ノ旅籠屋
 朝夕ヲ喰ケルトゾ。
 ○湯殿の御山に——奥
 殿にぬらす涙哉」

○知覺迷倒——註曰、
 知覺ト迷倒ハ佛書ニ
 迷悟ノ二ナリ。

にたてり。南嶺高く峯よりおろし、北風はるかに海をひたして涼し。おりしも卯月のはじめなれば、つゝじ咲残り山ふじ松にかゝりて、時鳥しば／＼過るほど、宿かし鳥の便さへあるに、木つゝきのつゝくともいでじ、かつこ鳥我をさびしがらせよなど、ひとりよろこび、そぞろにたのしみて、吳楚東南のながめにはぢず、五湖三江もこゝに疑しきや。日枝の山ひらの高ねより辛崎の松は霞こめて、膳所の城は木ノ間にかゞやき、勢出のはしに雨晴ては、栗津の松ばらに夕日を残す。三上山はふじの俤にかよひて、むさし野の古きすみかと思ひ出られ、田上山に古人をしたふ。さゝほが嶽・千丈が峯・はかま・ごしといふ山あり。笠とり山に笠はなくて、黒津の里人の色や黒かりけむ。猶はた眺望くまなからんと、後の峯にはひのぼり、松の棚つくり、蘂の圓座をしきて、是を猿の腰かけと名づく。つたへ聞ぬ、除老が海棠集の飲樂も、市にありてかまびすしく、王道人が主薄峯の住ゐも、爰を捨てうらやむべからず。虚無に眼をひらいて嘯き、辱顔にしらみを捫て座す。たま／＼心すこやかなる時は、薪をひろひ清水をむすぶ。小齒染ひとつ葉のみどりをつたふとく／＼の葉をわびては、一爐のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがに

○かつこ鳥——註曰、祖翁ノ發句ニ、うき我をさびしがらせよかんこ鳥。
○吳楚東南——註曰、杜詩「日夜浮東海」、此二句ハ猿蓑索ノ彼ノ記ニモ、蓑索ノ湘洞庭にはしり身は瀟然ルヲ遺稿ノ夜話ニ假名蹟名ノ配ヲ評スラルトテ、故翁テ幻夜話ノ舉テ、我嘗テ幻夜話不案ナリ、魂ハ吳楚ノ書續ケタルハ一楚ト云ベキニ、身ハ瀟湘ト返テ爾波ヲ失ケント返ス。
○笠とり山——註曰、笠取山ト黒津ノ里ハ、彼ノ記ニハ前口評アリヲ書續ケテ、笠とりふもとよ木こりの聲とる哥といひて

心高く、たくみをける物數奇もなし。持佛問をへだて、よるの物くらふべき所などいさゝかしつらへり。さるを高良山カウヤマの僧正洛にのぼり居給ひしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆をとりて、幻住庵の三字をおくらる。其裏には予が名を書いて、後見ん人の記念ともなれと也。山居といひ、旅寐といひ、させるうつは物たくはふべきにもあらず、木曾の檜笠、越の菅簑ばかり、枕の上の柱にかけたり。晝け宮守の翁、桮の里人など入きたりて、ゐのしゝの稻くひあらし、鬼のまめ畑にかよふなど、我聞しらぬ咄に日を暮し、かつはまれ／＼とふらふ人も、夜座しづかにして影をともし、岡兩に對しては是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさむとにもあらず。病身やゝ人にうみて、世をいとひし人に似たり。何ぞや、法をも修せず、俗をもつとめず、いと若き時よりよこざまにすける事侍りて、しばらく生涯のはかり事とさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を恥るのみ。勞して功むなく、魂つかれ眉をしはめて、秋も半に過行まゝ、風景朝暮の變化とても、又たゞまほろしの住みならずやと、やがて此文をとめて立さりぬ。

○岡兩に——註曰、莊子二岡兩向と影云々。

ニハ名所ヲ續ケテ、黒津の里はいとくらふしげりとあり、此等ニ花實ノ二用ヲ知ベシト。
○高良山の僧正——註曰、高良山ハ筑紫ニ在リ、僧正ハ加茂ノ甲斐ガ殿子ナリト額ノ裏書ニアリ。

四四、幻住庵記

この記は諸書に採録されて居るが、その初めて世に公にされたのは、元祿四年刊の『猿蓑』である。これには向井去來の兄震軒の「題芭蕉翁國分山幻住庵記之後」といふ序并詩が添うて居る。その後『風俗文選』を初め諸書に收められ、芭蕉の文章としては最も有名なものの一つである。文の終に附した句は夏季であるが、震軒の序并詩には「元祿庚午仲秋日」とあり、又現に大津市村田虎次郎氏の藏する眞蹟にも、句の後に「元祿三仲秋日 芭蕉自書」と識してある。前掲幻住庵記初稿并に幻住庵賦によつても、芭蕉が秋の頃まで幻住庵に住んで居た事は明かで、初稿にすでに「初秋半に過行く」と言つて居るのだから、この記は少くともそれより後に成つたものでなければならぬ。即ち眞蹟に識した通り、元祿三年八月の作と推定される。思ふに夏木立の句を添へる爲に、初稿や賦に存した最後の一節を除いたのであらう。

幻住庵は菅沼氏の裔が絶えた後荒廢に歸したが、寶曆三年に至り雲裡坊が鶴仲寺の境内に再興した。その由來については、數代の後幻住庵住となつた惠逸が、弘化三年に撰んだ『夏こたち集』に詳しく述べ、なほ雲裡坊から傳來の芭蕉眞蹟「幻住庵記」を摹刻して掲げて居る。前

に述べた村田氏藏の眞蹟は、即ち右の原本と認められる。又芭蕉三十三回忌集『放生日』（野坡撰、享保十一年刊）に、

各志の法施を義仲寺に残す。（中略）幻住庵の古跡を尋ね侍り。かのつゝじ咲残り、山藤松にかゝり、郭公しばし過るなど書給へるも、今さら卯月の空まのあたりにうごきて、おのゝ涙數行に及べり。橘治かたに有る幻住庵記の草稿も、いかなる願にかとゝのへ給ひけんと、そゞろに時をうつして立さり侍る。

とあつて、當時の幻住庵のさまも窺はれ、又記の草稿が京都の書肆橘屋治兵衛の許に傳はつて居た事も知られる。右の草稿の内容は全く分らないが、『和漢文操』が橘屋から出版されて居る事を思へば、その中に收められた「幻住庵ノ賦」が即ちそれではあるまいかと推測される。

本文は『猿蓑』、『風俗文選』及び眞蹟の三とも殆ど異同はない。今は『猿蓑』によつて本文を掲げ、『風俗文選』并に眞蹟との異同を脚註に附した。原文には振假名は全くないが、通讀の便宜上『風俗文選』並に眞蹟を參酌して、假名を附した。なほこの記の註釋として、田喜庵護物の『あしのひともと』（文政十年刊）があり、出典故事を探る事が詳密である。又閑日庵鷗里の『三四考』（天保九年刊）の中にも「幻住庵記解」があり、梶柯坊空然の『猿蓑さかし』（文政十一年刊）もこの記の註釋に及んで居る。

幻住菴記

芭蕉卿

石山の奥、岩間のうしろに山有、國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゝせたまふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家に、は甚忌なる事を、兩部光を和げ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し。日比は人の詣ざりければ、いとど神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年計むかしに成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年計にして、五十年やゝちかき身は、養蟲のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂。鳩の浮巢の流とどまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかかりそめに

- 翠微——山の半腹をいふ。
○唯一の家——唯一神道の家、吉田家。
○兩部——兩部神道。

- あるじの僧——膳所藩士菅沼修理定知。法名幻住宗仁居士といふ。
○曲水の父定澄の兄。
○曲水——膳所の藩士、通稱外記。曲水は俳號。後曲翠といふ。又馬指堂と號す。享保二年好臣を斬つて自盡した。
○五十年——眞蹟「いそぢ」。この時芭蕉四十七歳。
○蝸牛家を——眞蹟「かたつぶりいゑを」。風俗文選「蝸牛の家を」最き日に——眞蹟「暑き日も」
○今歳——元祿三年。
○蘆——眞蹟「たよふ」。風俗文選「たよひ」
○結添など——眞蹟「ゆひそへなむど」

入し山の、やがて出じとさへおもひをみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松に懸て、時鳥しば／＼過る程、宿かし鳥の便さへ有を、木つゝきのつゝともいとはじなどそとるに興じて、魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南嶺峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城有、橘有、釣たるゝ舟有。笠とりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる哥、螢飛かふ夕闇の空に、水鶏の叩音、美景物としてたらずと云事なし。中にも三上山は土峰の梯にかよひて、武藏野ゝ古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽・千丈が峰・袴腰といふ山有。黒津の里は、いとくらう茂りて、網代守にぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと、後の峰に這のぼり、松の棚作、薬の圓座を敷て、猿の腰掛と名付。彼海棠に集をいとなび、主薄峰に菴を結べる王翁除佞が徒にはあらず。唯睡辟山民と成て、髣髴に足をなげ出し、空山に風を捫て座。たま／＼心ま

○やがて——西行「吉野山やがて出でじと思ふ身の花散りなばと人々待つらむ」

○さすがに——風俗文選「さすがに懸て」真蹟「かゝりて」。風俗文選「かゝつて」。

○宿かし鳥——燕をいふ。

○いとはじなど——真蹟「いとはじなんど」。

○興じて——真蹟「興じては」。

○魂吳楚——杜甫「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南拆、乾坤日夜浮」。

○身は瀟湘——黃山谷「惠崇烟雨隱居坐我瀟湘洞庭、欲喚扁舟歸去、故人言是丹青」。

○城——膳所の城。

○橋——瀨田の橋。

○土峰——富士山。

○田上山に云々——猿丸大夫の古跡があるのをさす。

○網代守にぞ——萬葉集にかゝる歌なし。近江興地志略に古歌として引いた「田上や黒津の庄の廻りあじろ守るとて色の黒さ」を誤つたものか。

○名付——風俗文選「名づけ」。

○いとなび——真蹟「いとなみ」。

○彼海棠に——黃山谷の詩句「徐老海棠葉上、王翁主簿除佞」。その註に「徐佞は家に海棠數株有り、

めなる時は、谷の清水を汲て自ら炊く。とく／＼の雪を化て一爐の備へいとかるし。はた昔住けん人の、殊に心高く住なし侍りて、たぐみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物おさむべき處などいさ／＼かしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞。いとやす／＼と筆を染て、幻住菴の三字を送らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寢と云、さる器うつはものたくはふべくもなし。木曾の檜笠越の菅養計はかり、枕の上の柱に懸たり。晝は稀／＼とぶらふ人々心を動し、あるは宮守の翁、里のおのこ共入來りて、いのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ては影を伴ひ、燈を取ては四兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとはあらず、やゝ病身人に倦うんで、世をいとひし人に似たり。情年月の移こし拙き身の料はらをおもふに、ある時は仕官縣命の地をうらやみ、一たびは佛籙祖室の扉しほに入らむと

巢をその上に結んで時に客とその間に飲むと。又王道人は四方に参禪し、主簿臺上に屋を結んだといふ。
○成て——眞蹟「なつて」。風俗文選「なりて」。

○露顔——山の麓え立つさま。

○空山——石林詩話「青山樹レ風坐」。

○とく／＼の——西行の歌と傳へる「とく／＼と落つる岩間の苔清水汲みほす程もなき住ひかな」。

○高良山の僧正——賀茂流の書道の名、家賀茂の禪官藤木甲斐守敦直の子、家源一如僧正。高良山蓮臺院主であつた。

○農談——朱晦庵「野人蝦酒來、農談日已夕」。

○四兩——莊子、齊物篇「四兩間景曰、蠶子行、今子止、蠶子坐、今子起、何其無特操矣」註に「四兩景外之微陰也」。

○ある時は云々——眞蹟「一たびは仕官縣命の地をうらやみ、ある時は佛籙祖室の……」。

○佛籙祖室——惠能禪師語錄「吾三十而窺佛籙祖室」。

せしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞^{じやう}じて、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。

○たどりなき——風俗文選「たよりなき」風讀には「たとりなき」とある。

樂天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖^{すまか}ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

○樂天は——白樂天、愚舊「詩役五臓神」

先たのむ椎の木も有夏木立

四五、四條の納涼

車庸の『己が光』（元祿五年刊）に句の詞書として出て居り、『泊船集』にもそのまゝ採録してある。句は元祿四年四月刊行の『卯辰集』に「四條河原涼」と題して出て居るので、その前年元祿三年六月頃の作と推定される。『蓬萊島』にも收む。

四條の川原のすゞみとて、夕月夜のころより有明過る比まで、川中に床をならべて、夜すがらさけのみのくひあそぶ。をんなは帶のむすびめいかめしく、おとこは羽織ながう着^{（や）}なして、法師、老人ともに交、桶や、かちやので

○いかめしく——泊船集「いかめしく」

しこまで、いとまえがほにうたひのゝしる。さすがに都のけしきなるべし。

川かぜや薄がききたる夕すゞみ

翁

四六、雲竹の讃

『芭蕉翁文集』（安永五年刊）に收む。他に所見がないが、句は『笈日記』に「雲竹自畫像」と題して收められ、「是は湖南の幻住庵におはす時の作也。君は六十我は五十といへり。老星一聚の前書侍りけるが、あやまりておぼえ侍らず」と支考の附記があり、又『泊船集』にも「此句は雲竹がうしろむきの像に贊のぞみけるに、書て遺はされし」とあるから、もと讃の文があつた事は明かである。蝶夢は眞蹟の傳存するものによつたのでもあらうか。支考が「君は六十年あまり云々」と言つて居るのと、文意が相應する點からも信ぜられる。元祿三年の作か。

洛の桑門雲竹自の像にやあらん、あなたの方に顔ふりむけたる法師を畫て、これに讀せよと申されければ、君は六十年あまり、予は既に五十にちかし。ともに夢中にして夢の形をあらはす。是にくはふるに寐言を以す。

○雲竹——北向氏、書家として名高い。芭蕉の畫道の師といふ。

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

四七、鉢叩の歌

伊勢山田の久保田秋雨氏藏の眞蹟で、鉢叩の自書に讀したものである。『芭蕉翁眞蹟拾遺』にも伊勢松坂三井店吉井政次郎夏谷の所藏として出てゐる。句は『猿蓑』に出で、元祿二年もしくは三年の作と推定される。

鉢たゝきのうた

はせを

霜の夕にねをそへて、うかれ友鳥行さきは、たのしき國のつれづれに、かはる茶の花目ざまし、夢にひとつまいれ、いざひとつ、南無あみだ、く。此曉のひとこゑに、ふゆの夜さへもなく千どり、いざきかむ、南無阿彌陀、く。

からさけも空也の瘦も寒の内

四八、烏之賦

豊前の人文雄の撰『折つゝじ』（明和元年成、安永元年刊）に「右芭蕉翁」として掲げ、なほ右烏之賦は洛兒（註、文雄の門人）行脚の比、湖南の文素亭に眞蹟を拜し、笈の小ふみに
柅、庵主の集々に洩侍をなげくと書給ひしをおもひ、素子に乞寫得て爰に出し侍る。

と附記してあり、既白の『蕉門昔語』（明和二年刊）にも「大津文素所持」として収めてある。
然るに同書には又別に「烏の文作れる加生へ返事、前文は略す」として、同じく文素の所持する左の如き一通の手紙を添へてある。

一、憎レ烏之文御見せ感吟いたし候。乍レ去文章くだしき所御座候而、しまりかね候様ニ相見候間、先々他見被レ成まじく候。ことのほかよろしき趣向ニ而御座候間、拙者ニ可被レ掛ニ御意候。御文章ニ増補いたし、拙者文ニ可レ致候。もし又是非と思召候ハ、拙者文御覽被レ成候而其上ニて、又御改可レ被レ成候。文の落付所何を底意に書たると申事無ニ御ざ候而は、おどろくどき早物語のたぐひに御ざ候。古人の文章に御心可レ被レ付候。此文ニ而ハ烏の傳記に成申候間、御工夫御尤に存候。以上

九月十三日

加生様

はせを

加生は凡兆の前號である。この手紙によれば、即ちもと凡兆の作になる憎し鳥之文に、芭蕉が添削を加へて自家の文章としたものといふ事になる。『去來抄』には凡兆の捨てた句を伊賀の萬平の句として、『猿蓑』に入集せしめた事も見える。實際芭蕉はその趣向を捨てて忍びず、さりとしてあまりに雌黄を加へたものを、そのまま凡兆に與へるのも憚られ、そこで自作として保存する事にしたものであらう。勿論これは文素所持の文と手紙とを、眞蹟と信じた上での推定である。根本的な確説を得るには、今後眞蹟の發見を待つ外はない。年代は凡兆がなほ加生と號して居る點から、元祿三年と認められる。今本文は『折つゝじ』による。〔追捕参照〕

鳥之賦

一鳥小大有て名を異にす、小を烏鵲といひ、大を鵲太といふ。此鳥反哺の孝を讀して、鳥中の曾子に比す。或は人家に行人を告、天の川に翅をならべて、二星の媒となれり。あるひは大年のやどりをしりて、春風をさとり巢を改といへり。雪の曙のこゑ寒げに、夕に寐所へ行なんど、詩哥の才士も情あるに

○鵲太——はしふと。
○曾子——曾參。

云なし、繪にも書れてかたちを愛す。只貪猶の中にいふ時は、その徳大いなり。又汝が罪をかぞふるときは、其徳小にして害又大なり。就中彼翳太は性候強惡にして、鷲の翅をあなどり、鷹の爪の利事を恐れず。肉は鴻鴈の味もなく、聲は黄鳥の吟にも似ず。啼時は人不正の氣を抱て、かならず凶事をひいて愁を向ふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野に有ては田畑を費す、糧に辛苦の勞をしらずや。或は雀のかいこをつかみ、池の蛙をくらふ。人のしかばねを待、牛馬の膈をむさぼりて、終にいかの爲に命をあやまり、鶴の眞似をしてあやまりを傳ふ。これみな汝むさぼる事大にして、其智を責ざる誤なり。汝がごとき心貪欲にして、かたちを墨に染たる、人に有て買値といふ。釋氏もこれをにくみ、俗士も甚うとむ。ア、汝よくつゝしめ。羿が矢先にかゝつて、三足の金鳥に罪せられんことを。

四九、落柿舎記

風陽・兎什共撰の『先手後手集』(明和四年刊)に收む。兩子が江戸に旅宿し白兔園に遊んで、

○かいこ——卵。

○いか——鰻。

○買値——まいす。

○羿——支那の古代の弓術の名人。

○三足の金鳥——太閤の中に居るといふ。

寓目したものであるといふ。『句選年考』にも同集を引いて居る。(たゞし『句選年考』の『先後手集』に關する解説には誤がある。なほ前出「葛城山吟」の解説参照。) なほ確實性に缺くる所があるが、偽作としての反證もないのであげておく。句は『嵯峨日記』に出て周知のものである。元祿四年の作。

洛の何某去來が別墅は下嵯峨の藪の中にして、嵐山のふもと、大井川の流に近し。此地閑寂の便りありて、心すむべき處なり。彼去來物くさきおのこにて、窓前の艸高く、數株の柿の木枝さしおほひ、五月雨漏盡して疊障子かびくさく、打臥處もいと不自由なり。日かげこそかへりてあるじのもてなしとぞなれりけれ。

五月雨や色帟へぎたる壁の跡

芭蕉庵桃青

五〇、水の音

竹内といふのは、かの『野ざらし紀行』に同行した千里の郷里、大和國竹内村であらう。同地には芭蕉は再三杖を曳いたらしく、『夏爐一路』には同地方に傳へられた芭蕉の眞蹟二三を紹介して居る。〔「萩する音」、〔「一枝軒」参照〕これもその眞蹟の一つ。今眞蹟によつて臨寫したと思はれるものによつた。句が他に所見なく、なほ十分の確實性を保し難いが、内容から見て信じてよいと思ふ。年代は明かでないが、夏季に竹内村を訪うたとすれば、まづ元祿三、四年湖南京師に滞在在中の事と思はれる。

鶯やどる竹内に、梅微散て櫻咲より、五月雨の空打晴て、早苗をとれと啼鳥の聲、夕暮ゝ里の細道、肥たる牛に俣がりて、きせるを採て螢を招キ、ひさごがもと暑しなんどて、月を洗へる盃の曲、げにや一瓢千金のおもひ出たのしさや青田に涼む水の音

芭蕉庵桃青

五一、月見賦

○微——や、
○早苗をとれと啼鳥——
時鳥をいふ。
○夕暮、——夕暮る、
○俣がりて——時がりて。

支考の『和漢文操』(享保十二年刊)卷之一、賦類に收めてある。終に添へた評に、

此賦は元祿の始ならん、湖南の幻住庵に山住の時、祖翁と先師(註、支考をさす)と文章の評論ありて、假名眞名の通用より、俳諧の家の筆格を建べきと、百練千鍛の斧を加へて、祖翁は月ノ賦に四六の法をやはらげ、先師は文ノ賦に五條の式を傳ふ。さるは百世の家訓にして無下の俳集に入む事をおそれて、獅子庵の遺稿に十襲せり。しからは本朝文鑑に先とて出すべかりしを、季吟老人の硯ノ賦に敵せば、師を輕んずるに似てんとて、既望ノ賦の幽玄なる物を對す。それらは選場の心得にして、百世に文鑑の時宜といひ、道をおそるゝの冥加といはむ。今や文操の本懐といふは、眞名には舊家の賦をえらみ、假名には兼好の文を對す。そなたは文章の博士にして、大和に眞名の祖とあふぐべく、こなたは風雅の隠者にして、一道の意地の師とあがむべし。しかれども二篇を評せば、我家の談笑にとほしければ、あながちに溫故の辭宜にして、一部の詮する所といふは、月見ノ賦に假名の眞名なるをしり、文ノ賦に眞名の假名なるをしらば、雪ノ賦は虛實の文對にして、和漢に文を操といへる標題の心をもしるべきと也。誠に此賦の婉麗にしてしかも談笑の自在なる、そこを我家の筆格にして、文章はよし五箇の絶妙に感却すべし。此故に此賦には句讀に我家の式をわかち、文ノ賦には助語の圈點を加ふ。一部の新製は此二篇にしるべき也。

と言つて、俳諧の文格に於ける此の賦の重要性を説いて居る。しかもこれに對へて、自作の文、賦についての宣傳も怠つて居ないのである。湖上に三夜の月見をした事は、『笈日記』上巻、湖南部に「三夜の月」と題し、

是もむかしの秋なりけるが、今年は何の本すゑを見侍らんとて、待宵は楚江亭にあそび、十五夜は木所塚にあつまる、いざよひは船を浮て、さゞ浪やかた田にかへるとよめるその浦の月をなん見侍りける。路通がまつ宵に月をさだむる文あり、支考が名月の泛湖の賦あり、阿叟は十六夜の辨をかきて竹内氏の所にとゞむ。此三夜を月の本末と名づけて、成秀・楚江が二亭に侍り。文しげゝれば爰にしるさず。

と述べて居る。これによつて芭蕉に十六夜の辨の作があつた事は明かであるが、名月の夜の作は支考自身の泛湖の賦の事のみを言つて、芭蕉に月見賦があつた事には及んで居ない。こゝにまづ疑がある。次に前掲の評によれば、この賦は芭蕉が幻住庵に山住の時、支考と文章の評論があつて作つたといふ。然るに湖上觀月の年代は『堅田集』によれば元祿四年の事であるから、その賦が幻住庵山居の間に評されたといふのはをかしい。更にこの賦中の句「名月や湖水に浮ぶ七小町」は、『初蟬』によれば「名月や見たち並ぶ堂の縁」、「明月や座にうつくしき顔もなし」と三句同時の吟である。而してその最後の句は「月見する座にうつくしき顔もなし」といふ形

で、元祿四年四月に成つた『卯辰集』に出てゐる。随つて七小町の吟は元祿三年秋の作と考へられ、それがこの賦に見えるのも不審である。かうした矛盾や不審が存する事は、從來も言はれて居る通り、この賦が支考の偽作たるべきを疑はせるに十分な理由となる。『和漢文操』の評に、これを襲に『本朝文鑑』に收めなかつた所以について、事々しい辯解を試みて居るのも、却つてその間に何かの魂膽がある事を思はせる。而して何よりもこの文章を通讀すると、その間に支考らしい口質を多分に感ずるのである。卒直に私見を述べるならば、これは支考が『和漢文操』に自作の文ノ賦を掲げるに際し、それを權威づける爲の作爲に出たものだと思へる。即ち『笈日記』に謂はゆる支考の泛湖の賦をもととして、これに多少の修飾を加へて芭蕉の作としたものであらう。たゞ觀月の年代を決すべき資料たる『堅田集』が後世の出版であり、——尤も年代を記したのは路通の眞蹟によつてゐるので、比較的信ぜられるのであるが、——又支考の口質と見るのも結局主觀的問題に終るので、これを全然偽作として除き去るには、なほ多少の顧慮を要する。よつて今は姑く芭蕉文集中に保留する事にしたが、少くとも偽作の疑の最も多いものたる事は言ふまでもない。

『芭蕉文集』・『蓬萊島』には採録してあるが、『芭蕉翁文集』にはこれを收めず、又『一葉集』には眞偽不審の部に入れてある。なほ『和漢文操』には註がついて居り、今參考に資すべ

きものは、「註目」として脚註に加へた。又句讀については同書の評に特にことわつてあるので、本文の句讀もすべてそれに従つた。

月見ノ賦

芭蕉翁

ことし琵琶湖の月見むとて。しばらく木曾寺にたび寐して。膳所松本の人々を催すに。乙州は酒をたづさえて。泉川に三日の名をつたへ。正秀は茶をつゝみて。信樂に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ酒といひ。かたふの人も二派にわかれて。酒堂は灯にかたぶきて。其茶に玉川が歌を詠じ。丈艸は月にうそぶきて。其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く。木節は老ひぬ。智月は物のおぼつかなふ。かつきのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は。酒におどろき茶に感じ。ほむるもそしるもそらに風吹て。爰に三子者の志をためざらんや。まして其外の友とする人も。幾々洋々の心ざしをしれ。ば。すべては飲中八仙のあそびならん。誠や。つれづれの法師だに。心をつくるはぬ友えらびは。かゝる月見の侘なるやと。思ひしまゝの草の庵に。浮世の外の風狂をつくせり。

- 泉川——註曰、百人一首ニ三日の原わききとてか懸しかるらん。按スルニ三日ノ名トハ大津ニ泉堂ト云ヘル酒家アリテ、三日ノ原ト云フ名酒ヨリ往來ノ驛人モ其名ニ詩歌ヲ殘セリトゾ。
- 信樂——註曰、近江ニシテ政所ト云ヘル某ノ名所ナリ。
- かたふ——荷擔。
- 玉川——茶經の善哉臨川の號。
- かづきのあま——註曰、頼氏に尼の事をいへる詞に、中々なま浮びにてあしき道にはたゞよひぬべきとあり、善哉ノ歌ハ寧ルニ及バズ。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乗じて。湖水の月に船を浮べんと物このむ人の風情をそへたるに。杖に瓢簞の唐子はなけれども。扇に茶瓶の若男あれば。赤壁の船のとぼしさにはあらざめり。さゞ波や。打出の濱の名にしあふ。鏡の山もこなにさしむかひ。日枝は横川の杉につらなりて。比良の高ねは雁をもかぞへつべし。うしろに吾羽の峯たかく。石山の鐘はあは津の嵐にさえて。そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は。今宵をもてなすに似たるべし。

名月や湖水に浮ぶ七小町

されば。我朝の紫式部は。石山に源氏のおもかけを寫し。唐國の蘇居士は。西湖に越女のよそほひをたとふ。いづれも風雅の名にのこりて。今のまほろしに浮ざらんや。實そも和漢の名蹤なりけらし。さて松本に舟をさしよせて。茶店の欄干に心をはなてば。目はよし蓬萊の水をへだてず。身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。竹の林の酒も時ならで。松が江の鱸はこよひなるをや。猶はたかたぶく月の名残には。辛崎の松もひとりやたてろ。古き都の名もゆかしければ。尾花川の明ぼのをこそと。千那・尙白をおどろかしぬれば。夜はは

○三子者——註曰、論語先進二、三子者之言何如、子曰亦各言其意也已矣。

○錢々洋々——註曰、
可乎二白牙卜子胡卜

知子ノ事アリ、

洋々八零中ノ趣ナリ

○つれづれの法師――

註曰、つれづれ興
よき友三あり、一

は物くる、友、

はくすし、三には何
患ある友云々。

○思ひしまゝ――註曰

兼好ノ歌ニ、こゝと

また浮世なりけり
そながら思ひしま

の山里もがな。

○唐子——カラコ。

白、繪本抄二李、飛

三
千
尺
ノ
詩
ニ
據
レ
リ

トミ
ゾ。

○雁をも——躬恒「中
其にはねうちかたは

飛ぶ雁の數さへ見ゆ

る秋の夜の月」

○蘇居士——蘇東坡。

○蓬萊の水――註曰、
神仙傳ニ蓬萊之墟

弱水不堪泛羽手

○芙蓉の露——註曰、

443

1. *Journal of the American Medical Association*, 1997; 277: 1039-1043.

や五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠と推蔽のむかしながら。船にこよひの遊をおもへば。此座に韓愈が文章をもあざむき。賈嶋が詩賦をももどきぬべき詩人文客にとほしからねば。たとへ赤壁の前後といふとも。その地に此人をはづべきやと。見ぬもろこしを相手にとりて。今宵の風流をあらそふほどに月は長等山の木の間に入りぬ

五二、堅田十六夜之辨

元祿四年仲秋、湖上に三夜の月を見て、芭蕉が十六夜の辨を竹内氏の許に書きとゞめた事は『笈日記』に見える。(『月見賦』解説参照) 史邦の『芭蕉庵小文庫』(元祿九年刊)に、「堅田十六夜之辨」と題して掲げた一文が即ちそれである。なほ支考の『本朝文鑑』(享保三年)巻二賦類に、「既望賦」と題して収めたものも、詞章に若干の異同はあるが内容は同一である。これには例によつて支考の評がついて居る。参考の爲抄録しておく。

此賦ハ誠ニ瀏亮ニシテ全ク賦ノ體ヲ盡セリト云ハン。去レバ鏡山ノ一節ヨリ、古哥ニハ月

漢武故事ニ、駭ニ芙蓉掌ニ露云々、仙術ヲ學ブ事ナリ。

○竹の林——竹林七賢をさす。

○松が江——松江を竹の林に對してかくいへり。

○松もひとりヤ——註曰、西行ノ歌ニ、谷のにとひとりぞ松は立るなる我のみ友のなきとおもへば。

ノ雲ヲ寄セテ、此ニ其夜ノ亭主振^フラ云イ、古詩ニハ玉塔ノ喩ヘテ借テ、千體佛ノ光ヲ添フ。尤モ故事古語ノ用イ所ハ、此等ノ摘採ニ知ルベキナリ。本ヨリ先翁ノ文章ハ獅子庵ノ遺稿ニモ數多ナガラ、或ハ湖東ノ文選（註、許六の風俗文選をさす）ニ入り、或ハ門下ノ俳文集ニ出テ、今ヤ再選スルニ及バズ。譬ヘ百篇ヲ見盡ストモ此一篇ノ趣意ヲ見テ、此一篇ノ虛實ヲ知ラバ、和哥ノ幽玄モ爰ニ明カニ、俳諧ノ頓挫モ爰ニ明ナラン。去ルハ黃門ノ詞ニスガリテ、歡樂ノ中ノ哀情ヲ忘レザルハ、例ニ樂ンデ淫セズトヤ。斯翁ニ於テ斯文アランニハ。

この文はなほ寛政十年刊『堅田集』にも、「いさよひ」と題して收めてある。この書は芭蕉並に當時の門人の眞蹟の、堅田地方に傳へられたもの數種を卷頭に掲げ、寛政八年八月浮御堂で堅田連衆の興行した翁追善の俳諧等を收めたものである。撰者は明記してないが、右の追善脇起俳諧の脇を起した歌雄の主催であらう。随つて『堅田集』所載のものとはもと芭蕉の眞蹟によつたのであり、後世の出版ではあるが重要な資料とせねばならぬ。あるひは『笈日記』に竹内氏の許にとどめたといふそれだつたものではあるまいか。（竹内氏は成秀のこと。次項解説參照）詞章は『小文庫』と同一である。思ふにこの方が初稿で、『本朝文鑑』所收のものは後に多少推敲を加へたものであらう。今兩者を併べ掲げ、なほ『小文庫』所出の方に、『堅田集』の

「いさよひ」との異同を註した。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にも採録され、それは『本朝文鑑』によつて居る。芭蕉七回忌追善集『雪の葉』（一吟撰、元祿十三年冬刊）に無名庵の品々を掲げた中に、「堅田十六夜之文章自筆」とあるのは即ちこの文であらう。

(一)

堅田十六夜之辨

望月の殘興なをやまず、二三子いさめて舟を堅田の浦にはす。其日申の時ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにゐたる。醉翁狂客月にうかれて來れりと聲／＼によばふ。主思ひかけずおどろきよろこびて、簾をまき塵を拂ふ。園中に芋あり、さゞげ有、鯉・鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれど、岸上に薙をのべて宴をもよほす。月はまつほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。かねてきく仲の鵜の望の日、月浮見堂にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三上、水荳の岡南北に別れ、その間にしてみね引はへ、小山嶺をまじゆ。とかくいふ程に月三竿にして黒雲の中にかくる。いづれか鏡山といふ事をわかず。主のいはく、折／＼雲のかゝるこそと、客をもてなす心いと切なり。やがて

○いさめて——す、めての意。

○聲／＼によばふ——堅田集のいさよひ「舟中より聲／＼によばふ」

○仲の鵜——いさよひ「仲秋」

○三上——三上山。

○水荳の岡——近江八幡の西にある小丘。

○千體佛——浮御堂に安設す。恵心僧都が千體の阿彌陀佛を作つて、こゝに堂を創建したといふ。

月雲外にはなれ出て、金風銀波千體佛のひかりに映ズ。かのかたぶく月のおしきのみかはと、京極黄門の歎息のことばをとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の觀のたよりとなすも、此堂にあそびてこそ、ふたゝび惠心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじまた云、興に乗じて來れる客を、なと興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚て、月は横川にいたらんとす。

鎖明て月さし入よ浮御堂

安くと出ていざよふ月の雲

はせを
同

既望ノ賦

芭蕉庵

望月の殘興なをやまず、今宵は二三子にいさめられて、船をかた田の浦にはす。其日もたそかれのほどならん、なにがし成秀といふ人の家の後に漕入れ、醉翁狂客の月にうかれて來れるありと、船の中より聲くによぶ。あるじは思ひがけずおどろきよろこびて、簾をまきちりをはらふに、その後園に、芋ありさゝげありて、鯉・鮒の切目たゞさぬにしもあらず。やがて岸上に楊をならべ筵をのべて、をのくいざ宵の宴を催す。月はまつほどもなく

○かたぶく月——定家

「あけはまた秋のな
かばも過ぎぬべしか
たぶく月の惜しきの
みかは」

○京極黄門——定家の
こと。

○なすも——いさよひ
「なす」

○衣も——いさよひ
「衣を」

○鎖明て——いさよひ
にはこの句一句だけ
録す。

○榻——原本「榻」に誤
り作る。今改む。

さし出て、湖上はなやかに照わたれり。兼てきゝぬ、仲秋望の日は月の浮見堂にさしむかふを鏡山といふなるよし。今宵なをそのあたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上、水壑は左右にわかれて、その間に十二峯の影をひたす。とかくいふ程月も三竿にして、黒雲のうちにかくれたれば、いづれか鏡山といふ事をわかず。されどあるじの興をそへて、おり／＼雲のかゝるこそと、客をもてなせる心ざしいと切なり。やがてその月の雲をはなるゝほど、水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひのそらを世の中にかけて、かたぶく月のおしきのみかはとは、京極黃門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此堂にあそびて、二たび惠心僧都の衣をうつほす。無常觀相の便ならずやといふに、あるじは興に乗じて來れる客を、などさは興つきて歸さむやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかたぶきて、姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

五三、成秀庭上松を譽むる言葉

○姑蘇城——今の蘇州府張繼の楓橋夜泊の詩に名高い寒山寺の鐘聲をいふ。

『堅田集』(前項解説参照)に「成秀庭上松を譽ること葉」と題して收む。題は恐らく集の編纂者が、便宜設けたものであらう。堅田の人既調の所持した芭蕉の眞蹟によつたといふ。成秀のことは前の「十六夜之辨」に見える。即ち何某茂兵衛成秀とあるその人である。堅田の人、竹内氏。恐らく名月の夜にもてなされた御禮旁々、主の乞に任せて書き與へたものであらう。『笈日記』によれば、「十六夜之辨」も亦成秀の許に書きとゞめたといふ。

松あり、高さ九尺ばかり、下枝さし出るもの一丈餘、枝上段を重、其葉森々
とこまやかなり。風琴をあやどり、雨をよび波をおこす。箏に似、笛に似、
鞞に似て、波天籟をとく。當時牡丹を愛する人、奇出を集めて他にほこり、
菊を作る人は、小輪を笑て人にあらそふ。枯木・柑類は其實をみて枝葉の
かたちをいはず、唯松獨霜後に秀、四時常盤にしてしかもそのけしきをわか
つ。樂天曰、松能舊氣を吐、故に千歳を経と。主人目をよろこばしめ心を慰
するのみにあらず。長生保養の氣を知て、齡をまつに契るなるべし。

元祿四年仲秋日

はせを

〇に、て——に似て、

五四、宿明照寺

『韻藻』（元祿九年刊）に載す。「宿明照寺」と題し、「元祿辛未于皆四十有八歳」と註してある。即ち元祿四年冬東下の折、江州平田なる李由の明照寺を訪ねて、こゝに泊つた時の作である。『笈日記』に

元祿五年神な月のはじめつかたならん、月の澤ときこへ侍る明照寺に羈旅の心を澄して

たふとがる涙やそめてちる紅葉

とあるのも同時の吟で、元祿五年は四年の誤。

當時此平田に地をうつされてより、已に百年にをよぶとかや。御堂奉加の辭に曰、竹樹密に土石老たりと。誠に木立物ふりて殊勝に覺え侍ければ、

百年の氣色を庭の落葉哉

○當時——當寺の誤か。
○平田——菴根の西約一里。

五五、卒都婆小町讃

『本朝文鑑』（享保三年刊）卷之八、養類に出で、

此一篇ハ短簡ナガラ六箇ノ尊、字ヲ用イ、六箇ノ養笠ヲ用テ、然モ其句ニ云イツマケタル、去ルハ疊字トモ疊語トモ、古樂府ノ體ニモ似タランカ。但シ此贊ハ湖南ノ才陀亭ニ在リテ、其繪ハ三井ノ定光坊ニ在リトゾ。

とある。句は元祿五年刊の『己が光』に「小町畫讃」と題して見え、元祿四年冬の作と推定される。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にも收む。「追補二参照」

卒都婆小町ノ贊

芭蕉庵

あなたふと／＼養もたふとし、笠もたふとし。いづれの人かかたりつたへ、いかなる人か寫しとどめて、千歳のまほろし今こゝに現す。そのかたちある時は、たましゐもまた爰にあらん。養もたふとし、笠もたふとし。

たふとさや雪ふらぬ日もみのと笠

五六、雪の尾花

遊五撰『雪の尾花』（延享元年刊）に「右此眞筆の一章は井筒屋重寛が亭にて、筑前の遊五寫し留侍る。則秀吟を以テ一集の號とせり」とあつて掲げてある。即ち京の書肆井筒屋所藏の眞蹟によつたのである。元祿四年十一月江戸に歸つた時の作で、なほ『芭蕉翁發句集』には、「三秋を経て草庵に歸れば、舊友門人日くむらがり來りて、いかにと問へばこたえ侍る」、「一葉集」には「三秋を経て深川の艸庵に歸ければ、舊友門人日くむらがり來て、いかにと問へばこたへ侍る」と詞書がある。

よの中定がたくて、此むとせ七とせがほどは旅寢がちに侍れ共、多病くるしむにたえ、とし比ちなみ置ける舊友門人の情わすれがたきまゝに、重てむさし野にかへりし比、ひとく日く草扉を音づれ侍るに、こたへたる一句、

ともかくもならでや雪のかれお花

はせを

五七、栖去之辨

『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に出づ。「年號いづれの年にやしらず」と附記してあるが、橘町に冬籠りして翌年の正月二月になつたといふのだから、元祿五年の作と推定される。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にも収む。『蓬萊島』に文の終に「雲雀より上にやすらふ峠かな」の句を添へてあるのは、『小文庫』を見誤つたので、句はこの文に添うたものではない。

栖去之辨

はせを

こゝかしこうかれありきて、橘町といふところに冬ごもりして陸月、きさるぎになりぬ。風雅もよしや是までにして口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて物のちらめくや風雅の魔心なるべし。なを放りして栖を去、腰にたゞ百錢をたくはへて柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情終に莚をかぶらんとは。

○陸月——臘月の誤。

○柱杖——しゆぢやう。
禪僧の用ひる杖。

五八、素堂壽母喜壽賀

眞蹟（菊本直次郎氏藏）による。許六の『韻塞』（元祿九年刊）にも出て文に小異があり、なほ句は中七「萩の手本や」となつて居る。これにつき『一翁四哲集』には「杉風家藏七種の巻物に萩の千本とあり、百五十年來萩の手本と誤り來れり」と辯じて居るが、この眞蹟が即ちもと杉風家藏の巻である。元祿五年の作。

素堂子の壽母七十あまり七としの秋、七月七日をことぶくに、萬葉の七種をもて題とす。是につらなる者七人、此縁にふれてをの／＼又七叟の齡に習はん。

萩

七株の萩の千本や星の秋

芭蕉

尾花

織女に老の花あるおばな哉

嵐蘭

葛花

○素堂子の壽母——韻塞「素堂の母」

○「七月七日を」——同「七月七日に」

○此縁——同此結縁

○千本——同「手本」

布に煮てあまりぞ榮ふ葛の花

沾徳

なでしこ

動なき岩撫子や星の床

曾良

女郎花

けふ星の賀にあふ花やをみなへし

杉風

ふぢばかま

蘭の香にはなひ待らん星の妻

其角

あさがほ

めでたさや星の一夜もあさがほも

素堂

昔此日家陸卿七そじなると詠じ給ふは、みづからをいはふ成べし。今我母の齡あひにあふ事をことぶきて、猶九そじあまりこのつの重陽をもかさねまほしくおもふ事しかり。

壬申歳

○昔此日——韻藻によれば以下は素堂の朝顔の句の詞書となつてゐる。
○今我母の齡——韻藻「今我母のよはひの」なり——同「しかり」

五九、芭蕉を移す詞

支考の『三日月日記』（享保十五年刊）に出づ。『三日月日記』はもと出羽の呂丸が元祿五年江戸で芭蕉から附與された稿本で、その歿後同國の竹江が持ち傳へたのを、佐川氏李夕が譲受けて居た。それを支考が梓に上せたのである。右の稿本は現に鶴岡市の平田家に所藏される由である（昭和十年刊、玄々亭芦汀著『莊内に於ける芭蕉』参照）。元祿五年の作。『芭蕉文集』・『芭蕉翁文集』等に收む。なほ『蓬萊島』には、これと全く異つた「移芭蕉辭」が載つて居る。別文として次に掲げた。

芭蕉を移す詞

芭蕉

菊は東籬にさかへ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非にありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたらず、水清からざれば花さかず。いづれの年にや、栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植ふ。風土芭蕉の心にやかなひけん。數株の莖を備へ、其葉茂りかさなりて庭を狭め、萱が軒端もかくるばかりなり。人呼で

○菊は東籬——陶淵明の故事。
○竹は北窓——晋の王子猷竹を愛して一日も此の君なかつたといふ故事。

草庵の名とす。舊友、門人ともに愛して、芽をかき根をわかつて、處々に送る事年々になんなりぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたりちかき人々に霜の覆ひ風のかこひなど、かへすくたのみ置て、はかなき筆のすさびにもかき残し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寐の胸にたまり、人々のわかれ、ばせをの名残、ひとかたならぬ佐しさも終に五とせの春秋を過して、ふたたび芭蕉にのみだをそぐ。今年五月の半、花たちばなのほひも、さすがに遠からざれば、人々の契りも昔にかはらず、猶此あたり得立さらで、舊き庵もやちかふ三間の茅屋つきくしう、杉の柱いと清げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くしわたして、南にむかひ池にのぞみて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を追てなぐめなり。浙江の潮、三ツまたの淀にたへて、月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、先ッ芭蕉を移す。其葉廣ふして、琴をおほふにたれり。或は半吹おれて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破て風を悲しむ。適く花咲どもはなやかならず、莖太けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたくへて其性たふとし。僧懷素

○一とせ——元祿二年の奥の細道の行脚。

○松はひとりに——西行「こゝをまた我が住みらくてうかれなば松はひとりにならんとすらん」

○五とせ——三とせの誤。芭蕉は元祿四年冬江戸に歸つた。

○今年——元祿五年。○浙江——支那浙江省の錢塘江。

○三ツまた——三股、隅田川の下流、今の田川と永代橋との間。

○山中不材——莊子、山水篇による。

○懷素——唐の書家。初め貧賤なる爲色を紙の代用として手を習つたといふ。

○張懷瓘——宋の人。名は贍、字は原、その時に「芭蕉心盡展新枝」新巻新

はこれに筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て修學の力とせしとなり。予其二ツをとらず、唯此陰にあそびて、風雨に破れやすきを愛するのみ。

六〇、移芭蕉辭

『蓬萊島』(安永四年刊)に「移芭蕉辭」と題して收む。前に掲げた一文と全く異り、別案として草したものであらう。所據は明かでないが信すべきものと認められる。元祿五年の作。

胸中一物なきを貴とし、無能無智を至とす。無住無庵又その次なり。何か無流の鐵肝鶯鳩の翅にたゝむ。一とせ思ひまふけたる辻風^(つゝかぜ)に吹さそはれて、みちのく出羽の境に檜笠破れたり。終三秋を経てふたゝび武江^(ぶけ)の東三またの秋を悲しび、黃菊他日の泪をそぐ、既柱は杉風・枳風が情を削り、住居は曾良・岱水が物ずきを侘ふ。北に背て冬をふせぎ、南にむかひて納涼をたすく。竹欄池に臨ては月を愛すべき料にやと、初月の夕より夜毎に雨をいとひ雲をくるしむほど、器こゝろぐに贈りつどひて、米は飄にこぼれ、酒は徳利に

○辻風——旋風。

心暗闇に、
新心集、新徳一、
隨新集、延新、知こ

滿。竹を植、樹をかこみて、芭蕉五もとを移す。その葉七尺餘、凡琴をかくしぬべく、琵琶の袋にも縫つべし。風は鳳尾をうごかし、雨は青龍の耳をうがつて、新葉日々横渠重のちを卷上、年上人の筆を待て開く。予は其ふたつをとらず、唯此かげに遊て風雨に破れ安からむ事を愛すのみ。

芭蕉葉を柱に懸む庵の月

六一、僧專吟餞別之詞

『芭蕉句選拾遺』（寶曆六年刊）附錄に「湖東辻村太田氏梅契家珍」として掲げてある。元祿六年の作。『芭蕉翁文集』にも收めてある。

僧專吟餞別之詞

杖頭に草鞋をかけて、笠の内に名をあらはす。元祿六とせ彌生の初、僧專吟武江の東深川の艸扉を開て、既一步をはじめと書く。此僧常に風情を好み市を避て、年々斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣むとす。身は雲外

○僧專吟餞別之詞——
この題は『句選拾遺』
編者の設くる所であ
らう。

○斗藪——頭陀。乞食。

の鶴にひとしく流に翳をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるふて、野に伏雲に泊らん、胸中の塵いさぎよし。予、葎の交をなす事久し。今此別にのぞみて、ともに岸上に立て、箱根山はるかに見やる。彼白雲のたはめる處こそ、旅愁の艱難さかしきまたなるべけれ、君かならず首をめぐらせて見よ。われ又此岸上に立んといひて杖をわかしぬ

鶴の毛の黒き衣や花の雲

はせを

六二、柴門辭

許六の『韻塞』（元祿九年刊）・『風俗文選』（寶永三年刊）卷之一、辭類に出づ。前者には「許六離別詞」と題し、後者には「柴門辭」と題して傍に「送^ル歸^ル許六之故郷^ニ（錢別文也）」と書添へてある。江戸に滞在中であつた許六が、彦根に歸藩するのに餞した文である。元祿六年四月の作。『蓬萊島』・『芭蕉文集』・『芭蕉翁文集』等すべて「柴門辭」と題して収めてある。なほ『韻塞』の稿本ともいふべき許六自筆の癸酉紀行巻も、現に菊本直次郎氏に所藏さる。今本文は『韻塞』によつたが、項目の標題のみは一般に熟した「柴門辭」に従つた。

○千尋——千仞。左思
「振衣千仞岡、濯足
萬里流」（文選）
○葎の交——貧しき交
の意。

許六離別詞

去年の秋かりそめに面をあはせ、ことし五月の初深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其器、畫を好み、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。畫は何の爲好や、風雅の爲好といへり。風雅は何爲愛すや、畫の爲愛といへり。其まなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして用一なる事可感にや。畫はとつて予が師とし、風雅はをして予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇の如し。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿・西行のことのみ、かりそめに云ちらされしあだなるにはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ侍しとかや。さればこのことばを力として、其細き一筋をたどりうしなふる事なかれ。猶、古人の跡をもとめず、古人の求たる所をもとめよと、南山大師の筆の道ニも見へたり。風雅も又これに同じと

- 畫を好み——風俗文選「繪を好み」。許六自筆卷「畫を好み」。
- 何爲——許六自筆卷「風俗文選「何の爲」」。
- 君子は多能を恥——論語「子罕篇「吾少也賤、故多能鄙事」」。君子多乎哉、不也也」。
- 夏爐冬扇——王充、論衡「作無益之能、納無補之說」。猶「如以夏進、以冬寒、亦徒耳」。
- 釋阿——藤原俊成の法名。
- 後鳥羽上皇——後鳥羽院御口傳に「釋阿・西行を稱した御言葉が見える」。
- このことば——許六自筆卷「風俗文選「此御ことば」」。
- 力として——風俗文選「力とし」。
- うしなふる——同。
- 南山大師——弘法大師。南山は高野山のこと。その著性靈集

云て燈をかゝげて、柴門の外に送りてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末

風羅坊芭蕉述

に「書亦以擬古意」
爲「善」不「以似古」
迹爲「巧」

六三、送許六詞

『韻塞』（元祿九年刊）に前掲の「許六離別詞」につづけて、

おなじく五月六日の頃、旅だゝむと申つかはしけるにおどろき、例の次郎兵衛を使として、後の旅は我も木曾路を経て眞一文字に五老井と志す。彦城の諸子にはやく對面せむ事をつねぐにねがふ。かならず人に沙汰する事なかれと、こまやかに文して色紙短尺繪讃の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずとて、發句などいとねんどろにしたゝめ、かさねて詞書をそへて、むまのはなむけを寄られたり。

と言ひ、「其詞」と題して掲げてある。即ち許六が五月六日出立の事を報じたのに對し、芭蕉が次郎兵衛を使として與へた文である。なほ許六は文の終に

兩句一句に決定すべきよし申されけれども、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る。

と書添へて居る。「椎の花」と「うき人」との二句についての事である。

其詞

木曾路を経て舊里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人とは、後に笈をかけ草鞋に足をいたため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實をしる事をよるこべり。今仕官おほやけの爲には長劔を腰にはさみ、乗かけの後に鎧をもたせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは、風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅
うき人の旅にも習へ木曾の蠅

はせを
同

○椎の花の——許六自筆の巻にはこの句のみを記す。

○乗かけ——乘騶馬。

○其詞——許六自筆巻には「送行」と題す。

六四、弔初秋七日雨星

『芭蕉庵小文庫』（元禄九年刊）に「弔初秋七日雨星」と題して出づ。『泊船集』（元禄十一年刊）にもそのまゝ採録してある。なほ眞蹟（菊本直次郎氏藏）も現存し、文は『小文庫』と異同がない。元禄六年の作。『蓬萊島』にも收む。今本文は『小文庫』による。

吊初秋七日雨星

元祿六、文月七日之夜、風雲天にみち白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉楓をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし、今宵なを只に過ぎむも残おほしと、一燈かゝげ添る折ふし、遍昭・小町が哥を吟ずる人あり。是によつて此二首を採て、雨星の心をなぐさめむとす。

小町が哥

高水に星も旅寐や岩の上

遍昭が哥

七夕にかさねばうとし絹合羽

はせを

杉風

六五、閉關之説

『小文庫』（元祿九年刊）・『けふの昔』（元祿十二年刊）に、共に「閉關之説」と題して掲げである。詞章に異同はない。一二文字の小異はあるが、いづれも『小文庫』の方が正しいと認

○吊初秋七日雨星——この題は眞蹟にはない。

○残おほしと——泊船集にと字を脱す。

○遍昭・小町が歌——小町「岩の上に旅寐をすればいと寒し芭蕉の衣を我にかさん」

返し、遍昭「世をそむく芭蕉の衣はたゞひとへかさねばうとしいざ二人ねん」（後撰集）

○遍昭が哥——眞蹟「遍昭うた」

められる。又『風俗文選』（寶永三年）卷之四、説類の中にも「閉關ノ説」と題して収めてある。これまた僅かに一二の字句を異にする外全く同一である。今本文は『小文庫』によつた。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』等にも收む。

朝顔の句は元祿六年冬の序がある巴水の『薦獅子』に、「深川いづれの菴主とかや、此句を得て他にかたくあはずと旅僧の語り捨て通る」として、句主の名を記さずあげたのが初見である。而してその年代は從來元祿五年秋と推定されて居たのであるが、最近天野雨山氏はその編になる『水の音』（昭和十四年一月刊）に、「元祿癸酉の秋人に倦て閉關ス」と題したこの句の眞蹟を紹介して、元祿六年作であることの證據とした。即ち「五十年の頑夫」といつたのは大凡の年數でなく、正に五十歳の時であつたわけである。然るにその後杉浦正一郎氏は雑誌『東炎』（昭和十四年十月號）所載「俳文學雜藁」中に、『嵐雪十七回忌集』（假題、享保八年刊）の百里の自序「ばせを老人（中略）ある時深川の舊庵にしばらく禁足せられ、朝がほや晝は鎖おろす門の垣、明る年の桃の前書は、門に桃さくらあり、門人に其角嵐雪をもてり、（下略）」

を引き、芭蕉の桃櫻の吟は元祿六年五月の跋のある『桃の實』（元峰撰）に始めて見え、随つて禁足の年代はやはり元祿五年と見ねばならない點から、眞蹟の「元祿癸酉」といふ干支に疑を挿んだ。事實眞蹟にも干支を誤まる事があるので、この年代決定については、なほ今後の研究

を要する事と思ふ。しかし『嵐雪十七回忌集』がやゝ後年のもので、なほ確實性に缺くる所があり、元祿六年作とある事に他に重大な支吾も認められないから、今は姑く眞蹟に従つて元祿六年作としておく。

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置りといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、哀なるかたぐいもおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人の目もなる人なくば、いかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年、六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寐がちに朝をきしたるね覺の分別、なに事をかむさぼる。おろかなる者は思ふことおほし。煩惱増長して一藝するも

- 蔵りと——風俗文選「をく」と
- くらぶ山——同「くらぶの山」古今集「梅の花匂ふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける」
- 忍ぶの岡——忍ぶの浦の誤か。新古今「うちはへて苦しきものは人目のみ忍ぶの浦のあまのたぐい」徒然草「忍ぶの浦のあまのみる目も所せく」
- あまの子——新古今「白波のよするなぎさに世を過すあまの子なれば宿も定めず」
- むさぼり——風俗文選「むさぼり」
- 人生七十を——杜甫、曲江詩「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」
- はじめの老——四十歳。
- むさぼる——風俗文選「むさぼる」
- 勝る——風俗文選「勝る」
- 南華老仙——莊子。

のは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに當て、貪慾の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならむこそ老の樂とは云べけれ。人來れば無用の辨有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには。友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫自書、自禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣

はせを

六六、悼嵐蘭詞

其角の『末若葉』(元祿十年刊)に出で、文の終に

此悼の詞は翁存生に病心をなやまし、かく書つゞりけれどもとて、懷中し來給ひて、追善興行の事ども迄相談に及し時、予が机のはしに残されたる也。今年玉まつる夕べに、亡人の反故ども引きがしたれば、折ふし見あたりて侍るゆへに遺文感情をうごかし、ことさらに追善と思ひて此集に加へ侍る也。

- 釋敬——孫敬の誤。孫敬字は文寶、常に戸を閉ぢて讀書し、睡れば踵を首にかけ、之を梁上に吊して覺めるやうにしたといふ。(家求)
- 杜五郎——頼昌の人、門を出でざる事三十年に及んだといふ。(宋史)この故事長崎子の文「うなる松」に引けり、芭蕉はそれによりしか。
- 鎖む——風俗文選「鎖さむ」
- 貧を富り——同「貧を富り」
- 自書云々——同「自書みづから禁戒となす」

と附記してある。又支考の『笈日記』（元祿八年刊）にも「悼松倉嵐蘭」と題して掲げ、『風俗文選』卷之六、誄類にも「嵐蘭誄」と題して収めてある。三者殆ど異同はないが、『笈日記』と『風俗文選』とは全く同一で、『末若葉』には二三の小異がある。『末若葉』の方を初稿と見るべきであらう。今本文は『末若葉』所載のものと、『笈日記』所載のものと併せ掲げた。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にも収め、共に『風俗文選』によつて居る。嵐蘭は松倉氏、又五郎と稱す。肥前島原の城主松倉家に仕へたが、島原の亂に主家退轉して浪人となり、江戸に出て住んだ。元祿六年鎌倉に仲秋の月を賞して歸るさに病を得、同年八月廿七日歿した。享年四十七。文は當時の作である。

(11)

悼嵐蘭詞

金革をしきねにしてあへてたゆまざるは士の志也。文質片ならざるをもて、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は義を骨にし、實を膈にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予、因む事十とせ餘九とせにや。此三とせばかり宜を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ、稚子をほだ

○金革を——中庸「往金革死而不」
 ○文質片ならざる——
 「質勝文則野、文質彬彬、然後君子」

しとしていまだ世波を出す。されども榮辱の境に居らず。日／＼風雲に座して、ことし仲秋中の三日、由井、金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を引。そのかへるさより心ちなやましうして終息たえぬ。廿七日の夜の事にや。七十年の母に先立、七才の子に思をのこす。いまだをしむべきやはひの五十年にたらず。おほやけのためには腹押切ても悔まじき器の、はかなき秋風に吹しほれて、草のたもとのかに露けくも口惜うもあるべきと、今は時の心さへしられて悲しきに、母の恨みはらからの歎、したしきかぎりは傳へ聞て、ひとへに親屬の別れに同じ。ことし、む月の末ばかりに稚子を手を取、予が草庵に來りて、かれに號得さすべきよしを乞フ。かの王戎五才の眼ざしうるはしければ、戎の一字を欠て嵐戎と名づく。その悦べる色、今日のあたりをさらず。生ける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はと、しのげるゝ習ひ、増て父のごとく、子のごとく、手の如く、足の如く、年比なれむつびたる俤の、愁の袂にむすばれ、枕もつきぬべき計也。筆を取ておもひを述んとすれば才つたなく、いはむとすれば胸ふさがりて、只おしまづきにかゝりて、ゆふべの雲にむかふのみ。

秋風に折てかなしき桑の杖

芭蕉

○ことし——元禄六年。

○王戎——晋書、王戎傳「戎服爛々如麤下電」

○なくてぞ——源氏物語奥入「ある時はありのすきみに情かりきなくてぞ人は戀しかりける」

○夕の雲に——杜濱、春日懷李白「清北春天樹、江東日暮雲」この詩句により暮雲は友を懷ふ情に託していふ。

初七墓にまふでゝ

みしやその七日は墓のみかの月

同

長月三日なりければ也

(末若葉)

(二)

悼松倉嵐蘭

金革を衽にして、あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて、君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして、實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事、十とせあまり九とせにや、この三とせ計官を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に座して、今年仲秋中の三日、由井・金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳、其歸るさより、心地なやましうして、終にいきたへぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先立、七歳の稚におもひを残す。いまだおしむべき齡の五十年にだにたらず、公の爲には腹をし切ても悔まじきうつはものゝ、はかなき秋風に吹しほれたる草のたもと、いかに露けくも

○仲秋中の三日——風俗文選「仲の秋の三日」

○稚に——風俗文選「稚子に」

口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに、母の恨はらからのなげき、したしきかぎりには聞傳へて、偏に親ぞくの別にひとし。過つる睦月計に、稚子が手をとりにて予が草庵に來たり、かれに號得さすべきよしを乞。王戎五歳の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘て嵐戎と名付。其よろこべる色、今日のあたりをさらさず。いける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はとしのぼるゝ習、まして父のごとく、子のごとく、手のごとく、足のごとく、年比云なれむかひたる佛の、愁の袂にむすぼゝれて、枕もつきぬべきばかり也。筆をとりにておもひをのべんとすれば才つたなく、いはむとすれば胸ふさがりて、たゞをしまづきにかゝりて、夕の空にむかふのみ。

秋風に折て悲しき桑の杖

はせを

九月三日詣墓

みしやその七日は墓の三日の月

(笈日記)

六七、東順傳

○母の恨——風俗文選「老母の恨」

○ふきがりにて——風俗文選「ふたがりて」
○夕の空——同「夕の雲」

○秋風に——風俗文選にはこの一句だけ録す。

其角の『句兄弟』(元祿七年刊)及び『俳諧錦繡綴』(元祿十年刊)に出づ。東順は其角の父で、元祿六年八月廿八日、享年七十二歳で歿した。當時の追悼文である。東順の病中終焉の有様等については、其角の『萩の露』(元祿六年刊)に詳しく記されてある。この文はなほ『風俗文選』(寶永三年刊)卷之八、傳類の中にも收め、『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』等にも録す。今本文は『句兄弟』による。

東順傳

芭蕉稿

老人東順は榎氏にして、その祖父江劔堅田の農士竹氏と稱ス。榎氏といふものは、晋子が母かたによるものならし。ことし七十歳ふたとせの秋の月を病る枕のうへに詠めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひ、限りの床のほとりまで神みだれず。終にさらしなの句をかたみとして、大乘妙典のうてなに隠る。若かりし時醫を學んで常の産とし、本多何某のかうより俸錢を得て、釜魚カマイサカナ觀塵の愁すくなし。されども世路をいとひて、名聞の衣をやふり、杖を折て業を捨つ。既に六十年のはじめなり。市店を山居にかへて、樂むところ筆をはなたず。机をさらぬ事十とせあまり、其筆のすさみ車にこぼるゝがごとし。

○榎氏——榎本氏。
○竹氏——竹下氏。

○さらしなの句——東順の句「子と娘とたがかへて見んけふの月」
○本多——本多下野守。
○何某のかう——風俗文選「何某の会」

湖上に生れて東野に終りをとる。是必大隱朝市の人なるべし。

入月の跡は机の四隅哉

六八、素堂菊園之遊

『續猿蓑』(元祿十一年刊)に出づ。元祿六年十月九日、素堂亭の菊園の遊びを敘べたもので、芭蕉のこの句以下其角・桃隣等その遊びに加はつた人々の句が掲げられてあり、文はそれらの作全部にかかるべきものである。『青ひさご』(文化八年刊)に載せた芭蕉眞蹟の寫しも、『續猿蓑』と全く同文である。

元祿辛酉之初冬九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る夏は、その比は花いまだめぐみもやらず、菊花ひらく時則重陽といへるころにより、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、なを秋菊を詠じて、人々をすゝめられける夏になりぬ。

菊の香や庭に切たる履の底

○辛酉——癸酉の誤。
○その比——九月九日の頃。

○菊花ひらく時——蘇東坡の詩句「菊花開時則重陽」
○展重陽——宮中菊花の宴を國忌などの爲十月に延ばして秋菊の宴の時に行ふ例をいふ。

六九、澁笠銘

『和漢文操』（享保十二年刊）卷之七、銘類に「澁笠銘并序」として出て居る。その序に「此銘は諸集に出てこゝかしこのたがひめあり。さるは元祿甲戌の夏伊賀の西麓庵にいまして、文稿十二篇の再校ありしが、此銘もその一篇也」とあるので、同書に掲げたものは元祿七年夏の成稿である事が知られる。なほ文は曾良の遺稿『雪丸げ』にも出で、これは元祿二年頃に成つたものかと思はれる。尤も句は夙く『虚栗』に出て居るので、もし文も同時の作だとすれば、その初稿は天和年間まで溯るわけであるが、恐らく文は後に添へたものであらう。『和漢文操』には「此銘は諸集に出て」とあるが、『雪丸げ』の外には今所見がない。岱阿・松宇の共撰『思亭』（寶曆六年刊）にも「笠はり」と題して収めてあるが、それは『雪丸げ』所載のものと殆ど異同がない。たゞし梓行の年代からいへば、『雪丸げ』よりもこの方が先である。今本文は『和漢文操』と『雪丸げ』とにより、兩者並べ掲げる事にした。なほ『蓬萊島』には「澁笠銘」と題し、『芭蕉翁文集』には「笠張の説」と題して収め、いづれも『和漢文操』によつて居る。

(一)

笠笠ノ銘 井序

芭蕉翁

草の扉にひとりわびて、秋風さびしきおり／＼、竹取のたくみにならひ、妙観がかたなをかりて、みづから竹をわり竹をけづりて、笠つくりの翁となる。心しづかならざれば、目をふるに物づく、巧つたなければ、夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね、ゆふべにほして、又かさね／＼澁といふ物をもて色をさはし、ます／＼堅からん事をおもふ。廿日すぐる程にこそやゝいできにけれ。其かたちうらの方にまき入、外さまに吹かへりなど、荷葉の半ひらくるに似て、中／＼おかしき姿也。さらばすみがねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。西行法師のふじ見笠か、東坡居士の雪見笠か、宮城野の露に供つねば、吳天の雪に杖をやひかむ。霰にさそひ時雨にかたむけ、そごろにめでゝ殊に興ず。盟のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりのやどりに袂をうるほして、みづから笠のうらに書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

(和漢文操)

○妙観がかたな——徒然草「よき細工は少し鈍き刀を使ふといふ。妙観が刀はいたぐ立勝たず」妙観は鎌倉の觀音の像を刻んだ僧

○東坡居士の——蘇東坡の畫に竹笠を冠り驢馬に騎つた姿が多い

○宮城野の——古今集「みさぶらひみかさ」と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

○吳天の雪——詩人王屑「笠重吳天雪」

○宗祇の時雨——宗祇の名高い句「世にふるはさらに時雨のやどりかな」

(二)

草の扉に待わびて、秋風のさびしき折く、妙觀が刀を借、竹取の巧を得て、竹をさき竹を狂て自笠作の翁と名乗る。巧拙ければ日を盡して不成、こゝろ安からざれば日を分るに懶し。朝に帟をもて張、夕部にほして又張る。澁と云物にて色を染いさゝかうるしをほどこして堅からん事を要す。廿日過る程にこそやゝいできにけれ。笠の端の斜に裏に巻入、外に吹返して、ひとへに荷葉の半開るに似たり。規矩の正しきより、中くおかしき姿也。彼西行の侘笠か、坡翁雪天の笠か。いでや宮城野々露見にゆかん、吳天の雪に杖を挽ん。霰にいそぎ時雨を待て、そゝろにめでゝ殊に興ず。興中俄に盛る度あり、ふたゝび宗祇の時雨にぬれて自ら筆をとりて笠のうちに書付侍りけらし。

世にふるも更に宗祇のやどり哉

桃青書(雪丸び)

七〇、白 髪 吟

○狂て——狂ての誤。

○分るに——ふるにの誤刻であらう。

○中く——思亭「中く」

○披翁——蘇東坡

○興中云々——思亭に「興中にして俄に感る事有ふたたび宗祇のしぐれに杖をうるほし、みづから笠のうちに書付侍りけらし」

『和漢文操』(享保十二年刊)卷之二、歌類に收む。支考の評に

故翁嘗テ官ヲ辭シ玉ヒ、故郷ヲ隔ル事廿餘年ニシテ、或ル年此懷舊アリ。去ルハ天和ノ始トゾ。其後伊賀ノ西麓菴ニテ例ノ文稿ヲ改ルトテ、今思フニ白髮ノ魂祭ハ其日ノ感情ハ演タレド、發句ハ祭ル姿ニ非ラズ。此故ニ參ノ字ヲ以テ歩行ノ様ヲ形容セシニ、當季ノ詞モ慥ナラズ、増テ切字ノ入レ所ナシ。此等ヤ有様體ト云テ、^{アルヤ}まいる心のかどみながらにト、下ノ句ヲ云ヒ次ギテ、俳諧ノ歌モ然ベキヤト云ヘルニ、實モ前書ノ咏嘆ヨリ墓參ノ哀傷ヲ評セバ、玉屑ニ云ヘル蚩蚩ノ悲ミ有テ、吟ノ一字ヲ題センニハト、漢字ニ杜陵ガ三字ヲ假リテ、白髮ノ吟トハ題セシナリ。

とある。この墓參の句は、『續猿蓑』に

甲戌の夏大津に待しをこのかみのもとより消息せられければ舊里に歸りて盆會をいと
なむとて

家はみな杖にしら髪の墓參

とあつて、元祿七年の作である。然るに文は『野ざらし紀行』の「手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜」の條の本文と大同小異のもので、貞享元年の作である。評に「去ルハ天和ノ始トゾ」と言つたのは、即ちこの折をさすのであらう。支考の言を信ずれば、『野ざらし紀行』の舊稿に

推敲を加へて、元祿七年の秋墓参の句に添へたものと見ねばならぬ。とにかく文は元祿七年の再稿と見なしておく。『蓬萊島』には収めてあるが、『芭蕉翁文集』には採つてない。

白髮ノ吟並序

芭蕉翁

便も文月の玉まつる比、武陵より古里に歸るに、廿とせの月日も夢なれや。

北堂の萱艸も霜がれて、今はその佛だになかりしが、何事もむかしに立かはりて、はらからの鬢しろく眉しはみて、つれなき命ありとのみ、いひ出る言ノ葉もなきに、このかみの守袋をほどきて、母の白髮おがめよ。浦嶋が子の玉手箱に、汝が眉もやゝ老ひたりと、年月のおこたりはかたみに泣つゝ、

一家みな杖にしら髪の墓まいり

まいるこゝろのかたみながらに

七一、煤掃之説

『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に「煤掃之説」と題して収め、なほ芭蕉の煤掃の吟を發句と

○便も——文の序詞の如く用ふ。

○北堂の萱草——詩經「焉得萱草言樹之背也」註に背は北堂也とある。こゝは母が日に亡い事をいふ。○このかみ——兄。

して、山店・史邦・嵐竹・養浩四吟の脇起歌仙をつゞけて居る。然るに成美は『隨齋諧話』の中で、『小文庫』に「石臼之讃」を載せた杜撰を論じたついでに、

次でおもふに、小文庫に載し煤掃の説といふものも、ひそかにおもふにばせをの筆力ならぬやう也。これらも支考が手に出たるを、史邦漫に書加へたるものもするべからず。文中つたなき語どもゝ交れり。殊に結句に、ほどなく暮て高軒とはなりぬと書て、その發句、暮ゆく宿の高軒とあり、これら決てばせをの造意にはあらぬ也。先達の此文章の事なにとも違論なきを、かくまで臆説をなす事はゞかりあるに似たれど、しばらく思ふ所をしるして識者の評をまつ。

と論じて居る。一理ある見方ではあるが、つたなき語が交るといひ、發句の言葉と重複するといふのも、要するに全く主觀的な理由にすぎない。のみならずそれらは推敲が不十分であつたからともいへる。單にその内容から見れば、むしろ芭蕉俳諧の境地に即する所が多い。成美の説に直には左袒し難いのである。句は『小文庫』以前に所見がないので、年代を推定すべき手がかりがない。大體元祿年中の作であらう。『蓬萊島』・『芭蕉翁文集』にはそのまゝ收めてあるが、『一葉集』は成美の説に従つたのか、眞偽不審の部に入れてある。

明ぼのゝ空より物のはた／＼ときこゆるは、疊をたゞく音なるべし。けふは師走の十三日、煤はきのことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は嘉例ある事にして、唯なみ／＼の人のすゝはく體こそいと面白けれ。をの／＼門さしこめて、奥のひと間を屏風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、唄が帷子の上張、爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく晝になりゆき、庭の隅、調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるぞめには立なれ。家の童の様のやぶれすのこの下を覗きまはるは、なにをひろふにやとあやし。味噌とよばる大男の袋かぶり、褰きたるもめづらかに、米櫃のサンうちつけ、俎しらげ行燈はりかえて、たつくり鮓、あさづけのかほり花やかに、かみしもの膳すえならべたるに、ほどなく暮て高いびきとはなりぬ

すゝはきや暮ゆく宿の高軒

はせを

七二、西行像讃

○雲井——宮中。

○様——縁。

○味噌——幕所に立廻く下男をいふ。
○たつくり——ごまめ。

『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に「西行像讃」と題して出で、又『風俗文選』（寶永三年刊）卷之十、讚贊類にも「西行上人ノ像讃」と題して収めてある。元祿年中の作であらう。『蓬萊島』にも収む。今本文は『小文庫』による。

すてはてゝ身はなき物とおもへども、

ゆきのふる日は

はせを

さむくこそあれ。花の降日はうかれこそすれ。

○すてはてて——「ゆきのふる日はさむくこそあれ」までは西行の歌、それに一句を添へて讀としたのである。
○さむく——風俗文選「さぶく」

七三、一枝軒

鳥酔の『夏爐一路』（寶曆八年刊）に出で、鳥酔が大和竹内村で寓目した眞蹟によつたものである。

一、祖翁眞蹟 竹内村明石隨庵所持。隨庵は玄隨が孫也。

と附記してあり、傳來正しいものとして信ずる事が出来る。句は青流の『住吉物語』（元祿八年刊）に左の如く見える。

竹内一枝軒にて

世にゝほへ梅花一枝のみそさゝい

芭蕉は竹内には時を異にして數回遊んで居るらしく、随つて年代はいつと定め難い。

良醫玄隨子は三度肱を折て家を醫し國を醫す。其居を名付て一枝軒といふは、是彼桂林の一枝の花にもあらず、微笑一枝の花にも寄らず、南花眞人の所謂一巢一枝の樂み、偃鼠腹を扣て無何有郷に遊び、愚盲の邪熱をさまし、僻習小見の病を治せん事を願ふならん。

世に匂へ梅花一枝のみそさゝい

蕉散人桃青 在印

七四、机 銘

『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に「机銘」と題して出で、『風俗文選』（寶永三年刊）卷之六、銘類にも收められてある。文に異同はない。元祿年中の作。蘭子といふのが松倉嵐蘭をさすも

○三度肱を折て——說苑三折肱而成良醫。經驗をつんで良醫となるをいふ。
 ○桂林一枝——桂林の一枝、崑山の片玉は士林中の第一の意。
 ○微笑一枝——拍華微笑の故事。
 ○南花眞人——莊子をいふ。
 ○一巢一枝——莊子、逍遙遊「鵲巢於深林、不遑一枝」、偃鼠飲河不遑腹滿」

のとすれば、嵐蘭は元禄六年八月に歿したので、それより以前の作といふ事になる。今本文は『小文庫』により、『風俗文選』の振假名を参酌して二三假名を附した。『蓬萊島』にも收む。

閑なる時はひぢをかけて、嗒焉吹嘘の氣をやしなふ。しづかなるときは書を紐どゐて、聖意賢才の精神をさぐり、靜なるときは筆をとりて、義素の方寸に入。たくみなすおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸、面二尺、兩脚にあめつちのふたつの封（けいり）を彫（う）にして、潛龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせむや。

應蘭子求 元祿仲冬

芭蕉書

七五、座右銘

『芭蕉庵小文庫』（元禄九年）に「座右之銘」と題して出づ。『風俗文選』（寶永三年刊）卷之六、銘類にも收め、句の前に「銘に云ク」とある。又『和漢文操』（享保十二年刊）には卷之三、聯類に「關口ノ聯」と題して句のみを收め、評に

○嗒焉——莊子、齊物論「南郭子綦隱几而坐、仰天而噓、嗒焉似喪其耦」。嗒焉は打寛ぐさま。吹嘘は息を吐くこと。
○蓬萊——王羲之・懷素。共に名高い書家。
○潛龍、牝馬の貞——易經にある語。龍が潛んで時を待ち、牝馬が柔順に地を行く如きをいふ。
○應蘭子云々——以下風俗文選にはない。

此發句のはじめは唐帝の三半なる物に書て、芭蕉庵の柱かくしなるを、洛の去來子が物數奇より落柿舎の聯となせるよし。祖翁の一行物といひて、其類は世にまれなるべし。

と言つてある。句は芭蕉生前の集に見えないので、年代を推定し難いが、とにかく元祿年中の作であらう。なほ眞蹟に「ものいはでたゞ花を見る友も哉と、何某鶴龜が云けむ、我草庵の坐右に書付ける事をおもひ出て」と詞書したのもある。『蓬萊島』にも收む。今本文は『小文庫』による。

人の短をいふ事なかれ。
己が長をとく事なかれ。

物いへば唇寒し鵝の風

芭蕉翁

七六、塔山餞別辭

杏廬撰の『續寒菊』（安永九年）に收めてある。句は他に所見なく、又『續寒菊』も後世のものであるから、疑へば疑ふ餘地は存する。しかしその内容から見て、信じてよいものと思ふ。

なほ屋島撰『枯野集』(文政二年刊)にも、伊豫大洲藩浮舟藏の眞蹟として掲げてあり、その内容は全く同一である。

塔山は大垣の人で、芭蕉が貞享元年野ざらし紀行の途次大垣に立寄つた時、「師の櫻むかし拾はん落葉哉」と吟じて、芭蕉の「薄を霜の髭四十一」の脇を得、以下木因・如行等と四吟の歌仙を興行した。又『雪丸げ』・『雪の薄』等によれば、元禄二年二月折柄江戸にあつた塔山の旅店で、芭蕉・曾良・塔山・此筋の四人で、芭蕉の「かげるふのわが肩に立つかみこ哉」を發句とした歌仙を催して居る。たゞしこの文は「秋の名残云々」とあるので、勿論この時の事では有り得ない。年代不明とする外はない。今本文は『續寒菊』による。

塔山産業の爲に江府に居る事三月、予はかれが朝寐をおどろかせば、かれは予が宵寐をたゞきて方寸をくみしり、寐食をともにしたる人に似たり。けふや故郷へ歸るを見おくらんと、杖を曳てよろほひ出たるに、秋の名残もともにおしまれて、

むさし野やさはるものなき君が笠

はぜを

○塔山——塔山の誤。

七七、杵折讃

『芭蕉句選拾遺』(寶曆六年刊)附録に「杵折賛」と題し、「大津に眞蹟所持の人有を文意寫譲りて井筒屋に傳ふ」と附記して收む。句は淡齋撰『其木がらし』(元祿十四年刊)に、惟然の反古から見出した故翁の作としてあげ、「又花生に題せらるゝ文あり、ことしけてわすれ侍る、そのほく 此槌はむかし椿か梅の木か」と出て居る。年代未詳。『芭蕉翁文集』にも收む。

此杵の折と名付るものは、上ツがたにめでさせたまひ、目出度扶桑の奇物となれり。汝いづれの山より生出て、何國の里の賤が碯のかたみ成ぞや。むかしは横槌たり。今は花入と呼て、貴人頭上の具に名を改といへり。人またかくのごとし。高に居て驕るべからず、ひきゝに有てうらむべからず。唯世の中は横槌なるべし。

此槌のむかし椿か梅の木か

はせを

○杵の折——横槌は手杵を半分に折つた形だから名づけたのであらう。

七八、阿彌陀坊

『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に出で、なほ『鹿島詣』（文化十年刊）に眞蹟を摹刻してある。又菊本直次郎氏藏の眞蹟もある。年代未詳。『芭蕉翁發句集』には元祿四年の部に掲げであるが、所據が明かでない。本文は『小文庫』と眞蹟と異同があるので、兩者併せ掲げる。

(一)

柴のいほときけばいやしき名なれども

よにこのもしきものにぞ有ける

このうたは東山に住ける僧をたづねて、西行上人のよませ給ふよし山家集にのせられたり。いかなるあるじにやとこのもしくて、ある草庵の坊につかはしける。

しばのとの月やそのまゝあみだ坊

はせを

（菊本氏藏眞蹟）

(11)

柴の庵ときけばいやしき名なれども

よにこのもしき物にぞ有ける

此うたは東山に住ける僧を尋て、西行のよませ給ふよし山家集にのせられたり。いかなる住居にやと、先その坊なつかしければ、

柴の戸の月や其まゝあみだ坊

芭蕉

(小文庫)

七九、色と義

許六の『篇突』(元禄十一年刊)所載「飲食色欲箴」の中に「吾翁色と義の道をしめし給へる詞ニ云」としてあげてある。然るに耳得の『芙蓉文集』(寶暦十三年刊)には「唐がらし」と題し、

義を守る事唐がらしにならへ

色をおもふ事うどんのごとくせよ

はせを

去來

とあつて、芭蕉と去來との合作の如くになつて居る。しかし「飲食色欲箴」は『風俗文選』卷之六、箴類にも收められ、その中には同じく「吾翁色と義の道をしめし給へる詞に云」として、色をおもふ事はうどんを見るがごとく、

義を守るものは唐がらしの辛に類せよと。

とあり、許六が全く誤を傳へるものとも思はれない。『一葉集』は『芙蓉文集』に従つて居る。とにかく芭蕉の斷片語として收める。年代不詳。なほ『芙蓉文集』には左の如き註がある。

註曰、溫飽はしゐて不愛不嫌、數日經る時は好朝夕不足愛。辛子其味淺深なし、青熟によらず、皮實花葉不辛といふ所なし。誠に辛き事の實何ものかしかん。

色をおもふ事はうどんを見るがごとく、

義を守るものは唐がらしの辛に類せよ

といへり。

八〇、三聖圖讚

秋屋の『花はさくら』（寛政十三年刊）に載せ、許六筆の宗祇・宗鑑・守武の像を摹寫したも

のと共に掲げてある。又『枇杷園隨筆』(文化七年刊)にも「卓池夜話」として文を掲げ、内容には全く異同がない。なほ尾張の祖月撰『皺箱物語』(元祿九年刊)には、星崎の醫起倒子の許で盤齋の自畫像に「團扇もてあふがむ人のうしろつき」と書いて贈つた事を述べた條に、「又貞徳・宗鑑・守武の畫像に東藤子讀を乞けるに、何を季になにを題にむつかしの讀やとあみたまひ、やがて書てたびけり、その句其こと葉書」として

三翁は風雅の天工をうけ得て心匠を萬歳につたふ此かげに遊ばんもの誰か俳言をあふがざらんや

月華の是やまことのあるじ達

芭蕉翁

と出て居る。これが盤齋自畫像讀と同時の事とすれば、貞享二年の作と推定されるが、『花はさくら』所載のものは畫も文も全く異つて居り、後に句だけを流用したものとする外はない。畫が許六の筆であるといへば、元祿年中の作と推定される。

夫風流に心をとめて、其四季にともなふもの、濱の眞砂の盡せぬ詠ならめ。
其情を述て其ものをあはれむ人は、ことの葉の聖也。されば文明のころ、其道さかなりし聖たちの言葉、今の掟となりて其實なる事、今の人のすさむ

○文明のころ——將軍
足利義政・義尚の時
代・宗祇・宗鑑等が
出た頃

事かたかるべし。されども風雅の流行は、天地とともにうつりて、只つきぬを尊ぶべき也。さればかの宗祇・宗鑑・守武の壽像を求めて、此道の好士許六の筆勢をかり、我拙き一句をつとりて、道のたゞ萬古にさかんならんことをいのる而已

芭蕉拜

月花のこれや實のあるじ達

八一、贈風絃子號

耳得の『芙蓉文集』（寶曆十三年刊）に出づ。なほ連々の『誹諧白雄夜話』（天保四年刊）にも一、風絃と名を附給ひし文

風絃 風絃は琴にあらず、瑟にあらず、よく宮商角徵羽の音にかよふ。元祿七年の秋芭蕉とあり。せちに風流成事ども也。

風絃伊勢の人也。いづれの集にも其句見あたらず。枯尾花追善の句あり。

と見えて居る。共に出典としてなほ確實性に乏しいが、さりとて偽作の疑もない。『白雄夜話』に従ひ姑く元祿七年の作とする。この文桃鏡の『芭蕉翁文集』に収めたのが初見であらう。

贈風絃子號

芭蕉老人

風絃は琴にあらず、瑟にあらず、彈に爪をもちひず、柱をたてず、天籟の體をよく調へて、角徵宮商の音におちず。

八二、詞書類

(二)

あるひとのかくれがをたづね侍るに、あるじは寺に詣でけるよしにて、とし老たるおのこ獨庵をまもりあける。かきほに梅さかりなりければ、これなむあるじがほなりといひけるを、かのおのこよそのかきほにてさぶらふと云をきゝて、

るすにきて梅さへよそのかきほかな

(棄集・眞蹟)

(二)

ひとゝせみやこの空にたび寢せしころ、みちにて行脚の僧にしる人になり侍

〇(一)——貞享三年の作と推定される。「通櫛参照」

〇かきほ——垣種。

〇(二)——貞享三、四年の作。

るに、このはるみちのおく見にゆくとて、わが草庵をとひければ、

またもとへやぶの中なる梅花

(葉集・眞蹟)

(三)

伊賀山家にうにといふ物有。土の底より堀出て薪とす。石にもあらず、木にもあらず、黒色にしてあしき香有。そのかみ高梨野也これを考て曰、本草に石炭といふ物あり、いかに申傳へて此國にのみ焼ならはしけん、いとめづらし。

香に匂へうにほる岡の梅の花

(芭蕉翁發句集)

(四)

神垣のうちに梅一木もみえず。いかなる故にかと人に尋侍れば、唯ゆへはなくてむかしより一木もなし。おこらごの館の後に一もと有といふヲ、

梅稀に一もとゆかし子良の館

(眞蹟)

(五)

春興

春の雨いと靜に降て、やがて晴たる頃、近きあたりなる柳見に行けるに、春

〇(三)——貞享五年作と推定。竹人の『芭蕉翁全傳』所載と文は大同小異である。眞蹟などによつたものか。

〇うに——泥炭。高梨野也。梅盛に學んで俳諧をよくす。

〇(四)——『發の小文』所出のものゝ文も句も異なる。初稿の形である。貞享五年の作。

光きよらかなる中にもしたよりいまだおやみなければ、

八九間空で雨ふるやなぎかな

(花はさくら)

(六)

あすは檜の木とかや、谷の老木のいへる事あり。きのふは夢と過て、あすはいまだ来らず、たと生前一櫛のたのしみの外に、あすはくといひくらして、終に賢者のそしりをうけぬ。

さびしさや華のあたりのあすならふ

(笈日記)

(七)

うへのゝ花見にまかり侍しに、人く幕打さはぎ、ものゝ音小うたの聲、さまくなり^(八)にけるかたはらの松かげをたのみて、

四つこきのそろはぬ花見心哉

(炭俵)

(八)

きしの山吹とよみけむ、よしのゝ川かみこそみなやまぶきなれ。しかも一重に咲こぼれて、あはれにみえ侍るぞ、櫻にもをさくをとるまじきや。

ほろく^(九)と山吹ちるかたきのおと

はせを

〇(六)——貞享五年の作。

〇さびしさや——笈の
小文には「日は花に
暮てさびしやあすな
らふ」

〇(七)——元禄七年作。
うへの——上野。

〇(八)——蘭更の『落葉集』にも載す。貞享五年芳野紀行中の作。

〇きしの山吹——貞之「吉野川岸の山吹ふく風に影さへうつろひにけり」

(九)

石河北鯉生おとうと山店子、我つれなくさめんとて、芹の飯煮させてふりはへて来る。金泥坊底の芹にやあらむと、其世の他も今さらに覺ゆ。

我ためか鶴はみのこす芹の飯

(續深川)

(一〇)

須加川の驛より二里ばかりに石河の瀧といふ有よし、行てみんな事を思ひ催し侍れど、このごろの雨にみかさはりて、河を渡る事かなはずといひてやみければ、

五月雨は瀧降うづむみかさ哉

(信夫摺)

(一一)

卯月の中比須磨の浦一見す。うしろの山は青ばにうるはしく、月はいまだおぼろにて、はるの名残もあはれながら、たゞ此浦のまことは秋をむねとするにや、心にものゝたらぬけしきあれば、

夏はあれど留主のやう也須磨の月

はせを

(眞蹟)

○(九)——天和頃の作。

○ふりはへて——わざ

○金泥坊底——金は青の誤。杜甫、東山草堂中「鰲刺白鵝谷口鰲」。飯煮青泥坊底。青泥は長安の驛名、坊は堤。

○(一〇)——句は「鰲丸げ」にも出づ。元祿二年の作。

○(一一)——芭蕉翁眞蹟集に京都久保田氏柏子所持として眞蹟を摹刻してある。貞享五年の作。

(芭蕉翁眞蹟集)

(一一)

畫 讀

かさ着て馬に乗たる坊主は、いづれの境より出て何をむさぼりありくにや。

このぬしのいへる、是は予が旅のすがたを寫せりとかや。さればこそ三界流浪のもゝ尻、おちてあやまちすることなかれ。

馬ぼくく我をゑに見る夏野哉

芭蕉翁

(水の友)

(一三)

陸奥にくだらむとして、下野國まで旅立けるに、那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを尋て、深き野を分入る程に、道もまがふばかり草ふかければ、

秣負ふ人を枝折の夏野哉

(陸奥千鳥)

(一四)

みちのくの名所く心におもひこめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふるみちにかゝりて、いまのしら河も越えぬ。頼ていはせの郡にいたりて、乍單

○(一一)——句は天和三年甲斐に流寓中の作と思はれるが、讀は後年の作か。

○夏野哉——水の友に——此句泊船集に冬野哉とあやまれるゆへこゝにしるす」と註してある。

○(一三)——元禄二年作。奥の細道参照。

○(一四)——元禄二年作。奥の細道参照。

齋等躬子の芳扉を扣、彼陽關を出て故人に逢なるべし。

風流のはじめや奥の田植哥

(二五)

西行櫻

象潟の櫻はなみに埋れてはなの上こぐ蟹のつり船

西行法師

花の上漕とよみ給ひけむ古き櫻も、いまだ蛸満寺のしりへに残りて、陰波を浸せる夕晴いと涼しかりければ、

ゆふばれや櫻に涼む波の花

(二六)

(繼尾集)

貞享五年夏日

名にしあへる鶺鴒といふものを見侍らむとて、暮かけていざなひ申されしに、人々稻葉山の木かげに席をまうけ、盃をあけて、

又やたぐひ長良の川の鮎なます

(二七)

(笈日記)

○(二五)——元禄二年
作。奥の細道参照。
元文三年刊ぬまの書
には「夕方雨やみで江
處の何がし舟にて江
の中を案内せらるゝ」と
あり。

○あへる——おへるの
誤。

○(二七)——以下一九

高久角左衛門に宿る。みちのく一見の桑門同行二人、那須の篠原を尋て、猶殺生石見んとこへける程に、雨降ければ先このところに留て、

落くるやたかくの宿のほととぎす

(雪丸げ)

(二八)

桑門可伸は栗の木のもとに庵をむすべり。傳へ聞行基菩薩の古は西に縁有木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのものし。

かくれ家や目だゝぬ花を軒の栗

(伊達衣)

(二九)

あふみや玉芝亭にして、納涼の佳興に瓜をもてなして、發句をこふて曰、句なきものは喰事あたはじと戯ければ、

初眞桑四にや斷ン輪に切ン

初瓜やかふりとしをおもひ出ツ

三人の中に翁や初眞桑

興にめでゝこゝろもとなし瓜の味

はせを

ソ良

不玉

玉志

まで元禄二年作。奥の細道参照。も、よ草所載の眞蹟には「みちのく一見の桑門同行二人那須の篠原をたづねて、猶殺生石みむと急ぎ待る程に、あめ降出ければ先此ところにとまり候」とある。なほ雪の薄(安永六年刊)・かんこ鹿(天明和九年刊)にも詞書がある。

〇(二九)——柴吹風に
出羽酒田本間氏の題
として掲げてある。

〇かふり——「かぶり
し」の誤か。

元祿二年晩夏末

(二〇)

五月雨の雨風しきりにおちて、大井川水出待りけるにとゞめられて、しまだに逗留す。如舟・如竹などいふ人のもとにあそびて、

ちさはまだ青葉ながらになすび汁

(笈日記)

(二一)

關の住素牛何がし、大垣の旅店を訪はれ侍りしに、彼ふちしろみさかといひけん、花は宗祇のむかしに匂ひて、

藤の實は俳諧にせん花の跡

(藤の實)

(二二)

むさし野は櫻のうちにうかれ出て、武隈はあやめふく比になりぬ。かの松みせ申せ遅櫻と云けむ舉白何がしの名残も、思ひ出てなつかしきまゝに、

散うせぬ松や二木を三月ごし

(四季千句)

(二三)

本間主馬が宅に骸骨どもの、笛鼓をかまへて能する處を畫て、舞臺の壁にか

○(二〇)——元祿七年作。芭蕉翁眞蹟集にも出で小異あり。菊本氏藏眞蹟もほど同文。

○(二一)——年代不詳。○關——美濃國。

○素牛——惟然の前號。

○宗祇のむかし——宗祇の吟に「關こえてこゝも藤代みさか哉」

○(二二)——元祿二年作。

○散うせぬ——奥の細道には「櫻より松は二木を三月越シ」
○(二三)——元祿七年作。

けたり。まことに生前のたはぶれ、などかこのあそびに殊らんや。かの髑髏を枕として、終に夢うつゝをわかたざるも、只この生前をしめさるゝものなり。

稻づまやかほのところが薄の穂

(二四)

旅愁なくさめかねて、ものうき秋もやゝいたりぬれば、流石目に見えぬ風の音づれもいとどしくなるに、残暑猶やまざりければ、

あか／＼と日は難面も秋の風

(雪丸げ)

○

目にはさやかに見えねどもといひけん秋立つ氣色、すゝき荊かやの葉末に動きて、聊昨日にかはる空のながめ哀れなりければ、

(芭蕉句選年考)

(二五)

淺水のはしを渡る時、俗あさうつづといふ。清少納言の橋はと有一條、あさむつのとかける所也。

あさむつや月見の旅の明あやばなれ

(其袋)

○本間主馬——大津の能太夫。
○殊らん——ことならん。

○(二四)——元禄二年作。奥の細道参照。

○目には——句選年考に下野國馬門村長島義左衛門所持の風簾に、この調書がある由、ある行脚僧の見る所として掲げてある。参考資料として收む。
○(二五)——元禄二年作。

(二六)

はつかあまりの月かすかに、山の根ぎはいと闇、こまの蹄もたどくしくて、
落ぬべき事あまたゝびなりけるに、數里いまた鶏鳴ならず、杜牧が早行の殘
夢小夜の中山に至ておどろく。

馬に寐て殘夢月遠し茶の烟

(笈日記)

(二七)

戸を開けば西に山あり、伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只これ
孤山の徳あり。

そのまゝよ月もたのまじ伊吹やま

(後の旅)

(二八)

同行なりける曾良、みちより心地煩^(マ)なりて、我より先にいせのくにへ行と
て、跡あらむたふれ臥とも花野原といふ事を雷置侍るをみて、いと心ほそか
りければ、

さびしさに書付消さんかさの露

はせを

(芭蕉翁略傳)

○(二六)——笈日記に

よれば巴火亭での書
讀といふ。野ざらし
紀行の本文と小異が
ある。貞享元年作。

○(二七)——笈日記に

も出づ。大垣の斜道
亭での句。元禄二年
作か。

○そのまゝよ——笈日
記に「其まゝに」

○(二八)——太田西巷

所持眞蹟を摹刻して
ある。元禄二年作。
奥の細道の初案と見
るべきものであらう。

(二九)

加賀の小松と云處、多田の神社の寶物として實盛が菊から草のかぶと、同じく錦のきれ有。遠き事ながらまのあたり隣におぼえて、

むざんやな甲の下のきりぐす

(猿蓑)

(三〇)

北國行脚の時いづれの野にや侍りけん、あつさぞまさとよみ侍りしなでしこの花さへ盛過行頃、萩薄に風のわたりしを力に、旅愁をなくさめ侍りて、

しほらしき名や小松吹萩薄

(雪丸げ)

(三一)

貞享五戊辰菊月仲旬

蓮池の主翁又菊を愛す。きのふは廬山の宴を開き、けふは其酒の餘りとすゝめて、獨吟のたはぶれとなす。猶おもふ、明年誰かすこやかならん事を。

十日菊

いさよひのいづれか今朝に残る菊

(陸奥千鳥)

○(二九)、(三〇)——
元禄二年作。奥の細
道參照

○北國——菊本氏藏の
眞蹟にもこの詞書見
ゆ。
○なぐさめ侍りて——
眞蹟「なぐさめ侍る
とて」

○蓮池の主——山口素
堂をさす。素堂遷を
愛す。
○明年誰か——杜甫、
九日詩「明年此會知
誰健」

素堂亭

十日菊

蓮池の主翁又菊をあいす。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝめて狂吟のたはぶれとなす。なを思ふ明年誰かすこやかならん夏を。

いざよひのいづれか今朝に残る菊

(笈日記)

(三二)

湖上堅田の何某木沅醫師のこのかみの亭にまねかれて、みづから茶をたて酒をもてなされける。野菜八珍の中に菊花のなます猶かうばしければ、

蝶も來て酔を吸ふ菊のすあへ哉

(むすび塚)

(三三)

あるじは夜あそぶことをこのみて、朝寐せらるゝ人なり。宵寐はいやしく朝起はせはし。

おもしろき昼の朝寐や亭主ぶり

(松濤集)

(三四)

我くさのとはつゆき見むと、よそに有ても空だにくもり侍れば、いそぎか

○(三二)——元禄三、四年の作。元文五年、

市山藏のむすび塚にて、芭蕉翁の遺集に、
揚ぐ。芭蕉翁の遺集に、
小異がある。篇突に、
は「片田何某が亭にて」と前書せり。

○(三三)——句は元禄七年九月大阪の車馬亭での吟。

○(三四)——貞享三年作か。

へることあまたゝびなりけるに、師走中の八日、はじめて雪降けるよろこび

はつ雪や幸庵にまかりある

(眞蹟・栞集)

(三五)

大津にて智月といふ尼のすみかを尋て、をのが音の少將とかや、老の後此あたりちかくかくれ侍しといふをおもひ出で、

少將の尼のはなしや志賀の雪

(芭蕉句選拾遺)

○

おのが音の誰人となん世にさたせられて、老の後志賀の里にかくれ侍しと也。いま大津松本あたり智月といふ老尼のもとに尋て、かゝる事などかたりけるつみでおもしろさに、

少將のあまのはなしや志賀の雪

(芭蕉翁發句集)

(三六)

笠は長途の雨にはころび、帯衣はとまり／＼のあらしにもめたり。佗つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂哥の才士此國にたどりし事を、不圖おもひ出て申侍る。

○(三五)——大津村田氏蔵、智月筆の詠草

にもこの詞書と句を

録し、終に「元禄二

年冬」とあり。又實

永元年刊奉納集には

「知月といふ老尼の

すみかを尋て」と詞

書あり。

○おのが音の少將

平安朝の藏家藤原信

實の女。後堀河天皇

の中宮に仕へ、おの

が音のつらきわか

はありとだにおもひ

もしらで雞や鳴くら

む」の詠により、お

のが音の少將と呼ば

れた。

○かくれ侍し云々

智月詠草「かくれし

といふを」

○(三六)——貞享元年

作。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

(冬の日)

(三七)

贈酒堂

湖水の磯を這出たる田螺一疋、芦間の蟹のはさみをおそれよ、牛にも馬にも踏るゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

(市の庵)

(三八)

いねく人と人はいはれても、猶喰あらず旅のやどり、どこやら寒き居心を佐て、

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

(勸進昧)

(三九)

大通庵の主道圓居士芳名をきくことしたしきまゝに、ま見えむことをちぎりと、つるにその日をまたず、初冬一夜の霜と降ぬ。けふはなをひとめぐりにあたれりといふをききて、

其かたち見ばや枯木の杖の長

(芭蕉庵小文庫)

〇(三七)——酒堂(珍額)は元禄六年夏、隠所から大阪に屋を移した。その時の作。

〇(三八)——元禄三年作。

〇(三九)——元禄元年作といふ。

〇ちぎりと——泊船集に「ちぎりしに」

〔追補一〕

○ 千梅が芭蕉五十回忌の追善集として撰んだ『千鳥の恩』（延享元年刊）に、「古翁眞蹟 一軸 千梅家珍」として掲げたもので、「此一軸は甚謂ある書記にして、翁元祿五年の春堅田葡萄坊にての製、天下未曾有の物也。千先生遷化の日遺物として予に傳へらる。云々」と、その傳來について述べて居る。千先生とは撰者千梅の師たる湖西堅田本福寺の住職千那の事である。随つて傳來正しいものと思はれるが、ただこゝに「元祿五年の春云々」とあるのは不審しい。當時芭蕉は江戸に在つたのだから、千那の居葡萄坊での書記といふ筈がない。しかしこれも單に千梅の思ひちがひだとすれば、強ひて疑ふにも及ばぬ。とにかくこの傳來を信ずるとすれば、芭蕉が湖南地方に滞在してゐた元祿三四年の事であらう。

内容は『葛の松原』等に芭蕉の言として傳へられる「俳諧に古人なし」の意と相通ずるもので、百年に及ぶ俳諧の流れを顧みて、その實に盛んなのは今の十餘年であると喝破したのは、即ち暗に談林以前の俳諧を否定して、そこに學ぶべき古人なく、求むべき古風なき事を説いたのである。文の末を略して掲げないのは遺憾であるが、これだけでも芭蕉の深い自信と盛んな

意氣とが窺はれる。

和歌は定家西行に風情改り、連歌は應安の式に定る。俳諧はやゝ百年に及、其實に盛なる事は十とせ餘にや侍らむ。然らば誰を指て古人といひ、何を求てか古風をしたはむ。

略末

大和高田町某氏の藏する傳芭蕉眞蹟で、原物未見であるが、その寫眞によれば芭蕉の眞蹟とはなし難い。恐らく眞蹟によつて臨寫もしくは摹寫したものであらう。随つてその内容は信ずべきものと思はれる。

蓮は花の君子なる物也、牡丹は花の富貴なるよし。早苗は汚泥より出て蓮より清し、秋は香稻實りて牡丹より富り。一物にして二草を兼、誠清く富貴也。

里人は稻に哥よむ都かな

芭蕉庵桃青

後川撰『梅の草帚』（明和八年刊）に、「わが暮柳舎につたへし其角が書る數條の中に」とし

て掲げ、なほ「右二章は祖翁遺戒とかや、予此意をおもふに、情に落るな、形にあそぶな成べし」と言つてある。これをそのまゝ信ずれば、芭蕉の語を其角が録したものと思はれるが、もとよりその確實性は保し難い。單に参考として掲げる。

情に落るは連歌の老人
形に遊ぶは俳諧の若者

○

三三頁「保美の里」の原據と思はれる眞蹟について、其節坊子禮撰『伊良胡崎』（寶曆九年刊）にその傳來が見える。同書に「いらこ崎にる物もなし鷹の聲と」あり、「此一章はいらこ崎ほどちかければみに行侍りて」と端書あり、其眞蹟は保美の里白梅下に傳へて家珍たり。（下略）と附記してあるのが即ちそれである。白梅下は保美の人路喬の號である。『句選年考』に保美の里の地頭と言ふのは、この路喬の子孫であらう。

○

一四四頁詞書類の（一）とやゝ異つた詞書が、坡山・東海撰『虚空集』（元祿十六年刊）に

左の如く見える。

ある人の草の戸を尋ね待りけるに、よそに出けるよしにて、年老たるおのこひとり留守を守り居けるに、垣ほの梅さかりなりけるを、是なんあるじといひければ、かのおのこ隣の梅にてさふらふと申に、いよく興うしなひて歸り侍るとて、

留主に來て梅さへ餘所の垣根哉

○

八六頁「烏之賦」は松篁撰『雪の流』（寛保三年刊）後卷に、

烏 賦

芭蕉翁

として掲げてある。これがこの文章の初出であらう。その内容は漢字と假字の相違が二三あるだけで、『折つゝじ』所載のものと少しも異なる箇所はない。——「天の川に翅をならべて」が「天の川の翅をならべて」とあるのだけが異なるが、それは『雪の流』の誤寫であらう。

○

三一頁「歌仙の讃」はもと淡齊（別號遊機）の撰『其木からし』（元祿十四年刊）に見え、淡齊の父井海が「雪しやれて翁閑けん芭蕉洞」を發句とした歌仙一卷を送つたのに對し、芭蕉が嘆美して書き與へたものであると言ふ。芭蕉洞と言つて居るので天和年間の作と推定される。

なほ遊機撰『櫻雲集』（享保十四年刊）にも掲げてある。今兩書によつて更めて全文を掲げる。

『櫻雲集』の方が眞蹟に忠實らしい。（『櫻雲集』の句讀は原本のまゝ）

いよの國松山の嵐ばせをの洞の枯葉をふいて、其聲哥仙を吟ず。噫琴^{ウツ}刁^{ウツ}たる風の音玉を鳴らし、金鐵のひゞき或はつよく或はやらかに吹て、且人をして泣しめ。人に心をつく。萬竅^{マンキョウ}怒號^{ウゴウ}響替て句毎の意味各々別也。唯是天籟自然の作者、芭蕉は破れて風飄^{フウヒョウ}。（其木からし）

いよの國松山の嵐ばせをの洞の枯葉を吹て其聲哥仙を吟す。噫。琴刁タル風の音。玉を鳴し。金鐵ひゞく。或つよく。或はややかに吹て。且人をしてなかしめ。人に心をつく。萬竅怒號。響替て句毎の意味各々別也。唯是。天籟自然の作者芭蕉ハ破れて風飄。

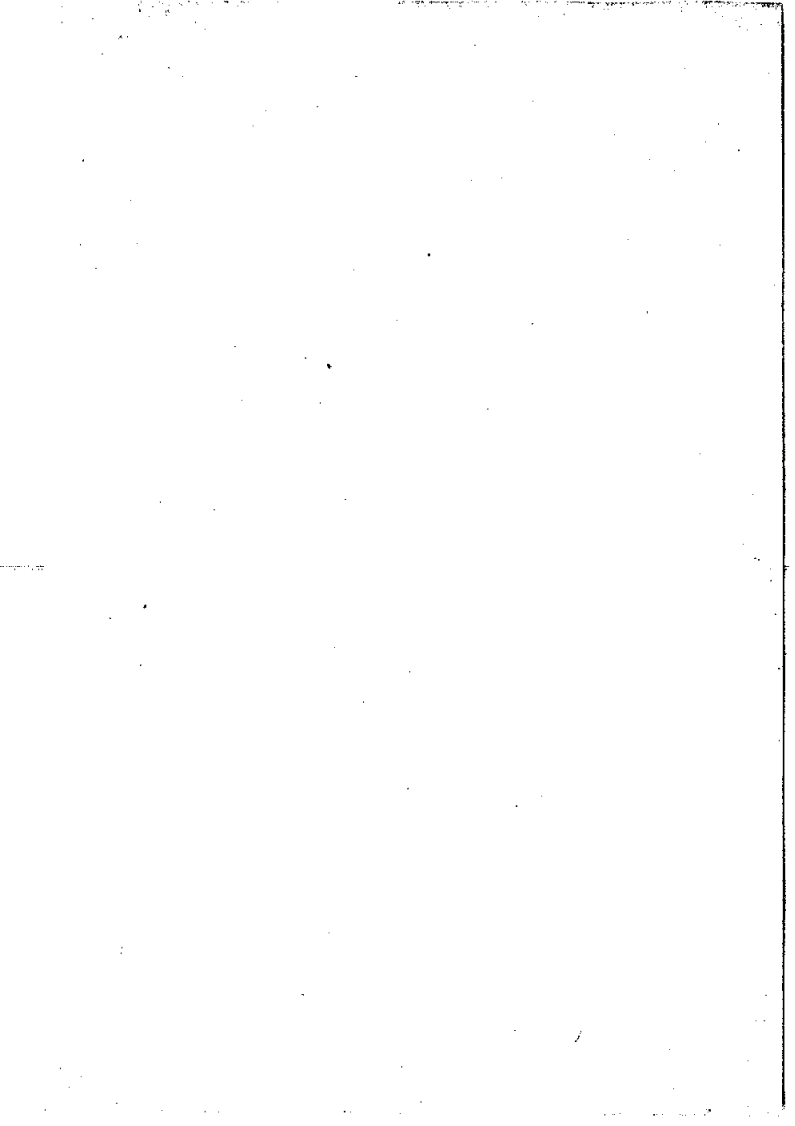
江上 芭蕉散人 圖（櫻雲集）

一八頁「竹の奥」の芭蕉眞蹟は近年まで竹内村に傳へられて居た由であるが今その所在を失して居る。寫眞によつて見るに『句仁名盡集』所出のものと漢字假字の異同ある外文章は同一である。

參

考

篇



一、鵜舟

『芭蕉翁眞跡集拾遺』による。勝峯氏の新編芭蕉一代集によれば、堺の伏見氏藏の眞蹟が存するといふ。今原物未見につき姑く参考篇に收む。句は貞享五年の作。

ぎふの庄ながら川のがひとて、よにことんしう言ひのゝしる。まことや
其興人のかたり傳ふるにたがはず、淺智短才の筆にもことばにも盡べきにあ
らず。心しれらん人に見せばやなど言て、やみぢにかへる、此身の名ごりを
しさをいかにせむ。

おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉

二、沙路の鐘

金澤の雪袋の隨筆『續句空日記』に載せてある。雪袋の紹介してゐる他の資料から見て、信

○心しれらん——後編
集「あたら夜の月と
花とを同じくは心し
れらん人に見せば
や」

憑すべきものと思はれるが、誤寫と覺しき點もあり、句も他に所見がないので、姑く參考篇の中に收める。元祿二年北越行脚の時の作と見られる。

むかしより能生の社に不思議の名鐘あり、是を汐路の鐘といえり。いつの代より出來たる事を知らず。銘のありしかど幾代の汐風にか吹くされて見へざりしを、常陸坊追銘とかや。此鐘汐の滿來らんとてひとさはらずして響く事一里四面、さるゆえに此浦は海士の子までも、自然と汐の滿干を知り侍りしに明應の頃焼止（マ、）せり。されども其殘銅を以て今の鐘、能登國中居浦鑄物師某鑄返しけるとぞ。猶鐘につき古歌など有りしといえども、誰あつて是をしる人なし。

曙や霧にうづまく鐘の聲

芭蕉

三、玉すだれ

陀岳撰『蟋蟀卷』に「いづれのとしの吟にや、何某家藏の一軸に翁の眞蹟」として、松風宛

の芭蕉の手紙を掲げてある。その句の詞書と見るべきものである。右の手紙は『芭蕉句選年考』にも引用してあるものと、二三語句の小異はあるが、もと同一のものと思はれる。又勝峰氏の『新編芭蕉一代集所載、名古屋川津鬼胡子氏藏の書簡とも内容同一である。紅梅の句は淡齋撰『其木がらし』（元祿十四年刊）にも出、芭蕉の作として確實性が認められるが、手紙は小異類似のものが存する事によつて、なほ疑ふべき餘地が存する。姑く參考篇に收める。句は元祿年中の作と推定される。

寔に／＼此世の極樂といふは外にあらず、御所のことになむ。此四五日以前上京にありて、御所の中を通りければ、おりふし雨ふりて心靜にいと有がたく、殿／＼の紅梅今をさかりと見へ申候。音樂さても／＼面白く、そぞろに涙をながして通り侍りければ、

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

四、伏見舟

一止・江三の『むつのゆかり』（萬延元年刊）に芭蕉眞蹟として掲ぐ。句は他に所見なく、疑を存する外はない。

寐に入る鳥と引かへて長樂の鐘をうしろに、下河はら祇園精舎の宵の燈も花か葉かまだ定まらぬ、謳ふ女の鹽から聲はむかしにかへて、うとましきと都の町をよ所に見て、こよひは竹のふしみなる舟の乗場につきてけり、といふ頃は如月の末やよひのはじめなりけらし。

船いそぎなれも汐干に行人か

はせを

五、龜子が良才

『枇杷園隨筆』（文化七年刊）に「右芭蕉翁眞跡徐英にあり」と附記して出て居る。眞偽の程も明かでなく、龜子が何人であるかも知れないが、姑く参考としてあげておく。年代未詳。

龜子が良才、是華原神童子か。且予が附句禁止之事、申分尤あさきにあらず。

○長樂——京都圓山の長樂寺。

されども生涯五十にちかく、天命私にはかりて今より十年、日數三百日、一日の愁に一日を損し、一夜の樂は一夜のよろこび、身に行ずることはなけれども、六塵おのづからちか付く。さればおのづからけがれすくなし。只三千六百の日數をかぞへつくす、無常迅速の觀中において何をかさたせん。しらず只一念動ずる風雅の情のみをしれども、いまだ宗因ごときの興作なし。宗因ごときの惡句なし。只善惡の兩意をいはむ。病魔仙狐の障をうかがふて、死するまで止事あらじ

六、蘭の香

蝶夢の『芭蕉翁發句集』に句の詞書として出て居る。句は『野ざらし紀行』中の吟で、『笈日記』には「美人圖」と題してある。『發句集』の詞書は『三冊子』の記す所に基いて、蝶夢が適宜加へたものではないかと思はれるが、——同書の他の詞書にもさういふ例が多いので、——とにかく参考としてあげておく。

ある茶店の傍にやすらひしに、我を見しり侍るにや、内へ請じて家女の料帟持出て曰、我は此家の遊女なりしを、今のあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とす。その頃難波の宗因此所にわたり給ふを見て、句を願ひ請たると、例おかしき事まで言出て頼に望侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人が句に、萬の葉のおつるがうらみ夜の霜と云句を前書にして、てふといひける女にあたふ。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

七、石臼之讃

『芭蕉庵小文庫』（元禄九年刊）に出づ。又『風俗文選』（寶永三年刊）卷之十、頌類にも、「石臼ノ頌」と題して収めてある。然るに越人の『不猶蛇』（正徳・享保頃成）の中に、

又予（越人）が芭蕉へ石臼の銘と云戯の文書、悪かるべきは勿論、殊に聞にくき所は御直シ可被下と、京に居られし時つかわし、予龜紙に書遣わせしを、翁定て書直シおかれし所も可有、予も草案の儘名も不書遣したるに、翁死後頭陀袋などに有しと見へたり。それを

被死時附居、左様の反古杯は彼（支考をさす）が取しと見へたり。文選とやら文を集たる物して、其内へ其石臼の銘を翁と名書入たり。予が昔若き時書たり。とても文杯と云様成事にてなし、若き時は猶以ての事なり。芭蕉の筆とは各別、若クさわがしき文なるに、芭蕉翁に名付る、其目の闇サ不調法さ、言語同断なり。今とても可見翁の筆か。其いきほひ文勢大きに異也。

と言つて居る。これによれば實は越人の文で、支考がそれを芭蕉の作と早合點し、更に許六がその誤を襲つたものと思はれる。事實越人の指摘した通り、その文勢から言つても芭蕉の作とするより、越人の作と見るべき點が多い。たゞしその中には芭蕉の添削の筆も加はつて居る筈であるから、姑く参考篇の中に掲げる事とした。『蓬萊島』にも収め若干異同がある。

石臼之讚

はせを

市中に有て俗塵によごれぬ物は、げにその始をよくするよりも、その終をとぐる事はかたし。商山竹林の猛士もなを出てつかへ、寛平・華山の上皇も終にたしかならず。たまたま是を見るに、唯石臼のひとつのみ、聖一國師は是をもつて肉身をやしなひ法身をする。民家にはまた麥茹そむるころよりも、

○俗塵に云々——蓬萊島——俗塵によごれぬ物はげにその終をとぐる事はかたし——
○終に——風俗文選「終り」

細き落す多に至るまで、片時もよ所にする事なし。其たかきことを論ずれば、役の優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひを道引功の上に立べし。上と下とふたつなるは、力たらざる者のために専なればなり。不斷土間に有て庭より外を見ぬは、謙に居る事の調へるにあらずや。かりにも黄姉の手にとられざることの、有がたきことをふかくさぐりしるべし。目なだらか成時は、かますを荷ふ老翁のいで來りて、こつ／＼とする音すみて、のちは季札が劍を嫁にかくることをはづべし。名をぬすむ盗人はあれども、石うすをぬすむ盗人はなし。またひとの心をみださざるの至りならずや。月さしのぼるゆふがほのかげに、獨はおどろの髪をまぐね、ひとり佛のまねをするあたなりにて、くるしきことを覺えず。挽まはす力に其飢をたすくるは、文王の始に仕たまへるに事たがはず。やゝいま様のむつかしき哥のふしにかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげると、しはぶきがちにわなゝかれたるぞおかしや。

○道引功——風俗文選
「道引きり」。芭蕉島
「道引春」

○哥のふしに——風俗
文選「哥のふしにも」

八、應變論

見風の『霞かた』（刊年不詳。明和頃か）に載せ、「此點を（マ、）應變論久しく文庫に古び侍るを、今文臺のつゐでよく寫しあらはす事、月の雲をのがれ、祖翁の俤を見るにひとし」と附言して居る。然るに几董は『點印論』（天明六年刊）にこれを疑ひ、

右の應變論といへるものは、略世にも傳寫し人のしるところ也。既に往年、賀の見風がすすみかたといへる集中にもこれを模寫して著し侍れば、蕉翁傳來のものといひとむきに心得たる人も多かるべし。然ども其文法全篇、恐らくは後に、門人の附會せるものならんもはかりがたし。是に限らず蕉翁直傳といひもてはやす書籍少からずといへども、いまだ其眞偽を分明にせざるもの多し。翁を敬、道を大切におもはゞ、龜忽に誤を傳ふべけんや。爰に蕉翁の古主、伊賀の國なる藤堂探丸子の家に傳えて、芭蕉翁の引墨を加えられし俳諧の一卷有。これぞまことに翁の奥印等も正しきもの也。しかるに其おもむき、右の應變論と違へるところもあれば、かの眞跡を乞もとめてうつしとり、爰に著し侍る。猶兩用相かうがへ、後學のとる所に任ずべし。

と言つて、別に藤堂家に傳へたといふものをあげてある。「舟となり帆となり」の句は一晶の作とするを正しいと見るべく、随つて共にその確實性を保し難いが、姑く兩者併せ掲げておく。

(一)

應變論

墨引點印の事は中古洛の貞室にして始まり、猥に其印を用るもの有、祕して用ざる者あり。今更一決しがたし。依て幻住庵の冬籠に正秀尙白等がもとめに應じ、本歌連歌の引墨を正し、俳諧に十五印の高下を分ヶ置には、桃青が私に極るとおもふ事なかれ。

初心の風子五字七字少も手柄なし。坐の句題に叶う時は此引墨を用ひ、少シ志厚キ時は脇に珍重など然らんか。二點は通用ゆるし、珍重あれば三點に及ぶ句なり。しかし全へんの長にも見へ難き也。

啼鴉はすべて句意の引墨と辨へ、尤吟聲新らしき時の用と能付合、其人其場の中の句にも押べき用もなく、能キをよきとあらはすのみか。

岳楚月は六印のため也。時分時節よろしくいひ叶へて珍鋪時に用ひ、尤觀

相俤の通用ニ押ス事もあるべし。

芙蓉樓雪は八印也。觀相天相俤等の手柄を長の秀逸とも見さだめがたき其時は。

長安夕鐘花長安花は全篇玉の玉たる句位はむるにも盡ず。

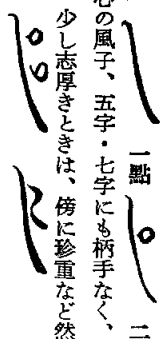
船となり帆と成ばせをの舟は、貞享のむかし東武の深川にして、予が庵室を世によばれ、今更捨難く、十五印のもやうとなすならし。すべては三點を長と心得、見分る句位は判者さりやくして手柄可有之にぞ。發句付合に點印の多少を分ツ事は、人のかしら立て其身持かたきやう能く心得べし。

(霞かた)

(二)

應變論

墨引、點印の事は、中古洛の貞室にしてはじまり、みたりに其印を用ふるものあり。祕して用ひざる者有。今更一決しがたし。よつて幻住庵の多籙に、正秀・尙白等がもとめに應じ、本哥連哥の引墨を正し、俳諧に十五印の高下を分チ置事は、桃青がわたくしにきはめるとおもふべからず。


 一点 二点
 初心の風子、五字・七字にも柄手なく、座の句題にかなふ時は、此墨引を用ひ、少し志厚きときは、傍に珍重など然らんか。

二點は兩用に評し、珍重あれば三點に及ぶ句也。しかし全篇の楚にも見えがたき也。

○啼鳩

二字印は都而句意の楚の引墨と辨へ、尤吟聲新しき時の用と、よき附合、其人・其場の中の句にも出すべき用もなく、能を能とあらはす而已歟。

○岳楚月

三字印は六印の爲也。時分・時節よろしくいひかなへて、稱美の時に用ひ、尤、俳・觀相の兩用に押も有べし。

○芙蓉樓雪

四字は八印也。天相・觀相・俳等の手柄を、楚の秀逸とも見定めがたき其時は。本ノマ、

○長安夕鐘華

五字印は全篇、玉の玉たる句を擧るにも盡す。

○舟登成帆土成風能芭蕉哉

芭蕉の舟は貞享のむかし、東武の深川にして、予が庵室の號と世に呼れ、今さら廢しがたく、十五印の模様になすならし。都而は三點も楚と心得、見分る句をば、判者作略して手柄有べきにも、發句・附合に點印の多少を分ッ事は、人の頭立てその身持よく／＼心得べし。

桃青

(點印論)

九、俳席の掟

『霞がた』に載す。もし信すべきものとすれば、元祿三、四年頃の作であらう。

今年、貞享の古式をあらため、嵯峨の時雨に硯を鳴らす事は、あるじ落柿舎が物數番より、丈草・千那・凡兆等をそゝなかし、文臺、月花の書式の初と

するもの也。

當番宗匠掟五定

一月花一句

一出會遠近

一短尺持參

一當番添削

一諸禮底止

右可悉知

一〇、俳席三ヶ條

芭蕉文集

桃鏡の『芭蕉翁眞蹟集』(明和元年刊)に、大津浮巢庵文素の所持として掲げ、「印あり除之」とある。

一、諸禮停止

一、出合遠近

但聲先

一、一句一直

幻住庵

桃青

雪月華一句

右三ヶ條舊式也

芭蕉庵桃青書之

一一、會式

梨柳軒の『俳僊遺墨』(萬延元年刊)に眞蹟を摹刻して掲げてある。

諸禮停止

出合遠近

但聲先

月華一句

又曰

鹿食鹿茶あるにまかせよ

酒亂に及事なかれ

芭蕉庵桃青書

一一、祖翁壁書

『一葉集』(文政十年刊)に「右四ヶ條祖翁の壁書と云傳ふ」として掲げてある。出所を詳かにしない。

一、席にして壁によりかゝり眠るべからず。

一、人のたばこ吞べからず。

一、我門の人は茶漬三石六斗喰ざるうちは、俳諧上手になるべからず。

一、無分別の場に句作あることをおもふべし。

一二、祖翁口訣

眠郎の『雪の薄』(安永六年刊)に「亡師麥浪舍に遊し頃、正風の意といふものを寫し置しが、今爰にあらはす」として掲げてある。即ち眠郎が先師麥浪の許で寫し取つたものであるといふ。

然るにこれを『一葉集』に採録して、「右の條々祖翁口決と云」と附言してあるので、恰ももと芭蕉自ら門人に教へた所を記録したものの如く信ぜられて居る。しかしその内容から見ても、その然らざる事は明かで、例へば「他門の句は彩色のごとし、云々」といふ一節の如き、『桃の杖』によれば許六の言葉である。思ふに夢浪か、その父乙由かが、諸書から正風の意とすべき言葉を抄出しておいたものであらう。たゞ比較的汎く知られて居るので、参考の爲採録しておく。

一、翁曰、格に入て格を出ざる時はせばく、格に入ざる時は邪路にはしる。
格に入格を出て、初て自在得べし。

一、詩哥文章を味て、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。

一、千歳不易一時流行。

一、他門の句は彩色のごとし。我門の句は墨韻のごとくにすべし。折にふれては彩色なきにしもあらず。心他門にかわり、さびしほりを第一とす。

一、名人は地をよく調しうへに、折にふれては危き所に妙有。上手はつよき所におもしろみあり。

一、等類作例、第一に吟味すべし。

一、古書撰集に眼をさらすべし。

一、我門の風流を學輩は、先鶴の歩行の百韻、多の日、春の日、瓢集、炭俵、猿蓑、あら野を熟覽すべし。發句は時代ノをわかつべし。

一、初心のうちは句數を好べし。それより藝情をわかち、大山を越て向の麓へ下りたる所を案ずべし。六尺を越んとほつするものは、まさに七尺を望べし。されど心高き時は邪路に入やすく、心ひくき時は古人の胸中を知る事あたわず。

一、俳諧は中より以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覺へたるゆへなり。俗談平話をたどさんがためなり。つたなき事ばかりをいふが、俳諧と覺得るは淺ましきなり。俳諧は萬葉の意なり。されば上天子より下土民までも味ふ道なり。唐明すべて中華の豪傑にも恥る事なし。唯心のいやしきをはじとす。

一、手爾於葉專要たり。我國は手爾於葉の第一の國なれば、先哲の作を味ひ、一字も龜末なる事なかれ。

一、句の姿は青柳の小雨にたれたるごとくにして、折／＼微風にあやなすもあしからず。情は、心裏の花をもたつね、眞如の月を觀すべし。附心は、薄月夜に梅の馨へるがごとくありたし。

未略す

一四、行脚掟

芭蕉翁の行脚掟と稱するものは、大江丸の『俳諧袋』、成美の『隨齋諧話』、予當の『關の清水物語』等によつて汎く知られ、石分の『芭蕉翁七書』・『一葉集』・『芭蕉翁一代集』・『蕉翁俳談秘録』等にも採録され、又何丸の梓行した單行本『芭蕉翁行脚十七條』の如きもあつて、一般に芭蕉の示したものの如く信ぜられて居る。しかしこの掟は元祿・寶永頃の古い書には全く見えず、鳥醉の『五七記』(寶曆十年刊)に野州那須郡高久の角左衛門方に傳へる芭蕉の眞蹟によるとして掲げたものが最も古い。その後三杵の『藤枝折』(明和九年刊)、眠郎の『雪の薄』(安永六年刊)、竹之坊の『ちから杖』(寛政二年刊)等にも收められて居るが、互に異同が少なくない。而してそれらの由來・異同等については、拙著『俳諧史の研究』所載「芭蕉翁行脚掟」

の中にやゝ詳しく考察を試みた通り、結局いづれも信じ難いものである。藤井乙男博士は更にこれが大淀三千風の行脚の條目によつて何人かが偽作し、高久にその眞蹟ありとして世を欺いたものと斷定された。(同博士著『江戸文學叢説』所載「芭蕉の行脚掟」参照)現在知られて居るだけの資料から言へば、博士の斷定は確説とすべきものであらう。即ちもはやこれは當然芭蕉の全集類から除かれねばならぬものである。たゞ從來その流布が汎いので、特にこれを採録して参考とし、併せてその偽作たる事を明かにした。

本文は諸書によつて異同が甚しく、文意の通じ難い點もあるが、すでに偽作と認められる以上校合註釋の必要もないので、今はその最も古い出典たる『五七記』に掲げるものを、そのまま收めるに止めた。

一、一宿再宿すべからず、あたゝめざる庭を思ふべし。

一、腰に寸鎖たりとも帶すべからず、惣而物の命を取る事なかれ、君父の難あるものは門外に遊べし、いたゞきふまぬの道忍びざる情あれば也。

一、衣類器財相應にすべし、過たるはよからず、足ざるもしかず。

一、魚鳥獸の肉好むでくふべからず、美食珍味にふける人は他事にふれやす

○しかず——本の
誤であらう。

き物也、菜根を咬て百事をなすべき語を思ふべし。

一、人の求なきに己が匂出すべからず、望をそむくもしからず。

一、たとへ嶮岨の境たりとも所勞の念起すべからず、起らば中途より歸るべし。

一、馬駕に乗る事なかれ、一枝の枯杖を己が瘡脚と思ふべし。

一、好で酒を飲べからず、饗應により固辭しがたくとも、微醺にして止むべし、亂に及ばずの節、幽亂起歳の戒、祭にもろみを用るも酔るを憎んで也、酒に遠ざかるの訓あり、つゝしめや。

一、船錢茶代忘るべからず。

一、他の短をあげ己が長を顯す事なかれ、人を謗て己にほこるは甚賤き事也。

一、俳談の外雜話すべからず、雜話出なば居眠して勞を養ふべし。

一、女性の俳友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬ事也、此道に親炙せば人をもて傳ふべし、惣じて男女の道は嗣を立てるのみ也、流蕩すれば心敦一ならず、此道は主一無適にして成ず、能己を省べし。

一、主あるものは一針一草たりとも取べからず、山川江澤にも主あり、勤よ

や。

一、山川舊跡したしく尋入べし、あらたに私の名を付る事なかれ。

一、一字の師恩たりとも忘るゝ事なかれ、一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ、人に教るは己を成じて後の事也。

一、一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず、さりやとて媚諂事なかれ、如此の人は世の奴也、此道に入る者は此道の人に交るべし。

一、夕を思ひ且を思ふべし、且暮の行脚といふ事は好まざる事也、人に勞をかくる事なかれ、しばしすれば疎ぜらるゝの言を思ふべし。

右翁眞蹟十七ヶ條の掟は野州那須郡高久の角左衛門方にありとぞ。

一五、雪見賦

「雪見賦」は『芭蕉文集』・『一葉集』等に採録してあるが、これはもと『和漢文操』に作者遷乙子として出て居るもので、評に「遷乙子は先師の隠號にして」とあるのを、芭蕉と解した誤に基いたのであらう。こゝに先師といふのは、例の支考が自分自身を稱したもので、随つて

この一文は芭蕉の作とすべきではない。よつて今全文を掲げない。

一六、雜

以下出所の疑はしいものを、参考の爲掲げる。

(一)

參宮の道すがらなつみとやらむいふ所の片原なる休所に、今をさかりと咲て
ふ藤に前後をわすれ、しばらく休らふ折から、あまたの句／＼を打ながめ、
予もつたなき言のはに筆を染て、

低ふ來る茶店も藤の花の縁

(芭蕉句解參考)

(二)

錦は故郷の晴着、旅は山／＼の色めくをぞ秋と思はれ、今や伊陽に歸り、爰
かしこ杖をならして竹馬の乗打も成がたく、黄昏の頃名駒の軒に來りて、久
／＼越に物語せし一蛙子、ケ様の名石をもとめて風友を待との折珍しく、誠
に心友の徳より彫出されたる面のゑくばかり感じて、詠入たる即時、

〇(二)——この眞蹟原
物未見。

手の冷るほどおもしろし硯石

(眞蹟)

(三)

湖水のほとりにたゞよふにはのうき巢のながれとどまるよすが、芦の一はの
情捨がたき事侍るまゝ、しばらく杖をすて草鞋をときて、

先たのむ椎の木もあり夏木立

はせを

(鳥の宿)

(四)

石山のおく國分といふ處に、人の住捨たる菴あり、幻住庵といふ。清陰翠微
の佳境いと目出たき眺望になん侍れば、朔月のはじめ尋入て、

先たのむ椎の木もあり夏木立

(芭蕉翁發句集)

(五)

ある人の斯聞ゆるとかや。淺井氏より一の瓢を傳へて、これに落書すべきよ
しきこへ侍る。其形見所有ていづれのかきほに咲るにや、たが家の隣にはひ
かゝれるや。かのほのく見つる花のたそがれといひけむぞ、坐右にもなつ

○(五)——新編芭蕉一代集による。原物未見につき參考篇に收む。

○ほのく見つる——

かしければ、かけて朝夕ながむといへども、終に一ふしのことばもなく、
 わなしくかへさむとせしに、

哥もいらず發句もいでぬ夕顔の
 實はかしましと唯かへすらん

芭蕉桃青

(井上氏藏詠草)

(六)

喜三郎何かしは、いなば山のふもとに閑居をしめて、納涼のためにたびく
 まねかれ侍しかば、

城跡や古井の清水先づ間はん

一七、和歌

『一葉集』(文政十年刊)に載す。出所を知らず。

源氏、夕顔の巻「よ
 りてこそそれかと
 見め黄昏にほのか
 見つる花の夕顔」

○(六)——新編芭蕉一
 見代案による。原物未

田中一聞身まかりて後、妻の加賀國へ引こし侍りて、いまはとふ人もなければ、かの墓所谷中の新ぼりへ、はじめてまかり侍て、

とふ人もいまはなつ野の草のはら

露ばかりこそ友とおくらめ

見ればかつむかしの夢のことくさを

思ひしられて袖ぞ露けき

人の身のいまのならひをありし世に

しらで過にしひとぞはかなき

のり姫の君身まかりしのち、ほどなく鈴木主水身まかりければ、

見し夢にゆめをかさねてかた糸の

心ほそくもおもほゆるかな

見るまゝにあなうつゝなやあだし野の

露ときえゆく夢のよの中

五月十八日は、れいの講習にてかの處へまかり、なき人を思ひ出て、

かよひにし人は夏野の草の露

その名ばかりはきえ残りぬる

いつしかにむかしの人としのばれて

ことの葉草に露かゝるらん

のがれすむみのゝを山のあはれさを

松のあらしに吹もつたへよ

題しらず

捨ぬまにすてらるゝ身の思ひ出を

しらでや人のまことゝはいふ

一八、狂歌・鄙歌

諸書に載するものを一括して掲ぐ。(一)は風國の『初蟬』(元祿九年刊)に出で、芭蕉にもかうした狂詠があつた事が知られて面白い。(二)は前記の中にすでに出た作であるが、『風俗文選』卷之七、歌類に鄙歌としてあげてあるので再録した。(三)は松毘の『雪の流』(寛保三年刊)に、「蕉翁一とせ竹青堂にて筆を染給はりしおかし哥一軸有」としてあげてある。(四)は

湖十の『古すだれ』(芭蕉五十回忌集)所載の「簾の説」の中に、「貞享の頃かときよ、遊行上人賦國法橋昌純はじめたれかれ一座連歌興行の後、俳諧の一卷なりて桃青の判乞れるに、その巻の中に簾といふ文字を簾と書れ侍る。此文字や天台のササ菩薩ヨヨ縁覺に習ひて書なせる略字ならん。芦荻文字の形似よりたるをうたがへるにや、翁荻かと添書ありしを、上人」とあつて、上人と翁との贈答の狂歌を録して居る。(五)は風光の『宗祇戻』(寶曆三年刊)に「汐越烏帽子岩に蕉翁の狂哥あり」としてあぐ。(六)は『一葉集』(文政十年刊)に收め、始の一首は「骸骨贊」として、次の二首は「はいかい歌」としてあげてある。なほ右の骸骨讃は今伊賀、田中氏の藏する眞蹟に、骸骨を描いて讃したもの和小異があるので、兩者併せ掲げた。右の眞蹟には川口竹人がこの狂詠の由來について、

蕉翁ひとゝせ東武より歸郷のみちすがら、

野ざらしを心に風のしむ身かな

其比蟬

吟子の許にて式之・槐市等が乞に任せ、この戲畫を残されしとかや。往し八月十四日夜淨珠尼公手つからこれを給るとて御句有。

われもその風を身にしむ月の夜々

寛保第二初冬日記之 寓窩子竹人

と書添へてある。淨珠尼公は蟬吟の母堂といふ。

藤

(二)

ふもとより梢にかゝる藤の花

腹一はいのながめなりけり

あみざこを升にはかりて賣人は

かふ人よりも哀れ也けり

猪の稻くふ事はさもなくて

米くひあらず人のにくさよ

おもふ事二ツのけたる其あとは

花のみやこも田舎なりけり

羽紅が尾になりける時に申遣しぬ

九重の内には海のなきものを

何とてあまの袖しぼるらん

無名庵の歸りに雪にあふて申遣しける

芭蕉

同

同

はせを

はせを

かさすてゝ尻からぐべきかげもなし

去來

でつちもつれぬ雪の夕ぐれ

かへし

笠さして尻もからげずふる雪に

芭蕉

定家の卿もはだしなるへし

(三)

自得

はせを

思ふと。ふたつのけたる其あとは。花のみやこも。ゐなかなりけり。

題しらず

おなじく

あみ難^ヤ喉^{ノド}を。升^{マス}にはかりて賣人は。かふ人よりも。あはれなりけり。

(三)

三首

ぬけがらや一句の道理おもほえず

はせを

ゆめか寐言か見か重^{オモシ}一か

三句めの放れもしらず猶四五句

おなじ所に迷ひ子の身は
下手は付上手は寄と云をける
古き言葉になみだ落けり

(四)

上人

ものゝ名も所によりてかはるなり
京のすだれは江戸のあしども
とふたゝびいひやられしを、翁かへし

あみ出しのすだれもしらぬ竹かぶり
まだれくとかけてこそ見れ

(五)

沙越

誰か又岩にゑぼしをきせつらん
かた／＼としてよき男哉

(六)

はせを

骸骨贊

みな人のこれをまことのかたちぞと
 しからば此身がすぐに極樂
 誰も見よこれをまことのかたちぞと
 しらばうき世はぢきにごくらく

(一葉集)

(眞蹟)

はいかい歌

としの夜のふけゆくまゝにことしげき
 都の市の音しづかなり
 よるとしのめにはさやかに見へねども
 まめの音にぞおどろかれぬる

○よるとしの——古今
 集「秋來ぬと目には
 さやかに見えねども
 風の音にぞおどろか
 れぬる」のめちり

芭蕉文集について

芭蕉の文集として最も汎く知られて居るのは、蝶夢の『芭蕉翁文集』である。その序に編者自ら述ぶる所によれば、

土芳が芭蕉文選をもととし、乙州が笈の小文、史邦が小文庫、許六が文選、支考が文操・文鑑のたぐひの諸書に散在せしを拾ひて、芭蕉翁文集と題して、云々。

とあつて、纂輯が何に據つたかをほど明かにして居る。芭蕉の遺文を収めたものとして、原據的なものを求むれば、實際まづこれらの諸書をあげねばならないであらう。しかも芭蕉歿後二年にして刊行された『芭蕉庵小文庫』（元禄九年三月刊）にすら、『石臼之譏』の如き杜撰な混入が存する。これは勿論全く不注意に基くものと思はれるが、支考の『本朝文鑑』や『和漢文操』に至つては、故意の捏造さへ見られる。とはいへ以上の諸書が世に公にされ、芭蕉の遺文を今日に傳へた功績はもとより没する事が出来ない。然るにその中土芳の『芭蕉文選』といふもののみは、明和・安永の頃纔かに蝶夢の目に觸れた事が知られるにすぎず、今日すでに湮滅に歸したものだとなれば、誠に惜しむべき事である。

『芭蕉庵小文庫』の如きは芭蕉の遺稿を最も早く集録した點で、特に注意さるべきものではない。『風俗文選』・『本朝文鑑』等もまた同

様である。だから芭蕉の文章のみを特に集録することは、恐らく土芳の『芭蕉文選』に始まると言はねばなるまい。それだけ同書の世に傳はらない事は、遺憾にたへないのである。蝶夢の『芭蕉翁發句集』の序に、明和の初年伊賀に遊んで土芳自筆の蕉翁句集を得た事を述べ、なほ「別に蕉翁文集奥の細道の二冊あり」と言つて居るのが、即ち『芭蕉文選』の事であると思はれ、當時土芳自筆の文集はなほ伊賀に存して居たのである。而してそれは今見る事を得ないが、とにかくその内容は『芭蕉翁文集』の中に全部收められて居るわけである。

土芳の『芭蕉文選』の編纂は、たゞ師の遺作を尊ぶ門人の情に出たのであるが、享保以後所謂蕉風復古の機運と共に、汎く芭蕉の作品を蒐集採録する事が盛んとなり、こゝに本格的な芭蕉文集の纂輯が見られるに至つた。その業は芭蕉の句集に比すればやゝ遅れたが、寶曆頃にまつ松村桃鏡の『芭蕉翁文集』が成つた。桃鏡は蓼太の門、江戸の住、もと伊賀の人で祖父猪兵衛は芭蕉の甥とも傳へられて居る。『芭蕉翁眞蹟集』（明和元年刊）の編者として知られ、又『湖東問答』（寶曆十一年刊）の原本はその家に傳はる所であつた。さうした桃鏡に芭蕉文集の編があつた事は當然とも言ふべく、又彼こそ眞に最初の芭蕉文集の編者として注意されねばならぬ。然るにこの書は遂に刊行の運びに至らなかつたものもしく、わづかに積翠の『芭蕉句選年考』等に若干引用されて居るくらいで、殆ど世に知られて居ない。よつて今傳寫の一本により、その内容を大體紹介しておく。この傳寫本は安井小西氏の紹介したものである。）

先づ巻頭に雪中庵蓼太の序があり、次に桃鏡が次の如く自ら序して居る。

祖翁生涯の句選あり、又拾遺あり、附合集あり、爰に尊むべきは俳の一道を開き、文に錦繡をかざやかせて、今猶好士此筋にもとづく。されや諸集にあらはれずして、泥中の玉にひとしき消息の類ひまで、たれかれに便て摸寫し、おのづから机上にみち／＼て一帖となれば、無双の文集なりけらし。よてもて雪中蓼師の序を乞て、予が家の青氈にせんと趣を述侍りぬ。

寶曆辛巳冬

水上亭桃鏡

即ち寶曆十一年冬に成つたもので、實に彼の致する際である。蓼太の序には「これをいたつらにひめ置んよりは、同志の人／＼にも見せばやとはし書を乞るゝにまかせて」とあるので、もと公刊の意があつたらしいが、その物故によつて果さなかつたのであらう。而して集中に收むる所は左の通りである。

卷之一 芭蕉を移す辭・柴門辭・僧專吟餞別之詞・月見賦・既望賦・閑關說・煤掃の説・幻住

菴記・十八樓記・紙衾之記・嵯峨日記・伊賀新大佛之記

卷之二 甲子吟行・鹿島記行・庚午記行・更科記行

卷之三 奥羽記行

卷之四 銀河序・曠野序・閑居箴・机銘・澁笠銘・座右銘・嵐蘭誄・鄙歌(二首)・東順傳・栖去辨・石臼頌・西上人像讚・卒兜婆小町讚・杵折贊・句合跋(續の原)・行脚掟・吊初秋七日雨星文・白髮吟・贈風弦子號・無題(土峯の賀・更科姨捨月之辨・ある人の草の戸を尋侍りけるに・色と義の道・歳暮・旅人・贈酒堂・本間主馬か宅に・須磨・駿河路や・五月の雨風

しきりにおちて・やわらかにたけよ・藤中將實方の塚は・此里をほびといふ事は・蕙の籬の
附句)

卷之五 書翰二十二通・遺狀・遺物覺

文章書翰共に逸章とすべきものは殆どないが、卷之四所載の「贈風弦子號」の如きは本集以前に所見が無く、『芙蓉文集』所載のそれも恐らく本集によつたものであらう。又保美の里の一文も本集によつて始めて傳へられたものである。その他校異に資すべき點はなほ少くないと思はれるが、遺憾ながら傳寫本に誤寫が多く、今後原稿本もしくは良寫本の出現を俟つて參考とする外はない。ついで小林風徳の編集になる『芭蕉文集』二卷が出た。別に文集竟宴の附録一卷が添うて居る。安永二年六月の跋があり、その年の刊行であらう。收むる所は

松島賦・月見賦・既望賦・雪見賦・東順傳・柴門辭・納涼辭・芭蕉を移す辭・贈許六辭・煤掃辭・文字摺石・壺碑・閉關說・曠野集序・銀河序・みなし栗集序・笈文序・卒兜婆小町贊・西行上人像贊・骸骨畫贊・歌仙の贊・閑居箴(以上天卷)・常盤屋句合之判・十八樓記・更科記・洒落堂記・幻住菴記・紙衾記・伊賀國新大佛記・石白頌・机銘・坐右銘・澁笠銘・棲去辨・更科焼捨月辨・嵐蘭誄・吊初秋七日雨星・吊古戰場文(以上地卷)

の三十八篇で、これまた「歌仙の贊」の一篇の外特に逸章とすべきものはなく、又中には紀行の一部を勝手に截斷して一篇としたものも少くないが、とにかく集録の功は認めねばならぬ。次に風徳の撰に遅るゝ事二年、安永四年十一月關東によつて『俳諧蓬萊島』三冊が刊行された。天卷

には芭蕉の歌仙三卷と端書ある句十一章を収め、地・人の二卷に

松島賦・堅田十六夜賦・月見賦・柴門辭・憐捨子辭・移芭蕉辭・栖去辨・姨捨月辨・閉關說・阿羅野集序・銀河序・西行像讃・卒兜婆小町讃・石臼讃・座右銘・澁笠銘・机銘・東順傳・白髮吟・閑居箴・幻住菴記・十八樓記・紙衾記・伊賀新大佛記(以上地卷)・落柿舎日記・大和紀行・鹿島紀行・更科紀行・野晒紀行・吊初秋七日雨星・吊古戰場・松倉嵐蘭詠・加賀一笑諺(以上人卷)

の文章三十四篇を収めてある。この書は板行されたものであるが、流布が比較的汎くなかつたものか、從來知られることが少かつた。中に收むる「移芭蕉辭」の如きは、『三日月日記』所載のものとは全く異り、本書によつて始めて紹介されたものであるが、最近に至るまで芭蕉全集類にも採録されなかつた。

『蓬萊島』と殆ど時を同じくして蝶夢の『芭蕉翁文集』二冊が出た。安永五年正月人日に識した自序があり、當時刊行されたものと思はれる。その編纂の由來については既に述べた。收むる所は

松島の賦・既望の賦・鳥の賦・芭蕉を移す辭・徒然の詞・小督塚の辭・柴門の辭・許六に離別の辭・僧專吟餞別之辭・笠張の説・煤掃の説・閉關の説・栖去の辭・夢の辨・曠野集の序・銀河の序・續原集跋・伊勢紀行の跋・十八樓の記・壺碑文の記・紙衾の記・幻住菴の記・洒落堂記(以上上卷)・甲子吟行・鹿島紀行・卯辰紀行・更級記行・石臼の頌・雲竹の讃・杵折の贊、

卒都婆小町の贊・西行上人の讃・閑居の箴・自得の箴・机の銘・座右の銘・東順の傳・古戰場を吊ふの文・嵐蘭の詠（以上下巻）

の三十九篇で、その中本書に始めて採録されたものは「伊勢紀行の跋」と「雲竹の讃」の二篇だけである。又「徒然の詞」・「小督塚の辭」・「夢の辨」等は『嵯峨日記』の拔萃であり、「古戰場を吊ふ文」も『芭蕉文集』・『蓬萊島』と同じく『奥の細道』の一節をそのまま獨立させたものである。のみならず「石臼の頌」の如き、『小文庫』以來の誤がなほ正されて居ない。けれどもその底本には土芳の稿本が用ひられて居たわけであり、芭蕉研究家としての蝶夢の名もまた定評があつた爲か、從來最も汎く世に行はれた。随つて芭蕉の遺文纂輯の功は、實際上やはり第一に居ると言はねばならぬ。

芭蕉の文集としてなほ芭蕉全集類の文章の部がある。即ち『一葉集』・『袖珍鈔』等で、就中『一葉集』には新しい材料をも二三加へ、「石臼讃」を除いたり、眞偽の疑はしいものは別に眞偽不審之部に収めるなど、極めて學究的な態度が見える。更に明治に入つて花の本秀三・月の本素水の『芭蕉翁一代集』、大正年間に於ける沼波瓊音の『芭蕉全集』等、編纂上進歩した點が頗る多い。又最近では勝峯晋風の『芭蕉一代集』、費川他石の『芭蕉全集』は最も注意すべきものであり、萩原蘿月の『芭蕉翁文集補遺』（改造文庫）は總計七十三篇を収めて、蒐集頗る努めて居る。しかしこれを芭蕉句集に比すれば、桃鏡・風徳等の纂輯以後新材料の増補の如きは極めて少い。最近の編纂にかゝる全集類に於ける採録が、六十篇乃至七十篇を數へると言つても、その中には從來

文集として收めなかつた句合の序跋や、句の詞書類等を新に採録したものが多く、全然新しい材料といふのはあまり見出されない。これは元來芭蕉の遺文が、非常に多く存在したと考へられな以上當然のことで、今後とても眞蹟類の發見以外に、新材料を加へる事は多く豫期されない。だから茲に新に芭蕉文集を編するには、むしろ從來の資料の整理と、その本文としての正確を得る事に努むべきで、即ち眞偽の鑑別を嚴にし、本文として最も信すべき原據を求める事等に、主眼が置かれねばならないだらう。この岩波文庫『芭蕉文集』の編纂に當つても、専ら右の方針によつて業を進めた。だからこゝに始めて紹介された文章といふのは、恐らく一二篇にすぎないかも知れぬが、各篇毎にやゝ詳しい解説を施し、出来るかぎり年代を明かにする等、從來の文集類に比して幾分信憑の度を高める事に努めた。勿論なほ遺漏杜撰は少くないであらう。今後版を改める毎に出来るだけの補訂を加へて行きたいと思ふ。

額 原 退 藏

〔追補二〕

○

近江松本の原田氏陸芝、福井氏貞普共撰の『奉納集』（寶永元年刊）に「此讚三井の寺院ニアリ」として、腰袋をつけ破笠をもつた老婆の圖（小町か。「信之筆朱印、他筆寫之」とある）に左の如き文を掲げてある。五五、卒都婆小町讚參照。

應定光阿闍梨之寛（マ、寛の誤か）芭蕉桃青

たふとさや雪ふらぬ日も衰とかさ、かさもたふとし。

又爰にあらぬみのも貴し。其かたちある時はたましゐ、歳のまほろし今爰に現す。いづれの人かうつしとゞめて千歳もたふとし。いかなる人か語傳へ、あなたふとく笠もたふとし。

出 文 協 承 認

7 50392

昭和五十七年五月二十五日
印刷發行
（五十部）

發 行 所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

印刷者

發行所

認註者

東京市神田區
白井 藤太郎
三丁目十一番地

東京市神田區
岩波 茂雄
一ツ橋二丁目三番地

額原退藏

芭蕉文集 ★★

定價 四十錢 ㊦

（永井製本）

印刷社 興 精

（一四東東）

配 給 元

東京市神田區
新路町二丁目九番地

岩 波 書 店

電話九段〇一八七番（代號）
振替口座東京三六二四〇番
今買番號一〇二〇三七

日本出版配給株式會社

すまじ存く度ひ頁を任責に久永はて就に物版出の店小
。いさ下で出申御へ店小接直は合場の等丁觀・丁落らか

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。書では民を愚昧ならしめるために學識が最も狭き當字に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に俵せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の實務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は毅力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を潰壊なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうはしき共同を期待する。

昭和二年七月

—

